

何等の意義を有するか、然かも憲法制定會議及立法會議の平等原則の中にも、亦一種の論理が存した。如何となれば凡ての平等には積極的及消極的の両面がある、^{積極的}消極的に言ひ現はせば、平等は、凡ての制限を人格の完全なる識認に依つて撤廢することを要求する。消極的平等は個人の先天的不平等を豫想し、之を基礎として、各個人に對し、彼等が最高の階段に登攀する可能性が開かれて居なければならぬといふことを論結する。即ち最後の勞働者も、尙ほ克く、國家に於ける指導的役割にまで顯達すべく何等の障礙も其途に横はること莫からしめんが爲めに、身分、門閥、職業等による優先と特權とを否定する。一言にして之を蔽へば自由主義の這般の消極的平等は、「法律の前に於ける平等」の謂である。信じ得る歴史の始まつてより以來、平等の傾向がローマ人血液に潜在すること、尙ほ自由傾向のケルマン人に於けると一般である。カトリック主義(希臘語 *Katholikon* より來る、全般に亘りての意)は、宗教的表被によつて羅馬至上權の世界主義的傾向を包むこと、恰も新教主義が個人主義的傾向を藏すると同様である。前者にありては、類に對する興味が主となり、後者にありては人格に對する興味が主となつて居る。前者は普遍的規則宗教であり、後者は思索宗教である。前者には「神の前に於ける凡ての人の平等」の假定があり、後者には「各個人の自由なる思索」の要求がある。

佛國革命の憲法制度會議及立法會議を支配したものは、法律の前に於ける平等の感情であつた。特に吾人が、古來の革命者流の中にありて最も節制あり、歴史的に觀て唯一の正しきものと看做さなけ

ればならない黨派、即ちデロンド黨、即ち、自由主義的市民、富裕にして教養ある中流階級の代表者が、上記會議の牛耳を執つて居た。歴史的に觀て此黨派は、從來の貴族的支配よりプロレタリアの支配への自然なる推移階程を形成したが故に、政治の權利を有するものであつた。自由主義的市民階級が命數を終ふるに及んで、第四階級は初めて彼れの力を試むべき運命に際會したのである。唐突なる推移の必ず失錯を以て終るべきは歴史の因果が之を要求する。而して、當時議場の高所に蟠居した左翼山岳黨にして、貴族支配より賤民支配への推移の決して無造作に非ざることを語る丈の歴史的洞察力を有つて居たならば、大革命の名譽の楯は清淨に留まることを得たであらう。然かも事實は之に反し、この恐怖政策家は、彼等の狂氣じみたる流血政治によつて全然此楯を汚染し、革命の血みごろなる旗が、他の諸國民の冷靜なる思想を有する者をして熱狂者の理想を賞讃せしめず、寧ろ之を嫌惡憎疾せしむるに至つた。恰も最近露國山岳黨の恐怖政策が全世界の市民の反感敵視を買ひたると全然其揆を一にする過程が、當年佛國革命の際にも世界の輿論の中に起生した。凡ての革命の途は血を以て洗はるゝことは疑を容れない、而かもダントン(一七五九—一七九四)、マラー(一七四四—一七九三)、ロベスピエール(一七五八—一七九四)等の途は、決して道義ある人々の爲めに模範を垂るゝことはいであらう。彼等の名を露國風に改めても同様である。血の罪は竟に之を濯ふ由が無い。

事、専ら王國と貴族と教會との權力を打破するにあつた限り、民衆の間には、決して黨派分立の憂

がなかつた。各人は市民にして、その總計は國民であつた。憲法制定會議と立法會議との存続したる間（一七八九—一七九二年）、市民と勞働者とは、差別を意識することすらなしに肩を駢べて從來の特權階級を敵として戦つた。是れ憲法制定會議にも立法會議にも、社會主義的若くは共產主義的印象を有する法律が一箇條も發布せられなかつた所以である。反對に此等立法體の最高原則の一は、財産の尊重、聖視及不可侵であつた。

三、共產主義的思想

然るに一朝共同の敵——王冠と長袖と——が撃破せらるゝや、各俱樂部、就中、ジャコバン俱樂部が共產主義的醗酵を始めた。醗素には毫も不足する所が無かつた。第十八世紀中、共產主義的論客は佛國に於いて菌の如く簇生した（註二）。モレリーは、彼れの國家小説「バジリアード」に於いて、及び更に大膽露骨に、かの颯風を髣髴せしむる「自然の法典」に於いて、哲學的自然法を基礎とする完全なる物貨平分を要求して居る。マブリ（一七〇九—一七八五）は、その警拔なる著書「立法論」に於いて、經濟的平等無き政治的平等は、當然一個の物の破片に過ぎず、随つて私有財産制の存続する限り、凡ての平等は死文空紙たるに止まることを、巧妙なる辯證を以て論述して居る。温健なるコンドルセ（一七四三—一七九四）すら尙ほ且つ、その「人間精神發達史論稿」（一七九四）に於いて、「凡て

の富はその種類の如何を問はず、適當以上に若くは單に有用といふより以上に財貨を私有する限り、掠奪である」と謂ひ、最後に熱血兒ブロッ（一七五四—一七九三）は後來奇妙にもデロンド黨員、即ち穩和なる民主々義者として、幾萬の犠牲と等しくギロチンの下に命を殞したに拘はらず、當初は年少氣鋭、幾多のバムフレットに於いて私有財産は自然に對する冒瀆であると公言して憚らず、かの後年ブルードンによつて有名となつた警句「財産は窃盜也」の先鞭を着けたかの觀があつた。此等の諸家はあるが、併し此時代の特色たる「幸福なる野蠻」即ち架空の自然國家に對する滿悅心辭を最も熱烈に表現したる、最後且つ最重要なる者としては、ルソー（一七一二—一七七八）を挙げなければならぬ。ルソーは謂ふまでもなく現在の社會状態に於いての財産及家族を是認する、併し乍ら彼は此の社會状態其自身を、不健全にして徹頭徹尾詭詐と虚構とより成るものとなし、而して古代キニク派の語調を籍り、あらゆる語氣に於いて「吾人をして自然に歸らしめよ」と獅子吼した（註三）。彼に取りてスバルタが模範國家であること、恰も當年のプラトンに於けるが如くであつた。即ちルソーの要求する處は、正しく文化の否定と生活のあらゆる愉樂の放棄とに外ならない。彼に取りて、恰も彼れの先驅者たるキニク派に於けるが如く、最高原則である。併し乍ら、吾人は平等一様に華奢なる生を營むこと能はざるが故に、吾人は平等一様に貧窶の生を營まなければならぬとなした。即ち、彼にありて、文化の現在の階段は、平等原則の怪神に犠牲として捧げられたのである。ルソーは、サン・ヂュ

スト若くはバブーフの意味に於ける共産主義者に非ることは勿論である。

斯くの如く、革命の當初佛國文學界に於ける共産主義的酵素は、決して乏しきを憂へなかつた。當時佛國に於いて蔓延した社會思想は、憲法制定會議の議員中に於いてすらその信奉者を見出した。ミラボー（一七四九—一七九一）は全然自然法説の呪縛の中にありて「人間は、原始状態に於いて單に自己の双手の勞働より生ずる果實に對する權利を有するのみ」となし、又カザレ（一七五八—一八〇五）は、案するにアダム・スミスを宗として、卒直に「財産は勞働を基礎とす」と主張した。

此等の共産思想は、憲法制定會議及立法會議に於いてこそ當初何等の實際的效果を示さなかつたが、政治的俱樂部に於いては之と反比例に益々活潑深刻に論議せられた。然るに、此等俱樂部就中デヤコパン俱樂部は日を趁うて勢力を増大し、遂に立法的集會を正式に支配するに至つた。而してサンキユロット即ちプロレタリアが萬丈の氣焰を上げつゝ、極めて眞面目に從來の共産主義的夢想に實際的形態を與へんと試みたのも、實に此等の俱樂部員及びフィリップ・エガリテ（オルレアン公ルイ・ジョセフ・フィリップの異名、彼は顯貴の身を挺してデヤコパン黨と結んだ故に、「平等」の名を以て呼ばるゝに至つたのである——譯者）に率ゐられてバレイ・ロアヤールに出入する一味であつた。當時佛國及びその心臓たる巴里に於いては、凶作と過れる經濟政策とに累せられて物資缺乏甚だしく、時としては飢饉状態に瀕することも稀でなかつた。斯くの如き經濟的慘狀に直面しつゝ、一方政治的勝利に酣醉する

プロレタリアは、單純なる論理を以て自問自答しなければならなかつた。「辛苦して獲得したる政治的自由と平等とは、吾人に取つて果して何の益する所があつたか？ 從來吾人は餓ゑなければならなかつた。今や吾人は、自由をして餓ゑしめなければならぬ！」

四、恐怖政治

茲に於てか民衆の本能は曩に憲法制定會議が華々しく宣言した「凡ての市民の平等」に於ける缺陷を感知した。而かも民衆が自由と平等とは——絶對的に之を取れば——永久に解くべからざる矛盾であることに尙ほ未だ想到しなかつたことは、眞に奇とするに餘あることであつた。若し余が余の十分なる自己發展の自由を有するならば、絶對的の平等は決して之を將來することを得ざるものである。蓋し各人の能力は先天的に差別を示すものなるが故である。言ふ心は、凡そ平等は上に述べたる消極的方面と相並んで、亦その積極的方面を有する、即ち人間の個性は本來自然に相等しく、唯だ教育、教養及遺傳によつて相異するに至つたとなすものである。此がルソーの立脚點でありロベスピエールが殆ど奴隸的に之を遵奉したものである。併し乍ら若し吾人が這般の積極的平等を庶幾するならば、吾人は凡ての個性を窒息せしむることを求めなければならぬ。然るに吾人の社會状態にあつては、斯くの如き積極的平等に對して、殆ど超ゆべからざる障礙が屹立する。假に貴族、僧侶、職業組合の特權

の如き外面的特権は、一朝にして之を破棄し去ることを得べしとするも、其處には或は遺傳せられ、或は獲得せらるゝ、理知的並に經濟的特権があつて、此等は到底決議によつて廢止することの出來ないものである。而して此種の特権には三様がある。即ち、精神、教養及財産、是れである。此最後のものは、憲法制定會議によつてすらも、侵すべからざるものと宣言せられたものである。故に假令吾人が如何に焦燥して積極的平等の實現に努力するも、吾人は決して、平等なる精神的素質を有し、平等なる教養を有し、平等なる富を有することが出來ない。此の間隙は永劫に超え難きものと斷念するに至當とするものであつた。而かも革命によつて激成せられたる當時の民衆の情感は、政治的並に哲學的狂想にすら一定の方式を與ふる程の熱度に達した。即ち吾人は庸劣なる者、無教養なる者及び財産無き者を、顯惜なる、教養有る、及、富める者となすことが出來ないから、吾人は一層のこと、此等長所ある者を根絶し、之によつて爾餘の賸々者流相互の間に、積極的平等を實現することを得せしむべしとの結論に到達したのである。然るに若しそれが權力を擅にしたならば、佛蘭西全土の知識を一舉にして烏有に歸せしむることを得べかりし狂想は、幸にして一個の頭顱に容れらるゝには餘りに大きく、漸く三個の頭顱に分配せられた。ダントン、マラー、ロベスピエール、是である。此のプロレタリア的三頭政治所謂恐怖政治家は、唯だ、あらゆる社會的不平等の破壊によつて凡ての市民の政治的平等を、企及せんと欲する傾向に於いてのみ一致して居つたが、此目的に到達せんが爲めに彼等が提

出したる手段は、之に反して各々月露の差を示した。此の恐怖政治がボルシェヴィキ的方法に適用せらるゝことは頗る自然の理である。歴史自身は繰返さない、佛國革命の恐怖政治は必しも全然ボルシェヴィキの政策ではない、而かも露國は歴史の嚴峻なる教訓を遵奉しなかつた。然らずんば、モスコの巨頭等は、彼等の迂餘曲折の道程を節約し得たであらう。一九二二年春のゲヌア會議に於いて、「共和的」佛蘭西が極端資本主義を代表した間に、「未開」露國が「共產主義」を説教したことは、正に歴史の皮肉である。昨是今非、乾坤は一轉した。

最も放縱なる快樂主義者ダントンは、ヴォルテアの亞流として享樂の平等を欲した。彼れの説に従へば、人が自ら享樂を斷念し、之と共に他人をして斷念せしめんことを欲することは誤である。寧ろ遺言能力の制限により凡ての人をして共に享樂せしむるといふ意味に於いて、彼等を積極的に平等になすべきものである。彼は、獨り自分に享樂を許して他人に之を容さざる貴族主義者ではない。彼は享樂の民主主義者である。而かも彼は同時に、吾人が快樂感に於いても先天的に平等無差別に非ざること、並に、此の如き快樂感の不平等によつてこそ、世に無限の撞着衝突を生ずるものであることを、全然看過した。又、ダントンは精神と教養との味方であり、私有財産の敵であつた。蓋し前二者は快樂の成全的部分を成すものであり、後者は財産最高限度の命令及び遺言能力の制限によつて、漸次に共產主義にまで導き去ることを得るとなしたからである。

マラーは、恐怖主義三頭の中のキニク派である。彼は、最も頑強にして最も峻烈なる規律を有する虚無主義を代表する。吾人は秋霜烈日、寸毫假借する所無く狂氣と相距ること僅に一紙に過ぎざる彼の嚴苛に對して、賞嘆と厭忌との孰れに出づべきかを知らない。彼に至つて積極的平等は、初めて狂信的に墨守せらるゝ強硬なるドグマとなつた。そして若しシャロット・コルデー（一七九三年七月十三日マラーを暗殺し同十七日刑死す。二十五歳）の織手が、克く時を失はずして這個厲威の怪物より人類を救はなかつたならば、世界は恐らくカリグラ、ネロ、及ロベスピエール等の慘虐も、之に比しては一場政治的兒戲の觀を爲すに過ぎざる底の驚心駭魄なる慘劇を目睹したことであらう。マラーは平等の原則を守るに急なるの餘、偏に知識に於ける差異の生せんことを恐れて、全佛國の知識階級をギロチンに載するの意志と權力とを有したであらう。而かも知識は遺傳するが故に、次の時代に於いて再び同一過程が繰返さるゝことを、彼は必ず看過したに違ひない。積極的平等の此の狂信者に就いて詩人ラマルティエスは、「優越が彼れの苦惱であつたが故に、平等は彼れの熱狂であつた」と適評を下して居る。マラーに取つて平等は政治的の算術問題であつた。計算が合はなるときには、不都合なる數字は無造作に抹殺せられたのである。彼は、天才と材能とによつて他人より頭角を擡んでやうと企てた人々の頭は優秀なるギロチンによつて簡單に取片附け、之によつて中庸平凡の大多數が、何人かを頭上に戴きつゝありといふ鬱陶しく惱ましき感情から釋放せらるゝことを目的とした。即ちダント

ンが通常の資本を攻撃したるに對し、マラーは精神的資本即ち知識を、凡ての不平等の源泉として痛罵刺す處がなかつたのである。

マラーが偶々彼れの厲威を、その全幅に於いて發揮するの機會を見出ださなかつたが爲めに、血の英雄の恐るべき憎惡を我身の上に招きたるロベスピエールは、恐怖政治家中のストア主義者であつた。彼は財産及知識に對して攻撃の手を下すよりも、寧ろ、教養を當の敵として直ちにその肺肝を衝かんと欲した。此點に於いて彼は、サン・ヂュストと志を同する者である。偏にルソーの糟粕を嘗めてその後塵を拜するに汲々たる彼は、清教徒的嚴格と普遍的道學性と織美化したる文明過多のあらゆる餘弊よりの根本的解放とに於いて、積極的平等の福音を宣傳し得べしと信じた。然り彼はその宗師ルソーに比して、遙に所信に忠實であつた。後者が寡欲節制を説いて、そのなす所全然之を相容れざりに反し、ロベスピエールはその行住坐臥の全體に於いて、偏狹なる品位を墨守して自ら快とし、衒耀と見ゆるまでに謹嚴固陋なるカトー（ローマの愛國者）の亞流であり、寧ろ質朴なる農夫を前にして田舎の説教壇に立つた方が最も相應はしかつたのを、偶々革命の澎湃たる狂瀾に驅られて、難破に瀕する國家の船の舵機を暫時の間操縦するの運命に際會したる一個の村夫子に過ぎなかつたのは、佛國の爲めに大なる不幸と謂はなければならぬ。

概して之を謂へば、ロベスピエールは、そのルソー私淑によつて得たる共產主義的傾向に拘はらず、

本來徹底したる共產主義者ではなかつた。成程一七九三年の憲法第三條には、下の如き——共產主義的と謂はんよりは、寧ろ自然法的の響を有する——字句を含んで居る「凡ての人は、天性及法律によつて平等なり」然るに何ぞ圖らん、同じ憲法第二條は、人間の自然の権利は、「平等」「自由」「安全」及「所有」の四者より成ることを規定して居る。

五、バブーフ

財産其自身を以て攻撃の對象とすることを敢てする最初の人は、佛蘭西に於ける徹底的及實際的共產主義者フランソア・ノエル・バブーフ（一七六〇—一七九七）であつた。彼によつて計畫せられ、彼の名によつて呼ばるゝ一七九六年の陰謀は、その目的とする所、實に私有財産と法定相続權との廢止に外ならなかつた。彼れの徒ボナロチ（Bonarotti）によつて吾人に傳へられて居る彼れの目論見書第一條は「共和國に於いて、一大國民的共產を實施すべし」と謂ひ、其第三條は「現在、個人の所有に屬する凡ての財貨は、所有者の死亡と共に國民の共有に歸す」と謂ふのである。彼は全然個人主義的國家を廢絶せしめんと欲し、而して此目的の爲めに、廣汎なる共產主義的體系を立案した。バブーフは、その理想の爲めに一種の法悦を以て踴躍して死に就いた。彼と其親友ダルラーとが死刑の宣告を受くるや、各々隠し有ちたる匕首を以て縞死したることは、人口に膾炙する事實である。

バブーフが斯くの如き最期を遂ぐべきことは、之を逆睹するに難くなかつた。如何となれば、彼によつて鼓吹せられたる社會運動は、救ふべからざる矛盾の弊實に陥つたからである。即ち彼は舊地に無二無三に平等を要求した。換言すれば自由をすら犠牲にして顧みなかつた。實際彼は、國家的強制教育を主張し、嚴苛なる檢察をすら主張した。「何人と雖も、平等の原則に反する意見を發表することを許さず」とは、彼の明言する所であつた。斯くの如く、凡そ共產主義が壓制無しには考へ得ざるものであることは、抑も共產主義あつて最初の體系が之を示して居る。露國のボルシエヴィキは、謂はゞ歴史のレトリックに於いて事例の實驗を試みたのである。當年バブーフが要求したるものを、ボルシエヴィキが實行した、即ち「下よりの獨裁」是れである。而して自由と平等との抗闘に當つては、その一方の原則が、必然的に他の原則の排除を意味するものであるが、バブーフは此の抗闘に累せられて、遂に果敢無く最期を遂げた、又最後を遂ぐるの外はなかつた。何となれば、革命の大旗には自由が最も高く掲げられた。而し乍ら此場合には、それは「共產主義は死せり、社會主義萬歳！」を意味したからである。

(註一) 佛蘭西革命に於ける一七八九年八月二十六日の權利宣言の模範となつたものはルソーの「社會契約」ではなく北米合衆國に於ける各州の「權利證明書」(Bill of rights)であつた。

(註二) その先鞭を着けたのは蓋し Mestier の「吾が遺言」(Monteslément)であらう。

(註三) ルソーが要求したのは野獸的自然狀態への完全なる復歸に非ずして、唯だ現在よりも單純簡素なる往古の文化形式への復歸に在つた。H. Höfiling "Geschichte der neueren Philosophie" I, 551, 685.

第十二章 科學的社會主義の發端

一、資本主義的個人主義

パプーフは、個人の自由を犠牲にする絶對平等に對する偏重を、最高の代價——彼れの頭——を以て支拂つた。彼は最初の大規模なる實際的共產主義者であると同時に、亦必然的にその最初の殉教者であつた。而して斯くなることは極めて當然のことである。蓋し封建制度と法王と國王と貴族とに對する幾世紀の惡戰苦闘を経、千辛萬苦の末に、漸くにして個人の最高の寶——自由——を贏ち得てより僅に六年を出でざる社會をして、この至寶を擧げて平等の偶像に對する犠牲とする破天荒の實驗を敢てせしめんと欲することは、眞に前代未聞の不合理なる強請と謂はなければならぬ。社會は尙ほ未だ自由の美果を賞玩するの邊がなかつたに拘はらず、疾く既に、平等の旗幟を樹てんが爲めに自由の木を伐り仆せと迫られたのである。是れ自由の稜威に對する叛逆であつた、さうして叛逆者は、彼れの未熟なる何れにしても早計に失する企圖を償ふに、その心血を以てするの外はなかつた。斯くて有頂天の歡喜が、今や支配者の地位に達せる中流階級を捕へた。彼等は平和の美果を把握せんが爲めに、狂氣の如く疾驅驀進した。

政治的自由の要求と踵を接し、且つその當然なる補充として、茲に經濟的自由の要求が生じた。人爲的專制國家即ち舊政治の合言葉が「保護關稅」であつたとすれば、今專制主義の桎梏を脱したる市民の發したる掛聲は、「自由貿易」であつた。重商主義は、重農主義と交代した。「自由放任」が日常の合言葉となつた。ギルド制度の代りに移轉居住の自由と契約の自由とが現はれた。一方の極端は反動によつて他の極端を生じた。從來、政治的、社會的及經濟的に束縛せられ、土地に繋留せられた個人は、今や政治的、社會的及經濟的に、自在無碍なる發展をなし得ることとなつた。斯くてこれまで資本の駸々たる發展を妨げ來つた最後の障壁は一朝にして倒壊した。換言すれば、産業が一躍して開明世界の女王の玉座に上つたのである。向後各民族を統御するものは、武人的世界國に非ずして世界市場であるやうになつた。吾人の文化體系の産業的典型が表向きに現れ出でた。独自の貴族を有する新しき産業的王國が起生した。吾人は鐵道王、石油長者、石炭大盡、綿絲大名、銅鐵富限者等の名稱を、次から次に耳にするに至つた。中世のゴチック式伽藍の代りに、その雄大さによつて寺院の高塔も蔭に隠るゝ程の工場の煙突が天を衝いた。機械の力によつて手工業を驅逐し、而して資本を以て生命の息とする産業は、絶大の威を揮つて新しき世界を創造した。今日の絶對的支配者は、世界市場と呼ばれ、孰れの專制的小君主にも見るが如く、往々氣紛れの不機嫌を示すものである。世界市場の不機嫌は「危機」と呼ばれる。又一種の新しき貴族が生じ、之と相並んでは舊様の貴族は、僅に陰影の如き存在を

營むに過ぎない。此貴族こそ凡ての貴族中最も兇惡なるもの、即ち資本關若くは、富豪である。そして現今に於ける最も憎むべきものは、戦争成金、革命成金の徒である。往年の奴隸は、現今「工場労働者」の名稱の下に現はれて居る。彼等は勿論當年の如く、地主の鞭によつて勞役に驅られない、然かしそれよりも一層恐るべき筈、世界的の筈即ち飢餓によつて驅使せられるのである。

二、自由主義と社會主義

貿易の政治的信條である自由主義が、文化を異常に促進したことは拒むことが出来ない、さうして自由主義が、人類の發展過程に於ける必然的通過點であつたことを認めざらんとするものあらば、それは確かに誤謬である。個人は先づそれが自由無碍に發展する時、如何なる成果を擧げ得たか、並に、人類の全體福祉の爲めに如何なる貢獻をなし得たかを示さなければならなかつた。事實上、解放せられたる自由主義は、それが假令品性を陶冶すべき學校と謂ひ得ざる迄も、少くとも敏慧勤勉にして企畫を好む頭腦の選擇に對する絶好なる經濟的原則であるといふ教訓を吾人に與へた。然るに資本が、久しきに亘つて縦横無盡、思ひの儘に活躍したる後、政治的論理が卒然として彼れの行手に立塞がつて始末書を要求した。資本は理性の法廷に立つて、自己に課せられたる世界支配の任務を眞實に遂行したりや否やを明瞭に答辯しなければならなかつた。所謂「致富者」は訊問を切り抜けなければなら

なかつた。

資本の支配下に在つて獅子の分前を撰つた者は何人であるか。自ら勞働せずして、自己の資本を、及び資本によつて他人を、自己の爲めに勞働せしむる資本家である。資本の支配下に在りては、往年アダム・スミスによつて高唱せられたる兩様の範疇、賃銀及企業利得——而して此兩者は、身體的にもせよ精神的にもせよ、必ず勞働と結び付けられて居る——は、無殘にも第三範疇、即ち不勞所得たる利子の爲めに驅逐壓倒せられた。而して凡ての領域を蠶食して飽くことを知らざる株式會社、聯合買占、トラスト等の現象に於いて、今日も尙ほ明瞭に鋒鏘を示しつゝある如く、元來聯合的傾向を有する資本の協合によつて、小規模なる製造家、手工家及商人等は日を逐うて縮少し、次第にプロレタリアの域に驅りやられ、斯くて究極には少數なる資本家のみが殘留し、爾餘の凡ての人は、前者の奴隸婢僕たるに甘んじなければならぬやうになるのである。

無制限なる資本主義的個人主義は、到底之を是認することが出来ない。蓋しそれは性質上、資本によつて生ずる如き不勞所得を、一方的に獎勵し、精神的、並に肉體的勞働——企業利得と賃銀と——を犠牲として毫も憚るところを知らないからである。凡そ勤勞するところ最も少き者が、享樂するところ最も多く、之に反して、勤勞するところ最も多き者が享樂するところ最も少いといふことは、道義的感情と哲學的考察との、齊しく之を容れざる奇怪事である。併し乍ら現代國家構造の形態を定むる

ものは、昔時に見るが如き、一權力者の強壓命令と銃劔の高手的論理とに非ずして、主として投票紙の「余、斯く欲す、故に斯く命す」(Hoc volo, sic jubeo)であるが故に、吾人は正に「茲はロードゥス島也、茲にて飛べ」の苦しきディレムマに直面せざるを得ないのである。集産主義に賛して個人と其の自由とを放棄すべきか、將又個人主義に加擔して、これによつて労働者を犠牲にするところの不勞所得の特權を認むべきか？

斯くの如くにして吾人は方に社會主義の入口に立つて居る。即ち、集産主義と個人主義との間に横はる一見超ゆべからざるが如き深淵に架橋し、自由と平等との内面的矛盾を排除せんが爲めには、吾人は兩者間の交譲妥協によつて之を試みざるべからず、而して一方私有財産の廢棄に對して抗爭すると同時に、一方資本主義的個人主義の傍若無人なる増大を折伏し、然かも此氷炭相容れざるが如く見ゆる兩方面に對して夫々讓歩を敢てする處の這般の交譲妥協、之を社會主義と呼ぶのである。

社會主義が集産主義に對して讓歩する點は、出来る限り平等を庶幾する共同性が社會的理想であることである。但し共產主義者が要求する如く、享樂手段は共有的であることを許さない——何となれば享樂手段の共有によつて、個人的趣味の自由が全然没却せられざる迄も少くとも著しく毀損せらるべきが故である。——併し乍ら生産手段は共有でなければならぬと主張するのである。次に資本に對しても、社會主義は其權利を認むるに吝でない。併し乍ら曩にアダム・スミスが既に教へたる

が如く、資本はその最も顯著なる起原を労働に有するが故に、資本の權利は、専ら労働する者のみに屬すべきであると説くのである(労働全收權の生ずる所以である)。此主張は一方に於いて、利子は不勞利得なるが故に之を廢止すべきこと、一方に於いて、相續權は、個人的に之を廢止して國家に移讓すべきことを意味する。如何となれば、若し労働を以て資本所有に對する唯一の權利たるべしとするならば、單に「生れる」といふ骨折り以外に何等の労働をもなさざる資本主義者の兒孫が、一毫も資本に對する請求權を有せざることとは明々白々である。然るに遺産が、相續する個人に取つて不勞所得であること、正に利子の資本家に於けると同様である。随つて不勞所得にして廢除すべしとならば、相續も亦同時に廢止せらるべきことは謂ふ迄もない、是れ社會主義の教ふる所である。

即ち共產主義の傾向が、資本家よりその所有を沒收し、全資本を以て、國民各個が之に對して同等なる參與權を分有する國家財産となすの極端に趨るに反し、個人主義はその當然なる歸結として、不勞所得を不斷に増加し、且つ一方的に之を獎勵鼓舞するの弊に陥るとすれば、社會主義は資本を個人に許容せんことを欲するも、その資本は、必ず労働によつて獲得せられたるもの、更に必ず自己の労働によつて獲得せられたる資本たることを要すとなして、即ち換言すれば、凡ての賃銀労働の根本的廢止と、相續せられたる所得、若くは其他利子による不勞所得の排除との下に、資本を個人に許容せんと欲するといふ仕方に於いて、共產主義及び個人主義の兩極端の綜合を敢てせんと擬するものであ

三、サン・シモン及び其徒

凡ての政治的若くは科學的方向と等しく、社會主義も亦現今の形態を具備し得るまでには幾多の迂餘屈曲の行程を辿らなければならなかつた。上に述べたるが如く、社會主義が共產主義と個人主義との妥協を以て本質とするならば、斯くの如き妥協を持來すべき方途の多様なることは明かである。是れ社會主義の理論家が踵を接して生じた所以である。サン・シモン、バザール、アンファンタン、フリーエー、ルイ・ブラン、ブルードン及び共產主義者カペー等が、第十九世紀の三四十年代、即ち殆んど同時代に崛起して互に相異なること少々ならざる独自の社會主義的體系を創建固持し、一方、英國に於いては、ロバート・オーウェン、獨逸に於いては、マルクス、エンゲルス、ラサール及ロートベルツス等も亦、各々相扞格する體系を樹てたること、亦決して偶然ではない。

社會主義の最初の大なる體系を建てたる者はサン・シモン伯（一七六〇—一八二五）であつた。彼は革命後、單に平民アンリ・サン・シモンと自稱し、憲法制定會議が貴族を廢止したるの故を以て、之に對する感謝と賛成との演説を試みた。彼の眼前には人類の物理的的政治的組織改造が究極目標として髣髴した。人類の武人的典型は、位を科學的典型に譲るべく消滅しなければならぬ。「幾多のアレクサ

ンダーよ退け、若きアレキメデスと其地を代へよ！」婦人にも亦、選舉權を許さるべき新社會の至上命令は、勞働である。是れサン・シモンの絶叫であつた。彼は一方に於いて、その高遠なる計畫の爲めに政治家として活動しつつ、一方に於いては孜孜として「第十九世紀の科學的著作概説」（一八〇七年）の著述に従事した。彼は既に本書に於いて、後來彼の學徒コムトが重大なる意義にまで引き上げたる學名即ち「實證哲學」を用ひて居る。

サン・シモンは、彼れの人格と教義とに對する渴仰より、彼れの爲めに私心なき奉仕をなしたる數人の秘書を見出した、第一は後年有名な歴史家となりしアウギュスタン・テイエリ（一七九五—一八五六）第二は誰あらうアウギュスト・コムト（一七九八—一八五七）最後は彼の忠實なる崇拜者として傳記家兼註解者たるオリンデ・ロドリグスである。テイエリと共に彼は一八一七年中大著「産業論」を公表した。此書に於て彼の論述した思想は下の如くである。曰く、近代社會は専ら勞働者——精神的勞働と身體的勞働とを問はず——より成り立ち得るのみ。獨り勞働のみが生存に對する權利を附與する。勞働を基礎として建設せらるべき新社會は、唯兩個の敵を識る。曰く、無政府と專制是れである。

本書に於いて述べられたる計畫は、更に彼れの最重要にして且つ最も魅力ある著書「組織者」（一八一九—二〇）の中に詳論せられて居る。茲に彼は有名なる寓言を掲げて居る、即ち「吾人をして佛國が卒如として其の第一級の學者、美術家及産業家の三千人を失ひたりと假定せしめよ。其結果は果し

て如何であらうか？ 此國はその靈魂を失ひたるに等しかるべく、生命無き影として文化的に土崩瓦壊するであらう。次に高位高官の徒、顧問官、大臣、大僧正、僧正、典廩、式部長官及王族の輩三千人を死去せしめたる結果は如何？ 好人物なる佛國民は哀悼已まないであらう、而かも彼等は之によつて秋毫の不自由を感ずることは無い。何となれば、死者の地位を繼承せんことを希ひ又善く先人を辱めざるべき者は、忽ち踵を接して現はれ斗星掃も音ならざるべきが故である云々。此の寓言の意味は、凡そ一國民の靈魂は生産する頭腦と階級とに藏せられ、之に反して寄食する上流人は、前者が掛け換へ無きと同様に、造作無く補充し得るものである。此補充し得べき者のみが最上の支配的役割を演じ、補充し得ざる者が最下の役割を演じて居るといふのである。

次にサン・シモンは、彼れの國家設計を樹てたが、その核心は、労働が存在と享樂との最高權利を與ふるものたるべしといふに存した。即ち、歴史的に疾く死滅すべかりし餘命を僅に繋ぎつゝある戰爭國家の代りに、産業國家が現出すべきである。(サン・シモンの所謂産業は、現實的労働の一切の種類を意味する。)世界大戰前に見たるが如き一般的兵役義務に代ふるに、一般的労働義務を以てしなればならない。若し第十八世紀が主として批判的であつたならば、第十九世紀は、須らく創造的であつて、周到なる計畫と整然たる體系とを具備して、科學の成果を基礎とする産業國家を建設すべきである。政治學は一個の實證的科學にまで引き揚げられなければならない。政治學に材料を供するもの

は歴史である。但し歴史そのものは尙ほ未だ實證的科學ではないが、併し若しそれが人間精神の總ゆる方面を識認し、此發展の傾向を發見するならば、それは容易に一個の實證的科學の班に列することを得る。而して人類精神の根本方向は、吾人の文化體系の精神的發展に現はれ、而して此體系は三階段を示して居る。神學的、形而上學的、政治的の世界説明、是れである。(正に、コムトの所謂三階段に先鞭を着くるものである。)同様に歴史は、吾人の文化體系の傾向が、産業的典型をして勝を制せしめんが爲めに、戰爭的典型を次第に犠牲にすることを明瞭に示す(是れスペンサーの主要思想である)。前世紀に於ける革命が標持した最高目的が政治的自由であつたとすれば、次の世紀の社會的努力は、人道と同胞愛とを指さなければならない。

斯くの如く、漸次に莢を脱して眞面目を發揮する彼れの社會主義の、寧ろ倫理的なる此の一面は、彼れの最後より第二の著書「産業問答」(一八二三—一八四二)に於いて最も巧妙に論述せられて居る。茲で彼は先づ資本と労働との對立を述べ、此の對立の結果として自由主義的ブルジョアジーの生じたる所以を説き(註)、中流階級が、從來の地主的貴族を其の所有より驅逐したるは、單に自ら代つて其地位を占めんが爲めに過ぎない。此中流階級の導星となつたものは赤裸々の利己主義であり、彼は支配權を僭奪せんが爲めに、「余、座を占むるまでは、汝を排して」(Où-je va que je m'y mette)——此語は、サン・シモンが恐らく、ミラボーに倣つて、露骨なる利己主義を表現する爲めに好んで

用ゐたものとして、人口に膾炙して居る——の原則に従ひ、一切の障碍となる要素を驅除するといふ確信を、サン・シモンが初めて抱懷言明したのは本書である。而して這般の僭奪に對して中流階級を罰せんが爲めに、サン・シモンは後年、ロートベルツス及ラサールがなしたる如く、中流階級に對抗して王權と勞働者との結合を主張した。此の結合の道德的至高目標は、同胞愛によつて利己主義を折伏することである。産業の原則は完全なる適法性の原則の上に建てらる。政治的自由は、進歩的發展の自然なる結果である。それは文明の結果であつて、その目標ではない。それは封建主義に對して、一個の革命によつて自己を貫徹しなければならない、併し乍ら一旦政治的自由が贏ち得られたる時、それは究極目的でなくなる。

産業國家の政治家の任務は、主として勞働の爲めに利益を計ること、「専ら自己の勞働力のみに頼らなければならぬ階級の狀態を出來る限り改善する」ことである。茲にサン・シモンは未だ明言はしないが、勞働を要求する權利を豫感して居る。彼はプロレタリアが議院の門を亂打し、彼等の壓伏せられた權利を要求するの日が迫りつゝあることを看取した。彼曰ふ、かるが故に權力者が——サン・シモンが筆を揮つた當時の權力者はブルボン家であつた——執り得る最良の政策は、産業家即ち現實的の勞働者と相結び、不勞の資本と對抗することによりて、上に述べたる如き回避すべからざる禍害に豫め備ふるの一事あるのみである。サン・シモンは未だ曾て財産の社會化を要求したことはない。

實際上彼自身は、單に社會改良の爲めに辯じたるに止まり、社會主義そのもの、爲めに言を費さなかつた。

彼れの社會主義の最後の相、即ち宗教的形相は、此體系の外面的聲望にこそ資する所ありたれ、社會主義理論家としての彼れの名譽の爲めには何等の貢献をもなさなかつた。彼はその死に近き晩年に至り、最も有名なる著書「新基督教」(Nouveau Christianisme)の中に、その社會的辭世歌を掲げて居る。而して一八二五年五月十九日、臨終の床にありてその門弟ロドリゲスに與へたる言葉は、「大業を成さんが爲めには、靈感を要することを忘るゝ勿れ。余が全生涯を蔽ふ唯一思想は、凡ての人にその素質の最も自由なる發展を保障すること、是れ也」といふのであつた。

「新基督教」の根本思想を概括すれば、氣息奄々たるドグマ的基督教の要求するが如き索莫たる死文の信仰に代ふるに、新しき社會的基督教——舊約全書の所謂、汝自身の如く汝の隣人を愛せよの金言を唯一の信條とする新しき基督教——を以てすべしといふに歸着する。

サン・シモンの觀る處を以てすれば、加持力教は隣人愛を事とせずして専ら自家權勢の擴張を努むる僧侶の教會的誦詐に外ならず。又新教は、成程ルターに於いて從來の教會の深刻なる弊害を醫すべき一大端緒を啓いたとは謂へ、不幸にして中道に停滯したり、禮拜典儀は新教出で、無味乾燥となり、隨つて牽引力を喪ふこと少なからず、然かもドグマ的なる部分は、僅少の例外を除くの外依然と

して殘留し、甚だしきは寧ろ一層の固陋を加へたるものがある。サン・シモンの新基督教は、教會的發展の一千八百年の歴史を排除し、直に耶蘇自身の宗教に追隨せんと欲する。耶蘇が貧の福音を説いて、働かざる者は食ふべからずと警めたことすれば、サン・シモンは直に労働の福音を説いた者と稱すべきである。但し一個の點、而して謂ふまでもなく最も根本的な點に於いて、サン・シモンの基督教は、耶蘇の原始基督教と相距れて居る。耶蘇の王國は「現世のもの」に非ず、隨てその基督教は、諦めと官能的享樂の放棄と現世逃避を要求し、彼岸の欣求を勸説した。此の彼岸思想をサン・シモンは排斥する、彼れの國は獨り現世界に存する。彼が頭中に描き成した社會的基督教は、同胞愛の原則、並に各人其能力の程度に應じて現世に於いて共同的に生産せられたる財貨に於ける分前を得るとの要求により、物質的慘狀を出来る限り此世界より驅除するに努むるを旨とするものである。

サン・シモンは社會救済者としての天職の素質を有した。然るに惜い哉、年少客氣の頃、精力を濫費すること多きに過ぎ、社會的並に宗教的世界改革者に取りて絶対に缺くべからざる資格、即ち他人を心服せしめずんば已まざる道德的威力に於いて頗る足らざるの憾があつた。加ふるに彼れの死後、所謂サン・シモン主義者の一派たる彼れの門弟及崇拜者は、宗師の教義を採りて、或は甚だしく極端に趨り、或は之を畸形化した。前者の例は彼れの好箇の使徒サン・タマン・バザール（一七九一—一八三二）であり、後者の例は彼れの盲信者バルテルミー・ブロスベール・アンファンタン（一七九六—一八六四）

である。

バザールは、一八二八年中サン・シモン主義に關する連續講義を試み、師の社會的理論を一部分は之を精細に布行し、一部分は最後の結論を抽出することによつて百尺竿頭更に一步を進めんことを欲した。此等の講義は「サン・シモン學說要義」なる標題の下に公表せられた。此書に於いてバザールの説く所を約言すれば、何等の労働をなさざる若干人の鉅富と、過度に労働する大衆の慘憺たる貧窮とが對立する現今の不調和なる社會状態は、宗教と道德との双方に對して等しく罪を犯すものである。此の禍根は、現在行はれて居る相續權といふ特權を享有する資本の中に存する。即ち資本は往々にして、凡庸の徒に絶大な權力を附與してその濫用誤用するに任かすの憂ある間に、一方多くの有爲なる材幹が資本の缺乏に累せられて、竟にその能力を活用するの機會に遭はずして已むからである。此の大患の根治策は相續權の廢止によつて庶幾するを得るのみである。各人の運命を決するものは誕生の偶然に非ずして、各自の材能でなければならぬ。「各人、其の能力に應じ、各能力、其の實績に應じて」といふのが、バザールの金科玉條とする處である。曩には、財政的貴族が門地的貴族の地位を奪つた、今度は世襲的財政貴族の代りに材能の貴族が現出することを要する。死者の兒孫若くは縁者を以て相續人とすることを許さない。何となれば、斯れによつて資本力が屢々痴人の私する所となるからである。宜しく國家をして凡ての遺産を繼承せしめ、材能と勤勉とによつて衆望を負ふ者に、國

家の銀行及其支局を通じて此遺産を交附せしむべく、斯くすれば一方には、彼等が資本を濫用悪用するの憂を絶つ保障ともなり得る云々。即ちバザールは、明かに財産の一般的分配を要求するのではない、況んや私有財産の廢止の如きは毛頭彼の欲する處では無かつた。反對に彼は個人の財産を肯定し、唯だその世襲を否定するに止まり、而して此の私有財産は、法律に遵ひ何等の革命を用ゐず、國家の相續權によりて之を廢棄すべしと説いたのである。バザールの社會主義は全然科學的なる基礎の上に立つて居る。彼の講義集（全二卷、一八三〇年巴里出版）に於いて、彼は其師の精神を承け、人類進歩の法則として藝術、科學及産業（經濟）を列擧して居る。彼はサン・シモンと等しく、人類の歴史を有機的時期と批判的時期とに分ち、前者は統一的目標に向つて精進し、而して社會的階級成立の調整が調和的に行はれ、其處に一種の精神的平等が形作らるゝものであるが、批判的時期は、個性を覺醒し刺戟し鋭敏ならしむることによつて、這般の平等性を破壊するものである。佛國革命は人類に於ける此の批判的時期であつたが、サン・シモン一度出で、また一有機的時期、即ち産業的典型的支配の端を啓いたのであると説いて居る。

バザールの體系が一味高遠なる風格を有するに反し、アンファンタンのそれは粘土製の脚の上に立つて居る。即ち前者が滿腔の道德的眞摯を以てサン・シモンの社會的思想を祖述したるに反し、後者は一八三一年に公表したる著書「サン・シモンの宗教」の題號が示す如く、その宗教的思想を力説した。

曩にサン・シモンは「勞働と快樂とによりて汝自身を聖化せよ」と叫び、之によつて精神と相並んで肉體にも亦その權利を許容した。然るにアンファンタンは此の社會的宗教を以て、肉を犠牲にして精神を偏重したる舊様の基督教と反對に、肉の權利を主位に置くものなりと解した。アンファンタンの社會的宗教は、肉の快樂、官能的喜悅が宗教の外光を以て蔽はるべしとする點に於いて、カルボクラト派の風采を傳へる。彼が絶大なる隨喜渴仰を博し、巴里のみにても十二箇のサン・シモン主義學校、地方に於いては五箇所のサン・シモン主義教會が、新基督教、即ち社會的宗教の光榮を増さんが爲めに建設せられたることは、毫も怪むに足らない。何となれば、從來恐らくは時に良心の呵責を感せずには居られなかつた輕佻なる巴里の風流兒に向つて、新宗教が享樂を聖視し、官能の滿悅が神によつて認容さるるものであると宣言するならば、天下翕然として之に趨ることに何の不思議があらう。蓋し所業は前後同一であり、且つ快樂を與ふること依然として變らず、而かも一方は之を以て罪として責め、一方は之を宗教的行爲であると讃へるとすれば、何人と雖も喜んで後者を擇ぶべきは謂ふまでも無い。

サン・シモンの徒中、眞面目なる一派は之と歩調を共にすることを屑しとしなかつた。バザール、ビエル・ルルー（一七九七—一八七一）コールネー、ロデリグス等は、アンファンタンと相絶つた。一方アンファンタンは踰跲たる群集を後に引き具し、彼等をして、新しき社會教の「至上なる父」「歡喜

の法王」と歡呼の聲を以て迎へしめた。併し乍ら此の新しき教主が、無妻主義を排斥して到る處に彼の助手たるべき女僧を物色し、父の花園メニルモンタンに於いて放歌亂舞の祭宴を執行し、而して最後に教團の金庫に於いて醜劣なる缺陷の發見せらるゝに及んで、サン・シモン宗徒は肅然として此の短き歡樂の恍惚から醒めた。女性の豫言者の代りに、屈強なる警官が彼れの許に出現して有無を言はず牢屋へ引き立てた。そこで彼は四人の同志と共に、風俗壞亂の廉を以て十二年の禁錮により其の罪を償はなければならなかつた。サン・シモンの創意に係る社會劇は、創作者に在りては悲劇的終曲を以て、又その末流、特にアンファンタンに在りては、無殘なる笑劇と殺風景なる大道茶番とを以て幕を閉ぢた。蓋しサン・シモンと其の徒が時代を知ること半ばに過ぎなかつたに反し、時代は、彼自身を知ること餘りに少なく、然かも彼れの末流を知ること餘りに多かつたが爲めに外ならない。

(註一) アルサリアと産業者若くは勞働者との判然たる區別は彼に由來する。

第十三章 シヤール・フリーリエー

一、人口過剩問題

前章までの攻究に於いては、最も重要な問題が答へらるゝは愚か、殆んど眞面目に提起せらるゝことすら無かつた。その問題とは「全人類を等しく幸福ならしむるに必要な一切の榮養及享樂手段を何處より求む可きか」の問題である。今日の生産方法を見るに、その一日勞働時間は、通例として四時間とか六時間とか謂ふが如き緩漫悠長なるものは絶無で、平均約十二時間といふ殺人的のものである。此の過酷なる勞働制度に於いて、勞働者があらゆる精力を傾倒するに拘はらず、極めて少數なる者に對してすら十分なる享樂手段を土地から收穫することが出来ない状態である。況んや若し人間が勞働を減少し享樂を増加しようとするならば、果して如何なる状態が現出するであらうか。土地には制限があり、新しき大陸は向後發見せらるゝ見込が無い。如何にして吾人は、現今の個人經濟が孜孜として懸命の搾取を試みつゝあるに拘らず、尙ほ且つ最も基礎的なる需要を満たすに足るだけの生産をすらし遂げ得ざる土地が、將來勞働を低減して然かも凡ての人に十分なる榮養を供給し得ることを期待することが出来るよう。

憂患は獨り之に止まらない、現今に在りては——特に工場都市に於いて著しい現象であるが——恐るべき兒童死亡が、道義的には恥づべきものであると言ひ條、兎にも角にも人口増殖に對する一種の自然なる調節を行ひつゝあるといふ點に於いて、困窮と貧窶とが人口過殖の自然的障壁となつて居る。然るに若し一朝、現今の有産者が彼等の兒童に對して供與しつゝあるものと同等なる注意と榮養とを、凡ての勞働者が、彼等の兒童に對しても捧げ得る如き状態が將來せられたと假定したら如何であるか？ 榮養手段の増加は單に算術級數的なるに反し、人口のそれは幾何學級數的であるとするかのマルサスによつて公式化せられたる人口原則は、宛として、ダモクレスの劍として(古代 *Dionysios* の僭王 *Dionysios* の廷臣、甘言阿諛を以て嬖幸せらるゝ。然るに讒宴に際し、頭上、馬毛を以て吊したる劍を見て災禍の及ばんことを恐れ寵遇を辭して致仕す。ダモクレスの劍は大平快樂中の危険を意味する——譯者) 吾人の頭上に臨まなければならぬ。若し人間が生存憂苦を有せず、隨つて亦、何等大數出生を防止すべき理由を有せずとならば、過剰なる人口は忽にして洪水の如くに氾濫し、土地は最も合理的なる經營を以てして、尙ほ凡ての人を辛うじて榮養するに足る程の生産をすら示すこと能はざるに至り、その結果、吾人は慘憺たる生存競争の爲めに、互に殺戮するの已むを得ざるに至る恐あることは火を賭るより瞭である。搗て、加へて一切の戦争は止み、疫病は豫防法によつて再び流行することが出来なくなり、病氣は進歩して休まざる衛生施設によつて減少し、而して斯くとも尙ほ時

としては發生することあるべき病氣も、現今では夢にも見られない程の醫術の進歩によつて治療せられ得る曉に至つたならば、死亡統計の數字は、果して如何なる變動を示すであらうか。

サン・シモンは、此等の問題に對して全然考察を試みず、却つて之を同國同時代の人たるシャル・フリーエー(一七七二—一八三七)に一任した。近代社會主義の兩使徒たるサン・シモン及びフリーエーは、巴里に於いて多年の間互に路傍の人として毫も相識ること無く生存した。偶然は、當年佛蘭西の最も重要な二人の社會理論家をして握手せしむるの好意を吾人に示さなかつた。加之吾人は此兩者が、果して偶然に對して個人的相識を感謝したであらうか否かを疑ふものである。何となれば、此兩時人は理論的に互に相補ふ所甚だ多かつたであらうに拘はらず、個人的に親交を結ぶには頗る不適當であつたからである。サン・シモンは、徹頭徹尾自ら標致すること極めて高き貴族的遊俠兒であり、フリーエーは一生を通じて謙遜なる商賈の番頭であつた。而かも後者が、貧窮に拘はらず知己友人等の合力寄贈を昂然として拒けたと反對に、前者は無遠慮に之を貪つて恬として恥づる色が無かつた。サン・シモンは、その漂浪の間に兩大陸の社會を、其のあらゆる階級と層とに於いて目撃した。然るに貧しい番頭にして葡萄酒の請賣人たるフリーエーは、五階の頂邊にある屋根裏の部屋に映つた如き世界を識るに過ぎなかつた。隨つてフリーエーが、彼れの寂莫たる小房の裡に世界を算術的に組み立て僅に襟懷を銷しつゝある間に、サン・シモンは、根本的に情偽を知悉して剩す所無き世界を歴史

的に説明せんと擬した。而して最も奇とすべきは、生涯の中僅に短い一時期を除くの外終始一貫してプロレタリアであつたフリーエーが——彼れが唯一の活計は、僅に九百フランを算する年收であつた——プロレタリアの存在に就いては殆んど全然知る處なかつた一事である。サン・シモンを感情激昂せしめたのは、プロレタリアの窮状であつたが、フリーエーに在つては全然之と趣を殊にして居る。それは、彼が生涯を通じて従事した「虚偽の高尙なる手工」即ち商業の不誠實に對して烈々たる義憤を抱いた爲めであつた。

二、心情的引力

フリーエーの學説を理解するには、其著「四つの運動の理論」(一八〇八)「家庭的聯合論」(一八二二)「産業と組合との新しき世界」(一八二九)等に於いて論述したる「心情的引力」から始めねばならない。フリーエーの最高前提は次の如くである。自然に於いては一個の絶對的調和が支配する、随つて人間の凡ての自然的衝動は、それが自然であるが故に又正當である。吾人の衝動には、官能的性質のもの五、精神的性質及混合的特質のもの四あり、而して若し此等の衝動が其自身として罪業的若くは非道德的ならば、自然は之を吾人に植ゑ附くる筈は無い。然るに吾人は事實として此等の情感を有し、而してあらゆる罪が之より生ずる所を見れば、それは吾人の社會組織の何處にか錯誤が伏在するが爲

めなければならぬ。元來調和するやうに吾人に生得的に與へられて居る情感及衝動が、それにも拘はらず今日の社會組織にありて、人間が不道義に墮了する機縁となるといふことは、決して自然的秩序ではあり得ない。即ち罪は吾人の文明の組織の中に潜伏するものたるに違ひ無い。吾人は克く衝動を制馭し、情感を抑遏する人を目して文明人と呼んで居る。茲に錯誤があるのである。吾人の文明は邪道に彷徨しつゝある。萬有の調和は自然的衝動の保存と發展、その調和的なる整頓と聯合によつて將來せらるゝものであつて、決して衝動の強壓と排除によつて實現せらるゝものでは無い。

如何なる人も幸福と享樂を追求する抑制し難き衝動を有する。從來の文化はその法律と道德と宗教とに現はれたる諸相に徴するに、此の衝動を全然強壓せざる迄も、少くとも之を防止ならしむることを目的として居る。然らば何故に文化は自然の趨勢に反馳せんとするか？ 若し享樂欣求の衝動にしてそれ自身として批難すべきものならば、何故に自然は之を吾人の中に植ゑ附けたか？ 然るに自然は文化よりも其根原が遠いものであるから、邪道に在るものは疑も無く後者でなければならぬ。若し教會が宣道する如く、文明の理想は享樂の克服にありとすれば、フリーエーの啓示する如く、自然の理想は、正しく享樂の調和化に存する。

併し乍ら、吾人は勞働する時にのみ享樂することを得る、特にフリーエーは、勞働が凡ての富の源泉であるとなすが故に、其處には唯一の方便が存するのみである。即ち、勞働を享樂へまで引き上

げ上ぐることを、是れである。此の摩訶不思議なる幻術を、フリーリエーは彼の所謂「心情的引力」の原理によつて行はうと欲した。即ち彼は運動が全宇宙に於ける動因であり、随つて亦人類の共同生活に於ける動因であるといふことから出發する。人間の本性にありて、運動は取りも直さず衝動の完成を意味する、然るに衝動は憑依のよすがとなり、發足の基點となる所の一個の主體を有たなければならぬ。衝動の主體は勿論人間である。人間が彼れの衝動を或る目標に向はしめるのは、件の目標が人間を牽引する力を有すればこそである。随つて、引力が社會形成の支配的要素である。此等目標の範圍は、謂ふまでもなく限られたものである、成程衝動が追求する凡ての目標の無言の動機は享樂であるが、併し凡そ人生に存する享樂の種類の数も亦限られて居る。それでフリーリエーは獨斷の大膽さを以て、衝動の数は享樂の種類を超ゆることなし、換言すれば引力要素は人間の天命若くは目標に比例すると主張する。彼れの中心思想は「引力は宿命に比例す」といふにある、これ彼れの著書に於いて常に反覆せられ、更に彼れの徒が彼れの墓碑の銘となしたる所のものである。

フリーリエーは、凡ての衝動を分つて三種類とする。「奢侈衝動」「集團衝動」及「聯系衝動」是れである。奢侈衝動に於いて、人間はその五感を手段として彼れ自身の享樂の満足のみを追求する、而して五感の各種が特殊なる享樂の群を有つて居る。這般個人的享樂を満足せしむる手段は、各人の健康と富とである。次に集團衝動に於いて、人間は小さき範圍の同類と享樂を共にする。而して集團衝動は、

這般の同類の存在を俟つて始めて可能である。此の集團享樂に屬するものは、友誼、名譽欲及家族心である。而して此の集團衝動の中に、人間の社交性への推移が含まれて居る。如何となれば純粹に利己的なる奢侈衝動と相並んで、茲に半ば愛他的なる集團衝動が現はれるからである。最後に「聯系衝動」に於いて、人間は自己を全人類の一部分と感知する。聯系衝動に屬するもの三種、其一是、密教的衝動で、例へばかの凡ての變化を蔑視しつゝ、一意専心自己の計畫に没頭する發明家の場合に見るが如く、人間が唯一の目標に向つて驀地に精進することを意味する。第二は遊蝶的衝動で、時々の變化を求むる衝動を謂ひ、最後に、集成的衝動、即ち人類の統一化に對する熱望、普遍的幸福に對する欣求である。語を換へて説明すれば、這般の紛れも無き唯物物的體系に於いて、假に倫理的満足といふものを容るゝの餘地ありとすれば、集成衝動は即ち凡ての人が抱懷する十人十色の願望が平等に成就せらるゝことに對する倫理的満足であると稱することが出来る。

斯くの如くにして吾人は、フリーリエーがその「心情的引力」によつて何を説かんとするかを領會するであらう。前にも述べた如く、勞働は之を享樂にまで引き揚げることを要する。而かもそれは、各人が自己特有の性質に適應する勞働を行ふ場合に限りて善く然ることを得るのである。而して凡そ世に存する衝動の数は限られて居り、しかもその数は、フリーリエーの説く所に據れば正に勞働の種類と一致するが故に、情感の調和を目的として建てらるゝ社會に於いては、各人は必ずや、最も好く彼れ

の心情に適應する如き労働を選択せんと欲するであらう。而して斯くすることによつて一石二鳥を墜とすの効果が現はれる。其一是、人間が最早事情に強要せられては無く内面的衝動に促がされて、換言すれば、愉快を以て労働するが故に、今日に比すれば殆ど比較を絶する程より多く生産することが出来ることである。何となれば凡そ人が喜んでなす所のものは、倍加せる速さと倍加せる好成績とを以て進捗するが故である。第二には同一の労働衝動を有する人々は自然集まつて團體をなすであらう。斯くして大規模なる分業が自らはれ、同一衝動を有する同種類の労働者は互に結合するに至ることは疑を容れない。而して茲に吾人は、社會主義的大思想たる労働團結の明確なる姿に逢着する。各人が心情的に、即ち喜悅の情を以て労働することにより、特に同一の天稟を有する労働者が互に團結することにより、労働者は、今日よりも一層合理的なる耕作法を利用して、不經濟にして支離滅裂、勞力を空費して際限なき現今の個人經濟が能くするよりも遙に多くの物資を土地より收穫して今日夢にも知られざる新しき價値を創造する。凡ての人は労働せざるべからずとする要求に於いて、フリーエーはサン・シモンと一致して居る。フリーエーによつて宣道せらるる「保障主義」の時期——各個人に對して一定の生計が保障せらるるの意味——は、「労働團院」(各團一千八百人の労働者を收容する)の施設によつて促進せられなければならない。

三、空想世界

以上述べ來つた所までは、吾人は頗る眞面目にフリーエーの説に追隨することが出來た。吾人が現にとりつゝある生産方法が、眞に物資を土地より收穫して遺憾無き底のものであるか、將た又、結合的方法とより多く合理的なる耕作とによりて、土地の生産力を一段と増加することが出來ないであらうか。此問題は、決して冒頭より一概に之を排拒することを許さない。而してフリーエーは、實に吾人を導いて此大問題に直面する段取にまで到着せしめたのである。此處までの彼れ思想は最も眞摯なるものである。然るに此處に至るや、彼は俄然としてその奔放無碍なる想像の翼に吾人を乗せて、縹緲たるお伽噺の國に飛び去らうとする、而してその荒唐に對すれば、アラビヤの千一夜物語の夢も、最も嚴密なる寫實主義の譚たるが如き觀を呈する。

引力の原則は、勿論全自然界を支配する、随つて亦遊星の世界にも通用する。然るに現在の地軸は誤つて居る。それは遠からず本來の正當なる軌道に復歸しなければならない。其時には、北極と南極との間に於ける引力が結び付き、熱帯地方の氣候は之によつて緩和せられ、一方北極には氷山を熔かす光輪が出現する。斯くて西比利亞に柑橘の花咲き、シユピツベルゲンの邊、海豹は、矢の如く流るゝ氷山の代りに悠揚と漂ふ汽船の雄姿に眼を驚かすであらう。蛟鱈鯨鯨其他の有害なる怪物は、謂ふ

までも無く此の變動以前に滅び盡くし、さうして海底には、専ら人間の船舶を水上に曳くことを本分とするが如き新種の動物が生ずる。一條の光線が、海の鹹水を不可思議の魔術によつて清爽なるリモナーデに變じ、聰明なる化學者は玄武岩から最も甘美なる肉麵菓を作り出すであらう。

斯うした説を大真面目に唱へたフリーリエーを見て、人或は彼を精神錯亂の門口に立つ者であるを考へることも道理至極である。併し乍ら事實は決して左様ではなかつた。フリーリエーは單に氣まぐれの奇想に囚はれた畸人に過ぎない。荒誕なる宇宙論的の空想を除いては、彼は極端に理性的なる寧ろベダンテイックなる好青年であつた。例へば彼れの畢生の計畫たる労働團院の建設に於いて、彼の脚は確實に可能性の大地を踏まへて居た（註二）。労働團院といふのは、組合的社會的の機構を實現せんとする同志の労働者約一千八百人の團體の爲めに建てらるゝ大建造物である。謂ふまでも無く、最初の團院は何等革命的暴力手段に訴ふることなしに、協同的方法によつて建設せらるゝことを要する。此團體に参加する凡ての労働者は、先づ最初に一定の社會的最少限度の生計費が保證せられる上に、更に企業利潤の分配をも受ける仕組である、その分配率は労働者十二分の五、資本家十二分の四、智能者十二分の三であつた。それ故に其後年少氣銳のヴィクトル・コンシデラン（一八〇八—一八九三）を主幹として發行せられたフリーリエー派の日刊新聞「Phalange」は、標語として「革命なき社會改造、秩序、正義、及自由の實現。産業の組織化。資本と労働と智能との社會化」を掲げた。

フリーリエーは主張する、何人にもあれ一百万の資金を抛つて、之に相當する方哩の土地の上に斯くの如き團院を建設し、心情的引力の原則に基く労働團結を眞面目に實行せんと欲する一人篤志家だに出現すれば、社會問題は一舉にして解決せらるゝであらうと。恰も當年アルキメデスが、地球をその固定位置より擡ぐる爲めに地球の外に在る一點を求めた如く、今フリーリエーは、彼自身のアルキメデスの點として一個の團院を求め、之によつて、全社會の基礎根柢を震撼し、然かも何等の急激なる變革を用ゐず、單に之を模範として能く此大事を遂行し得べしと信じた。即ち若し、一旦世人が、労働節約と聯合生産とによつて、今は夢想だにせざる莫大なる利益を獲得し得る斯くの如き團院の効果が如何に顯著であるかに想像するならば、彼等は必ずや翕然相率ゐて——既に彼等に共通なる模倣衝動によりて——同様なる團院の組成に急ぐであらうと確信したのである。

一步を譲つて、之を以て精神錯亂なりとするも、少くとも其中に整然たる方法の存することは争ひ難い。而して若しフリーリエーが、狂熱的に彼れの社會的使命を確信したるの故を以て、彼を精神病院の代物たるに十分であるとなすならば、幾多の宗祖と社會改革家とは、共に同一病院の患者であると言はなければならぬ。何となれば盲目的に自ら信せざる者は決して隨喜者を見出すことが出来なからである。而して穎俊なるコンシデランを先頭とする彼れの徒は、サン・シモンのそれに比すれば慥に首尾一貫したる態度を有つて居た。蓋しフリーリエーが自己の社會的使命に徹底すること、サン・

シモンに比して遙に深かつたからである。

社会主義の理論に對する貢献も、無味なる宇宙論と荒誕なる未來の夢とを除去すれば、フリーリエに於いて遙にサン・シモンに於けるよりも多大であつた。兩者は、目的に適したる社会改良によつて社会革命を豫防せんと欲する點に於いて一致する。即ち彼等は反革命的社會主義者である。併し乍らサン・シモンが社会問題を解決するに、主として労働と智能との貴族主義を以てせんとしたるに反し、フリーリエの要求は遙に合理的である、即ち(一)労働に對する權利、(二)生存最低限度の社會的「保障」、(三)聯合生産の原則、並に之より生ずる労働組織化、(四)労働者保險及び信用制度等、是れである。而して之と共に吾人は將に眞正の科學的社會主義の堂に入らんとするのである。

(註一) 同様な實驗は、和蘭の Delft 市に於ても相當なる成功を示し、又佛蘭西の團院も同様に成績を挙げた。

第十四章 ルイ・ブランと「労働の組織」

一、プロレタリアの組織

從來の社会主義は、専ら理論的解釋説明の域に踰踏した。自家の思想を弘通肝銘せしめんが爲めに民衆の眞唯中に突進することは、サン・シモン及びフリーリエの兩者、共に之を敢てせず、特にフリーリエは就中退嬰的であつた。彼等の書齋が彼等の世界たるに止まり、彼等も亦書齋から書齋に向つて書いたに過ぎなかつた。彼等の思想に隨喜したる少數の徒も、彼等自身と同様な理論家であつて、社会主義により眞先に恩恵を受くべかりし無産階級の接觸交渉は、秋毫も有しなかつたのみならず、亦之を欲しさへしなかつた。サン・シモンは、勿論プロレタリアの悲惨に對して痛切なる感情を寄せ、一種の社會的宗教によつて之を向上せしめんと欲した。フリーリエに至つては、自身プロレタリアであつたに拘はらず、這般の感情をすら有たなかつた。併し乍ら社会改造は、上より下に向つて民衆の中へ齎らさるべきものであるとなしたる點に於いて、兩者は全然揆を一にして居る。彼等は、有産者自身が自己の利益の打算よりするにもせよ、將た又道徳的信念より出づるものにもせよ、兎に角早晚彼等の特權の若干を自由意志によりて放棄し、よつて以て無産者に國民の有する物資の全部を生

産に於ける正當なる分前を許容せんと欲するであらうといふことを、懸命に確信して居た。然るに此の二人の社會的空想家の根本的誤算は正しく此處に存した。一般の道義心は、境遇若くは法律によつて特權を與へられたる階級が、自由意志的に、被壓制階級の利益の爲めに自己の特權を放棄する程にまで尙ほ未だ發達して居なかつた。斯くの如く完成せられたる道義性と最も精良なる人道觀とは、恐らく幾千年に亘る道德的教化の究極の報酬として吾人を壓きつゝあるかも知れない、然かも現代人より直に斯くの如き思想を廣汎なる範圍に亘つて要求することは、現在に支配しつゝある公共道德の水準を餘りに甚だしく買ひ被ることを意味する。

若し第十八世紀のブルジョアが、當時支配したる封建制度の道德理想を善意に信頼して、貴族が自由と平等とを將來せんが爲めに彼れの特權を自由意志的に放棄するの目拱手期待して居たならば、彼等は恐らく遂に辛抱し切れなかつたであらう。然るに革命が勃發して、貴族があらゆる反抗の遂に秋毫も益する所無きを洞察するに及んで、貴族は初めて禍害を豫防制御し、彼れの凡ての特權喪失が他人によつて宣言せらるゝ前に、逸早く先手を打つて、形式よりすれば如何にも自由意志によつて此特權を放棄したるが如く立廻はる丈の伶俐さを有するに至つた。彼は他の力未だ吾に加はらざる間に、自ら進んで大勢に順應したのである。

然るに此の過程が人爲的に促進せられたのは、プロレタリアの組織化によるものであつた。若し、

多數の無産者が少數の有産者に對して一致團結すること、宛も當年佛蘭西に於いて政治的に權利無く國家的に力無かりし多數が、國家的に特權を享有する兩上層階級の少數に對して結合したが如くならば、特權階級も亦その道德的意識を喚起せられ鋭敏ならしめらるゝであらう。而て當時ノアイユ侯其他の貴族が正義の感奮より、舊様の墨守すべからざる所以を達觀して自ら彼等の特權の廢止を提議したるが如く、既に今日に於いても亦、プロレタリアが確定的要求を提ぐる一個の政黨にまで團結組織せられたる状態に鑑み、労働者の要求に共鳴し、或は更に進んで自ら此の政黨の先頭に立つことを辭せず、之によつて現今社會秩序の弊害を廢除せんと欲する幾多の有産者を見るに至つた。而して、其處には二條の大道があつた。其一は「自助による團體的生産」である。ブーヘル此途を行き、而して獨逸に於いてシュルツェ・デリッテ之に追隨した。其二は「國助による團體的生産」である。ルイ・ブラン此方向を進み、而して獨逸に於いてフェルディナント・ラサール之を踏襲した。

社會主義がサン・シモン及フーリエの徒の響に倣ひて抽象的理論解説の境地に彷徨するを屑とせず、此埒外に出で潑刺たる現實に踏み入り、明白なる實際的效果を顯出せんことを欲するならば、善く民衆心情の繊細なる組織を観察し、微妙なる震動を解釋することを得る實際家を必要とすることは言を俟たない。而してルイ・ブランは實に其人であつた。

ルイ・ブラン（一八一二—一八八二）は大規模なるの實際的社會主義者の最初の人である。彼は佛蘭

西のプロレタリアをして、一方自己の惨状を意識せしめたと同時に、他方亦自己の力を意識せしめたるの功績を有する。從來世人は、單に微弱なる社會主義的小結社を知るのみであつた。然るにルイ・ブラン一度現はるゝに及んで、一個の鞏固なる社會主義の黨派が遽然として生長し、日ならずして洪大なる擴がりを探るに至つた。而して細胞が細胞核無しには生活能力なきが如く、政黨も亦指導者無しには存続することが出来ない。ブランはその性情と傾向とによつて天賦の黨首であつた。彼れの出現以前までは、單に朦朧渾沌たる群衆に過ぎず、徹底的行動に出でんが爲めには、之を指して蕩進すべき目標を知らざるが故に、全然團結性を缺いて居たものを、彼はその力強き人格により、群衆の盲動に確乎たる針路を示し、努力して到達すべき目標を明瞭に眼前に掲ぐることに由りて原子的分立状態を脱せしめ、一個労働黨の牢乎たる集合體に作り上げたのである。

二、國家社會主義

併し乍らルイ・ブランが社會主義の中へ加味し而して之によつて有力なる一政黨の高さにまで社會主義を引き揚げたる新機軸の思想は、シスモンディ（一七七三—一八四二）を踏襲したりと覺しき國家思想である。從來の社會主義はその努力庶幾せる改造に於いて、社會、而かもブルジョアの有産階級から出發し、而して私人的道程を辿り、國家といふものを迂回して彼等の改造を貫徹せんと企て

た。然るにブランの要求は之に反し、社會主義は上より下に向つては無く、下より上に向つて發展せざるべからずと主張した。随つて彼れの最も急とする要求は、第一、労働其自身の組織化、並に労働者の自己の黨派への團結であり、第二は、労働黨がその頭数の優勢を利用して國家の舵機を掌裡に收め、之によつて彼等が法律に適應せる方法に於いて、何等の革命を須むずに、所期の社會改造を専ら投票によりて達成し得べきことである。國家といふ健全なる組織が、一千年の星霜の間に、複雑多趣を極めたる民族の集團から渾然として純一なる佛蘭西國民を創造するの大功を成したとするならば、労働者の多數の所有に屬する同一の國家制度が、同様に階級の差別を撤廢し社會的不平等を緩和し、而して年月を経る間に全然之を除去するの功を成すことも決して不可能ではない筈である。彼は説いて居る。即ちルイ・ブランは、單にプロレタリア組織者の元勳であるのみならず、亦實に最初の國家社會主義者であり、而して此の元祖として、獨逸の社會主義者ラサール、ロートベルツス及びフオン・フォルマルに對して、亦理論的に甚深なる影響を與へた者である。

ルイ・ブランは彼れの著書に於いて、大衆に向つて適勁なる二箇の警語を放つた。一は「労働を要求する權利」と謂ひ、他を「労働の組織化」と謂ふ。而して此警語は、決して彼自身の創造する所では無く、寧ろ單に既往の社會主義者より借り來つて自家藥籠中のものとしたるに過ぎなかつたとは謂ひ條、而かも常に之を提げて、絶對的威力を有する政治俱樂部にて或は逐日勢力を加へ來れる新聞紙

上にて大聲疾呼したるが爲めに、彼は何時しか思ひも寄らず労働者の首領となつて仕舞つたのである。ブルジョアジーと庶民との對照を明確に力説することルイ・ブランの如きは古來未だ曾て有らざる所、彼は實に之によつて自ら指導者の役割に就いたのである。ブラン自身も亦、その社會主義的思想を最も簡潔明快に「労働の組織」(Organisation du travail, 1840)の中に説明して居る。彼の一八四八年革命の完全なる社會主義的プログラムは、本書之を悉くして餘蘊がない。彼の思想は、「一八三〇年乃至一八四〇年の十年史」「佛蘭西革命史」等、有名なる著書中にも極めて明瞭に發表せられて居る。而かも直截簡明要領を盡くせる點に於いては、「労働の組織」を以て白眉としなければならぬ。

彼れの生涯には歴史的頂點がある。吾人は之を明かにせんと欲する。一八四八年の初に當り、佛國には民主黨の外、更に一個獨自の社會民主黨が存在した。是は、就中ルイ・ブランの煽動的活動に負ふ所が多かつたものである。社會民主黨の中樞は、Reforme紙の編輯局であつた。それで、一八四八年二月革命が突發し、而して共和國の勝利を以て局を結んだ時、「臨時政府」は改造黨の四名の黨員を包含し、而して其首班はルイ・ブラン其人であつた。是れ實に新黨としては異常の成功であり、而して若しブランにして當時此成功を遺憾無く巧に利用することを解したならば、世界は必ず社會主義的國家が如何に形成せらるべきかの例證を目睹することが出来たであらう。ブランは自己の背後にプロレタリアの全軍が味方として續くといふ確信を有したが故に、殆んど無制限の精神的勢力を掌握して

意氣軒昂當るべからざるものがあつた。随つて當初、彼は勢に乗じて徹底的なる社會改造を試みた。第一には、有名なる「進歩省」創設の計畫である。此は政府部内にありて、主としてプロレタリアの利益を代表せんとするものであつた。然るに、閣員中のブランの同僚就中ラマルティヌ(一七九〇—一八六九)が必死となつて之に反對し、之に代ふるに、ルイ・ブランを首班とする常設労働問題解決委員會を設立せんことを提議した。當初ブランは之を承諾せず、「抑も諸君は余が、飢ゑたる民衆の前に飢餓に關する講演を爲すべく招聘せらるべき、過激なる學校の開設を望む乎？」と書いたが、結局遂に之に讓歩した。革命的の民衆は戶外に佇立して、「進歩省」と「労働の組織」とに關する政府の決定を今や遅しと待ち構へて居た。

ルイ・ブランは同年二月二十五日臨時政府を促して遂に「労働を要求する權利」を許容する閣令を發布せしめた。而して、此の閣令に基きブランの指揮の下に建設せられた「國立作業場」は、不幸にして組織制度の宜しきを得ず、未熟なる計畫と早急に失したる事業開始とに累せられ豫期の成績を擧げ得なかつたとは謂へ、是れは決してブランの這個破天荒なる着想の實行可能性を疑ふべき證左となすことは出来ない。革命の暴風の中にあつて繁榮せざるものは、却つて平和の日光の中に駭々として生育し得るものである。兎に角今やブランの苦心により、明かに社會主義的なる「労働を要求する權利」の原則は、公式に討議の題目となるを得、向後復た日程の中より消失せざるに至つた。最も注目

に値することは僅々數十年前の獨逸帝國議會（一八八四年）に於いて、この勞働要求の權利と謂ふ思想には、確かに剴切正當なる或物のその根柢に存することが承認せられたる一事である。而かも此の社會主義的思想を公言して憚らなかつた者は、誰あらうビスマーク公其人であつた。

ルイ・ブランの國家社會主義の根本思想は次の如くである。曰く、社會主義的將來國家へ向つての現在社會の漸進的推移、即ち是れである。而して、この過渡を促進すべき最重要の手段は、「進歩省」を設立し、鐵道、鑛山、兌換銀行、保險局等の管理に當ると共に、一方、勞働組合が國家の保護の下に生産する物資の小賣及却賣に對する公設市場を建立するの任務を、該省に課するにある（註一）。又一種の實物通貨制度をも設くる。次に、農業勞働者及工業勞働者は聯合生産に従事し、低廉なる利息にて生産に必要な資本の前渡を受け得る。斯くの如くにして得られたる利益の全額より、先づ勞働賃銀を含む一切の費用を控除し、其殘餘の中、四分の一は資本償却に、次の四分の一は勞働に堪へざる者の救恤資金に、第三の四分の一は純益配當として勞働聯合の所屬者に對する分配に、最後の四分の一は、恐慌時に對する準備資金に夫々之を充當する。

此の國家社會主義の主要動機は、遠からず一種の經濟的無政府狀態に墮了するの外なかるべき現今經濟制度の激烈なる競争を、決定的に終熄せしむることを目的とするものである。蓋し競争の原則は利己主義を激成助長し、嫉視、憎惡、詐偽の如き人間の最も卑陋なる衝動を促すものである。人間性

情に於けるこの惡魔に對して吾人を防衛する者は、唯一の魔王ベールツェブあるのみ。敵の武器によつて敵を克服するは古來の戦法である。現在社會の敵は無政府的競争である。吾人をして、類似治療 (homöopathie)——健康體に於いて、治療せらるべき病氣と同一なる症徴を現はす藥品を用ゐる療法)を試みしめよ、毒を以て毒を制し、個人的競争に對して、國家の庇護を受くる勞働組合を對抗せしむることによつて、競争を以て競争を折伏せしめよ。若し今日、資本を征服するは獨り資本のみ之を能くすとならば、國家こそ實に最大の資本家として他の資本を膺懲すべきものである。個人的資本家は、若し國家がその勞働組合の手段により、有益に之を使用せんが爲めに彼等の資本を、適當なる利息にて收用するならば、次第に喜んで之に應ずるであらう。而して一方國家は、生産に當つて自ら利することを希はず、専ら勞働者の經濟的地位を向上せしめんと欲するが故に、勞働階級に屬する人民に取つて遺憾無く之を慈育するであらう。斯くの如くにして國家の作業場は、一の革命を須むずして次第に個人的産業を吸収し、其間復た今日の經濟秩序に於けるが如く、人格無き株式會社が、小資本家を無慚に粉碎するの憂無きに至るであらう。

即ち之を約言するに、サン・シモンはその社會主義を、宗教の概念の上に、フーリエは之を物質的享樂の満足の上に建設したりとすれば、ルイ・ブランは則ち之を國家の理念の上に建設した者である。

(註一) 凡そ此等の實際的勢力は多大なる社會史的興味を味ふるものたることは謂ふまでも無いが、その代りに社會哲學的興味を與ふることはそれ丈け少ない。凡て此等の社會主義的實驗はロバート・オーウェンの場合も同じく消極的結果を示したことは周知の事實である。随つて彼等は單に徵候として注目の價值あるに止まる。一個の社會哲學の範圍内に於いて之を詳細に研究論述すべき理由は存しない。オーウェンの著書中、科學的背景を有するものとしては茲には「A new view of Society」(1813)「The Book of the new moral world」(London, 1820)を擧ぐるに止める。

第十五章 社會主義の懷疑者ブルードン

一、財産は盜奪なり

凡そ、新に出現する思潮は、暇々たる成功を收むると同時に、一方時と共に之が懷疑者を見出だすを常とする。思想の果實が成熟に近づくや否や、その核心に蝕み入らんとする疑の蟲も亦生ずる。社會主義が僅にサン・シモン、フーリエ、及びルイ・ブランに於いて起生したと思ふ間もあらせず、疾く既に、自身も亦先天的社會主義でありながら社會主義に對して容赦無き批判を試みたるブルードン(一八〇九—一八六五)其人が、亦卒然として現はれた。

當初ブルードンは完成せられたる無政府主義者として進んだ、随つて吾人は彼を以て、直に無政府主義の鼻祖と爲さなければならぬ。一八四〇年に出でたる著書「財産とは何ぞや?」に於いて、彼は財産に對して激烈なる戰爭を宣言して居る。殆ど痴に近き自尊的性質と、狂に隣して滾々たる想像との全幅の強調を傾けて、彼は全社會の面上に「財産は盜奪也」(La propriété c'est le vol)の惡罵を浴びせ、而して更に「千載の中また斯くの如き語の發せらるゝことなかるべし。余は此世に於いて、財産の這個の定義より外一物をも有せず。而かも余に取りて此定義は、ロートシルト家(有名なる銀行

家、一八〇六年ヘッセンのヴィルヘルム選帝侯の財産を自己の危険を冒して佛人の手より救つた。五子宗家より獨立して、維納、巴里、倫敦、ナポリ等に業を営む——譯者)の鉅萬の富よりも遙に貴し。余は主張して憚らず、此定義はルイ・フィリップ治下に於ける最も重大なる出來事也」と切言して居る。

この惡罵の理由は、凡そ物資の正當なる分配は必ず平等なる分配でなければならぬとする主張を基礎とする。併し乍ら彼れの推理の本源に於いて、既に誤謬が潜在する。怠惰なる者と勤勉なる者とが生産品の同等なる分前を得、天才的なる發明者と愚鈍なる凡人とが同等なる分前を得ることは、決して正當ではない。眞の正義は寧ろ曩にサン・シモンが主張したる如く比例的の、換言すれば、各人に對しその能力と業績とに應じて與へらるゝ物資分配を要求する。流石にブルードン自身も、後に至つて遂に前非を覺り、爾來「流行語」となつたかの警句を、諸著述の中に自ら撤回した。例へば、彼が價值構成の要求として、能力及び業績の質的平均を擧げて居る「困窮の哲學」に於けるが如き、其一例である。

併し乍ら此警句を採つて、直にブルードンがあらゆる有産者を、その有産者なるの故を以て一概に社會に對する偷兒であると爲したものと解することは謬である。成程彼は何等の系統秩序も無く雜然として掻き集めたる教養に累せられてあらゆる混迷に陥つた嫌はあつたとは謂へ、而かも上述の如き無謀なる斷定をなすには、餘りに眞摯なる思索家であつた。彼は寧ろ個々の有産者は、社會から彼に

強ひらるゝ境遇に止むを得ず彷徨する者なるが故に、之に對して責任を問ふこと能はざる者であることを認めた。即ち、責任あるものは個人に非ずして獨り社會に在りと爲して居たのである。

加之「財産は盜奪也」の公式は、若し之を説明するにブルードンの爾餘の著書を參酌するならば、全然別個の意義を有し來るものである。ブルードンが矢面に立つたものは、決して財産其自身——自力に依つて獲得せられたるものは勿論、假令單に相續せられたるに過ぎざるものと雖も苟も正當なる財産なる限り亦同じ——ではない。寧ろ彼は専ら不勞の所得を目の敵にしたのである。彼をして財産に對する義憤を發せしめたるは、利子、小作料、家賃等に於けるその形式であつた。更に之を約言すれば、彼の憎惡を集中したる對象は貸子(Rente)であつた。貸子は不勞所得である。之に對して、唯だ之に對してのみブルードンの道德的感情が反抗の氣勢を掲げたのである。即ち彼は——就中その初期の各著述に於いて——アダム・スミスの説を偏狹に解釋して、勞働が富の唯一の源泉をなすものであると斷定し、而して若し然りとせば、勞働者は彼れの勞働の十分なる利得を請求するの權利を有すべき筈であるに拘らず、今日の状態にありては勞働者の得る所は僅に其の三分の一を出でず、爾餘の三分の二は資本利子及企業利潤の私する所となつて居るとなした。斯くて資本は勞働者によつて生産せられ従つて當然勞働者に歸すべき財貨の大部分を恣に勞働者より借奪することによつて勞働者を搾取する。ブルードンに従へば茲に社會問題の核心が藏せられるのである。若し國家の爲め勞働者に與ふ

るに無利子の信用を以てするならば、不勞所得即ち資本利子は一舉にして壊滅する。何となれば、吾人が利子無しに信用を得るものとせば、何人も利子を拂つて資本家より資金を借入るゝ如き愚を敢てしないからである。然らば、若し資本家にしてその資本を坐食消耗し盡くさざらんことを欲すれば、將來何等の擧に出づべきであらうか？ 彼等は必ず自ら勞働しなければならなくなるであらう！ プルードンの欲するは正に是れであり、唯だ是のみである。資本家は資本利子の廢棄によりて自ら勞働することを強制せらるべく、其時こそ世にまた不勞所得といふものを見ず、其時こそ、社會的正義が確立せらるゝであらう。其曉には最早所有 (Eigentum) は存在せず、單に占有 (Besitz) 即ち人がよつて以て生活せんが爲めに之を流通せしめざるべからざる個々の資本が殘留するのみである。然らば如何なる形式の政府の下に此過程が行はるべきであるか。之れは孰れの政府の下にありても必しも不可能ではない、併し、政府無き場合を以て最も好しとする。余は共和主義者に非ず、君主々義者にも非ず」とプルードンは曰ふ。「余は實に無政府主義者也」と(註二)將來の社會は如何なる君主をも有せずして存續することを要する。民衆の頂上には科學の最高學府があり、市民は此學府の常任當局者即ち眞の國務長官に對して各自の社會改造意見を提出すべく、此提案は、學府に於いて討查研究せらるゝものである。「即ち碩學哲人の支配例へばプラトンの理想國家、フィヒテの監督長官 (Ephoren) —— スバルタに於いて人民より選出せらるゝ五名の司法官、後に外交の事をも掌るに至つたものを謂ふ。

フィヒテ之をその國家論中に轉用したり。)の如き是れである。斯くする時人民が法律の監視者にして執行權力である」プルードンは彼れの改造案に就いて牢乎たる自信を有し、嘗て大膽に主張したことがある。「余が提案する所は決して奇想天外のユトピアに非ず。否余は絶對的の眞理を提げて起つ者、之に對して一切の考量は不可能に、一切の疑義の表現は滑稽也」と。

二、社會主義との分離

プルードンが彼と相隣る社會主義者と絶ち、彼れの體系を極めて潔癖に社會主義より分離せしめんことを欲したるは、興味ある事實である。曩にカペー及ルイ・ブランが同胞愛の原則の上に世界を建設せんと欲したるに對し、プルードンは之を批難して曰つた「若し萬人が我が兄弟であるならば、余は明白に一人の兄弟をも有たないことになる。余は之によつて幾百萬の兄弟を與へられたるに非ずして、寧ろ余の眞實の兄弟を奪はれたものである。若し最も崇高なる羈絆即ち家族が支離滅裂となるならば、各人は乾枯せる木乃伊の如く、落莫蕭條たる孤獨の中に塵埃となつて飛散するであらう。」

「困窮の哲學」第二編第十二章に於いて、プルードンは親交なる社會主義者ヴィルガーデルに宛てた手簡の形を籍りて、社會主義に對する痛烈なる愛想盡かしを述べて居る。彼は社會主義を以て尙ほ未だ夢想郷の卵の殻を脱却せざるものと嘲り、人若し羅馬者 (Römling) —— カトリック教徒に對する輕

蔑的稱呼)即ちカトリク教に墮了せざらんが爲めに社會主義者たらんことを欲するならば、是れロヨラ(一四九一—一五五六)を憚つてカグリヨストロ(第十八世紀の伊國の冒險家、一七六九年以來煉金術士又は巫術家として歐洲を遍歴し非常なる渴仰を受く。一七八五年佛國宮廷に起つた所謂「頸飾事件」の渦中に投じ翌年破門せられ、一七八九年羅馬に於いて獄死す——譯者)に款を通ずるに等しいとなし、更に、社會主義は數十年來一個の新科學を誇稱し乍ら、未だ嘗て實際に一の難問題をも解決せず、又世界に向つて無限の富を約束し乍ら、自らは施與喜捨によりて僅に露命を繋ぐが故に、畢竟一場の空談に過ぎずと罵倒した。

彼は劈頭第一に、平等と自由との間に於ける矛盾を剔抉した。若し國家が個人の先天的不平等を無視して、人爲的平等を樹立するを要するものならば、之を遂行する手段は獄吏と警官あるのみである。而かも同時に吾人は自由を葬り去るの外は無い。ブルードンは痛言する、「自由よ、汝無しには勞働は苦惱にして、生命は單に長き死たるに過ぎず。人類は、大初より以來、獨り汝の爲めに惡闘する」「自由を絶滅せよ、さらば人間は、幻滅の鐵鎖を墓穴まで牽きする奴隷に外ならない。生存の個人主義を絶滅せよ、人類は水虵の一大群棲體と化するであらう」と。即ちブルードンは、フイエルバッハの徒弟、及び青年時代のマルクスが祖述宣傳したるルッソーの理論即ち、人間性善説——人間は先天的に且つその本質上、善良なりとする説——を否定し、ホップスの説、及び人類の原始状態は、友愛状態に

非ずして露骨なる利己主義の状態であるとするカントの「根本惡」に左袒する。吾人が到達したる微々たる程度の愛他主義即ち友愛は、教化、然かも幾百年に亙る苦心慘憺たる教化の成果に過ぎない。吾人の心情の中へ極めて掻い撫でに説教せらるゝ友愛は決して永續するものではない。之を證するは原始基督教であつて、當初純粹に友愛であつたものが、忽ち内面的混亂に累せられ、グノスチク派、ネストリウス派、ペラギウス派の如き幾多の宗派に四分五裂した。之と同様に、乞食僧團(フランチス派、ドミニカン派、アウグスチン派等)の共產主義も不健全である。何となれば、彼等は當初最善の意圖に於いて、純粹なる無一物を宗としたが、併し最後は極めて自然のこと乍ら、僧侶の粗野と不潔とに終つた。是に由て之を觀るに、久しきに恒つて愉らざる友愛は、最も嚴格なる正義を基礎として建てられ、加ふるに幾百年の間、完全なる教育法によつて吾人の中に養成せらるゝ底のものでなければならぬ。

然るに吾人が尙ほ未だ半ば野獸の域に彷徨しつゝある今日、疾く既に「友愛か、然らすんば死」を要求するは、「財布か、然らすんば命」(命が欲しくば金を出せ!)を要求することを意味する。加之、此は最も苛酷なる壓制なしには實行し得ざることである。事實カペー、フリーリエー、ルイ・ブランの如き人々は、甚だしく偏執頑強、他を容るゝの雅懷に乏しかつた。彼等は明白に工業、商業乃至思想界、甚だしきは私的生活に於いても獨裁專權を愛好した。「社會的國家の頂上には、併し乍ら、一個の完

全なる人が立たなければならぬ」といふ思想は、彼等に在つて到る處に逢着する。是れ獨裁に非ずして何であらう。然かも共産主義は、之によつて天に向つて唾を吐くの愚に陥つて居る。何となれば、彼は、その絶頂に於いて、卒然専制主義に轉するが故である。吾人が幾多革命の流血を敢てして専制主義を克服したのは、果してかの論理學に所謂循環論法に於けるが如く、共産主義の迂回路を経て再び専制主義に復歸せんが爲めであつたか？ 般鑑遠からず露西亞に存する。

此理由を以てブルードンは、共産主義を以て、不十分、不徹底、實行不可能、而して特に危険であるとなして居る。就中此危険はフリーエーの方法に於いて最も甚だしい。其の一日七回食事の滋養物療法を施し、其合間々々に労働が嬉遊的に進捗せしむと謂ふが如き、全然労働を以て遊戯の地位にまで引き下ぐる所以である。抑も如何にして斯くの如きことが可能であらうか？ 經驗の示す處に隨へば、人間は食事の後に於いて最も労働を嫌惡し懶惰となるものである。然るに彼をして七回も飽くまで食はしむるならば、彼は労働回避の口實を有つこと同じく七回に及ぶのである。既に労働無し、何處より榮養物と諸般の需要を満たすべき物とを得來らんとするか。而かも之に比して尙ほ遙に疑はしきは、労働の教育的價値の缺くべからざることである。而してフリーエーは全然此點を看過した。ブルードンは、此處に於いても彼れの強烈なる道義的感傷を示して居る。彼より見れば、労働は單に生計の策としての煩勞なる手段に非るのみならず、寧ろ自己を神聖化する目的である。労働せざる者は、單に

閑居の徒然無聊よりしてあらゆる不善に陥るが故に、眞に社會の癌腫と謂はなければならない。須らく凡ての人を強制して労働に就かしめよ、卿等は一擧にして其道德の向上を目撃するであらう、蓋し労働は、邪念妄想の自然の轉向法である。懸命に十時間の労働をなしたる者は、それが頭腦の労働なると四肢の労働たることを問はず、殘餘の時間を高尚にして快適なる閑暇の中に銷却し得るのである。文化が向上するに隨つて、吾人の労働程度も増大する。機械が吾人の勞力を節約すとは一般に信せらるゝことであるが、實は當らない。機械は間斷なく之を監督すべき人員を要するが故に、寧ろ人間の労働を増加する。農夫は平均して、工場労働者若くは工場主より勤勞が少ない。勿論時として農夫は早起をしなければならぬ、併し乍らその代りに、農閑時と稱して殆んど勞役せざる數箇月の時期を有する。故に近代文化の象徴たる機械が吾人の労働を減殺するといふ斷定は、根本的に謬つて居る、寧ろ反對に、新しき機械の出づる毎に、新しき勤勉なる人員を要すると謂ふを妨げない、蓋し人間無き機械は、魂無く、働き無く、價値無きが故である。併し乍ら労働其物を蔑視するは輕佻である。労働が無ければ、文化の全機構は錆び着いて仕舞はなければならない。労働を聖視せよ、之を蔑視せずして靈化せよ、労働せざる者を卿等の間に伴侶とすることを忍ぶ莫れ、利子、小作料、賃貸料等に於いて現はるゝ不勞所得を絶滅せよ、斯くて社會問題は解決せらるべし。財産即ち利子を生ずる資本を廢棄し、之に代ふるに個々の相續すべき占有を以てせよ——如何となれば、相續可能性なくんば、凡

ての占有は價值無き茶番に過ぎずと認めらるゝが故である——是れ民衆の幸福を保證確立する所以である、ブルードンは斯くの如く社會に向つて疾呼した（註三）。

吾人をしてブルードンの積極的提案を觀察せしめよ。彼は、先づ、全勞働利得に對する勞働者の請求權を力説する。若此權利を認めるならば、資本金即ち凡ての不勞所得は自然に消滅する。何となれば、勞働者が正當穩健なる企業利潤（註三）を控除したる後、彼れの勞働の全利得を享受するならば、其處には資本金の存在すべき餘地を生じないからである（註四）。

三、交換銀行

然らば勞働聯合は、何處より無利子の資本を仰ぐべきか？ 之に對してブルードンは、一八四九年に出でたる「交換銀行」論の中に答案を與へて居る。即ち一種の庶民銀行又は交換銀行を設立し、結合せる勞働者に、事業經營資金として無利子の貸附をなさしめ、最初は、過渡期として二パーセントの利子を徴するが、最後には之を銀行經營費を支辨するに足るべき僅々二分の一パーセントに低減するの規定である。即ち爾餘の社會主義者が、單に勞働の組織化のみに於いて發見し得たりとなして得々たる賢者の石を、ブルードンは信用の無償に於いて覓め得たりと信じた。之によつて、命題「自由」とその對偶たる「平等」との間の綜合が、此兩者を包含する正義の中に見出だされた。而してブルードンは其私淑崇拜せるヘーゲルに倣つて、常に斯くの如き綜合を求めて居た。

理論に於いては、綜合も亦頗る道理あるが如く聞こえる。併し乍ら如何にして之を實行すべきか？ 庶民銀行は五萬フランの株式資本を以て創立し、一種の勞働紙幣——英國人オウエンの故智を襲うて——即ち強制通用力を有する價值交換具を勞働者の爲めに發行する。而して勞働者はその賃銀を此の勞働貨幣又は物品貨幣に於いて受領し、一方必需品の購入も此制度に加入して此物品貨幣を額面通りの價值に於いて代價として受取る商人の許に限ることとするといふ仕組である。然るに、かゝる物品貨幣は、莫大なる資本を以て計畫を樹てたオウエンの場合にすら失敗を示した。況んや、五萬フランの目腐れ金を以て何事を爲さんとするか？ 若し庶民銀行が其の小人嶋的資本を基礎として任意の額の證券を發行するならば、何人が之を引受けようぞ？ 當年佛蘭西革命時代の紙幣が然りし如く、現時のルーブル、クローネ、マーク等の然るが如く、此物品貨幣も亦反古紙に墮せずんば幸である。是に由つて之を觀れば、終生昂然として自らプロレタリアと稱したるブルードンは、大資本に關して、恰も盲者の色彩に於けると等しき觀念を有したるに過ぎない（註五）。幸にして彼は出版條令違反の廉を以て禁錮せられたるが爲め、庶民銀行設立に對する五萬フランの株式募集が實現しなかつた。之が爲めブルードンは辛うじてサン・シモン一派がアンファンタンに於いて、フーリエの徒が勞働團院に於いて、レイブランが國民作業場に於いて、カペーがイカリ嶋植民地ナウヴォーに於いて、オ

イウエンが労働聯合に於いて、而して最近は露國ボルシェヴィキ派の土地國有計畫に於いて嘗のたるが如き苦き幻滅を味ふことを免れた。然かもその能く之を免れ得たるは、彼れの庶民銀行が全然晝餅に歸したるが故に外ならない。庶民銀行はブルードンが提案したるが如き形式に於いては、紛ふ方無く死の印章を眞額に捺出せられて居た。そしてブルードン自身は、恐らくアンファンタン、カペー其他の諸子と等しく、癲狂院に非ずんば監獄の中に其生を畢つたに違ひ無い。彼を此厄災より救つたのは一個の僥倖であつた。彼は一八六五年、植字工兼文士のプロレタリアとしての一生を、パシー(Passy)に於いて終つた。若し世に名悪しく實善き者ありとしたならば、それは、無政府主義者として誹謗罵詈擗斥せられたブルードンであつた。彼は徹頭徹尾純良なる性質であり、獨學に拘はらず博識家であり、就中堂々たる文筆の士であつた。ブルードンの無政府主義を一個の體系に鑄上げ、實行に轉せんと試むる時、それは一舉にして頓挫する。無政府主義は唯だ紙上に於いてのみ正しい。現實は自ら趣を殊にして居る。

(註一) 此言によつて、ブルードンは、自ら無政府主義創始者の銘を打つた。彼より先には、ウィリアム・モッドウインの "An Inquiry concerning political Justice and its influence on General virtue and happiness" (London 1793) 及びウィリアム・トムクスの "An inquiry into the principles of the distribution of wealth" (London 1837) がある。併し乍ら此二人の無政府主義理論家は、殆ど何等の影響をも與へなかつた。アントン・メンガーが此等の著書を、埋没から發掘したのである。

(註二) ブルードンが廢棄せんと主張するは、金錢及利子のみであつて、私經濟的生産方法そのものではない。"Handwörterbuch

der Staats wissenschaften" 所載 K. Tiel の「ブルードン」の條下参照。

(註三) ブルードンの制度完成せる社會に於いては、此の企業利潤も、道徳的に正當なる労働餘利と爲つて仕舞ふ。之に對して彼は如何はしき名稱「Rente」を冠せしめて憚らない。

(註四) マルクスの「哲學の困難」(Elead des philosophie) に現はれて居るブルードンに對する辛辣なる批判を参照せよ。

(註五) 併し乍ら彼自身と雖も冷靜なる時には、その實際的提案を懐疑的眼光を以て視るの明を有した。

第十六章 獨逸社會主義の發端

二四四

一、フイヒテ

社會主義は、凡ての文化國民の中獨逸人にありて最も早く其根ざしを固めた、而かも一度根ざした後は、獨逸人が科學的社會主義の旗手と目せらるゝ程、牢乎たるものとなつた。現今の獨逸労働組合は最近ローザ・ルクセンブルクが其著「資本の集積」に於いて、又ヒルファディングが「財政資本」に於いて代表したるが如き、整然たる科學的社會主義を基礎として居る。凡そ諸般の問題を科學的に究明して纏まりを着くる點にかけては、古來ゲルマン民族が一頭地を抜いて居る。今若干の例によつて之を證明するに、火藥を豫感したのは英國人ローチャー・ペーコンであつて、之を發明したのは獨逸人ベルトルト・シュヴルツである。和蘭人コーステルは印刷術の道筋を嗅ぎ附け、そしてグーテンベルクが之を發見した。伊太利人サヴァナローラが夢想した教會の組織改造は獨逸人ルター及ツウィングリの宗教改革となつて實現した。佛國の百科辭典編纂者たる學者團は、哲學の全體が根本的に改造せられなければならないことを、本能的に感得した。而して、カントがこの改造を實行した。偉大なる衝動は大抵拉典民族、就中佛蘭西人に由來し、偉大なる行爲は之に反して主としてゲルマン民族特

に英國人及獨逸人によつて實現せられた。天賦の想像力に富む佛蘭西人は偉大なる着想をなし、實際的なる英國人は之を現實に變化せしめんことを試み、最後に理想主義的なる獨逸人は、之を究極の關係に於いて闡明せしむば止まない。モレリ、マブリ、ルソー、サン・ジュスト等が佛國に於いて社會主義的問題を討議に提出し、英國人ロバート・オーウェンは彼れの仕事場に於いて、初めて社會主義の原則を現實に發現せしめ、而して最後に獨逸哲學者ヨーハン・ゴットリーブ・フイヒテは、社會主義に與ふるに廣濶なる法理學基礎を以てせんことを欲した。即ち社會主義は、佛國に於いては政治的討論の結果であり、英國にあつては機械の產物、換言すれば工業の社會的反映の產物であり、最後に獨逸に於いて社會主義の理論は哲學の所産である。即ち獨逸に於いてフイヒテを促して哲學的に社會問題に近接せしめたる所以は、佛國に於けるが如く政治的混亂にも非ず、又英國に於けるが如く機械によつてその惡靈を喚び出だされたる群衆悲慘にも非ず、實にそれ自身としての社會問題に外ならなかつたのである。

請ふまでもなく、獨逸社會主義の父等は、佛國社會主義諸派の影響を全然否認することが出来ない。フイヒテは主としてルソーの影響下に立ち、マロー（これはヴィンケルブレヒ Winkelblech の匿名である）は、ルイ・ブランの下風を拜し、最後にヴァイトリングは、フリーエーの思想に支配せられた。併し乍ら此等獨逸頭顱の中に描き成されたる社會主義の世界は、彼の先人の模範と全然趣を殊に

する。此等頭顱の各々は、之を截然とその模範より分離せしむる一種の特性によつて彼等の世界を描出したのである。

絶対觀念論の代表者であり、フェルディナント・ラサールの哲學的半神であるヨーハン・ゴットリーブ・フィヒテ（一七六二—一八一四）は、社會主義的警察國家の先驅者であつた。彼の社會思想を叙述するものは、その「封鎖せる商業國」（一八〇〇年）である。是より先、既に彼れの「自然法」に於いて然りしが如く、「商業國」の思想はルソーの契約理論から出發して居る。フィヒテ著作集第三卷四〇〇頁）此理論によれば、人間の自由行動の範圍は、凡ての人が凡ての人との間に結ぶ契約により、各人は苟も他人が彼の財産を尊重する限り、後者の財産を侵さず、といふ具合にして成立確定するものである。契約以前に於ける人類の原始状態にありては、各人の占有したるものに對して、他人が之を爭奪することが可能であつたが故に、世に自由といふものは存在しなかつた、故を以て占有と享樂との自由は、獨り國家契約の範圍内に於いて可能であり、而して國家は此契約を保護することを以て主要任務とする。國家は亦此契約の意圖と動機とに對して干渉監督をしなければならぬ。此の動機と意圖とを約言すれば、前にも述べた如く「契約締結の當事者たる余は、隣人が余の勢圍を尊重する限り、隣人の勢圍に對する一切の侵犯を斷念すべし」といふことに歸着する。併し乍ら此の契約は單に何物かを占有する者、即ち此契約を嚴格に遵守することを以て利益とする者に取りてのみ價值と適用とを

有することは謂ふ迄も無い。故に若し國家が、此契約が遺憾なく凡ての方面に於いて尊重せらるゝことを欲するならば、國家は先づ第一着に、その人民の各員がよつて以て生活するに足る丈けのものを占有し得るように配慮することを要する。フィヒテは曰ふ、「國家の任務は、各人に對して先づ彼の財産を與へ、彼をその財産の中に据ゑ付け、而して、その状態に於いて彼を保護することである。」（全集第三卷三九九頁）如何となれば、「凡そ生を自然に稟けたる者は、悉く生存の可能に對して一様平等なる請求權を有する。故に分配は、先づ凡ての人が之によつて存続し得るようになされなければならない。生き、生かせ！」（全集第三卷四〇二頁）。即ちフィヒテは生存を要求するの權利、勞働を要求するの權利、並に生存の最低限度を要求するの權利を宣言するものである。換言すれば凡ての理性的なる國家は、各人が國家によつて課せらるゝ勞働を遂行する限り、各人に對して生存の物質的可能性を保障すべしとなして居る。「各人は、彼れの勞働によつて生活することを得なければならぬ。如何となれば生活し得るといふ一事は、凡ての人の絶對にして讓渡し得ざる財産なるが故である。」

フィヒテは、一切の事物を以て「國民全體の幸福を目的として、若干の個人の幸福を目的とするものに非ず」となして居る。（全集第三卷四二三頁）土地は國家の財産であり、農民に對して唯だ之を賃貸するに止まり、農民は生産の餘剰を借地料として國家に納附すべきものである。此場合凡ての物貨の價格が國法によつて確定せらるゝが故に、競争の起る憂は決して無い。世界貨幣は之を廢止し、之

に代ふるに、外國に於いては無價値なる、純粹に國民的なる通貨、國內貨幣を以てする。(全集第三卷四三三頁)又外國との通商は個人をして之に當らしめず、「封鎖せる商業國」の獨占事業とする。斯の如き「封鎖せる商業國」は、若し北米合衆國がかのモンロー主義を經濟的方面にも轉用せんと欲するならば、容易に之を實現することが出来るであらう、何となれば米國は原料國兼工業國として、その消費するものを悉く生産し得るが故である。併し乍ら原料に乏しき封鎖國は「封鎖せる商業國」の費澤を企及することは到底不可能である。フィヒテは尙ほ未だ全然重商主義の呪縛に繋がれ、保護關稅を國民的隔離手段として、之を以て國家隆昌の唯一の可能性と見做した。そして凡ての國家は全く他より孤立し、自國の生産物によつて生活することを企てなければならぬと爲した(註一)。

個人の自由は自己の住居の戸口に始まる。一步戸外に出づれば、彼は國家の使用人(正しく謂へば警察官)によつて一舉手一投足を監視保護せられる。此目的の爲めにフィヒテは、一個の「理想的」警察の體系を創造した。フィヒテが考へる如き國家の組合的構成は、勞働の嚴格なる組織化を發生せしむべきことを俟たない。併し乍ら此れは決して經濟的獨創案ではない。此種の勞働組織は吾人既に之を識つて居る。それは實際上現今の感化院若くは監獄に存在する。此處でも亦個人にては全然生活の苦勞を有たず、國家がその收容者に對して衣食を給し、而して食事は恰もフィヒテの「封鎖せる商業國」が豫想するが如く極めて節儉的である、勞働は警官によつて監督せられ、餘剰は依然として受

刑者の所有である。フィヒテの社會的警察團は之を徹底的に實施すれば、一個の大なる國民的監獄に外ならない。而して後年ラサールがフィヒテを社會的哲學的玉座に推し上げたことは、決してラサールの誤謬ではない(註二)。假令フィヒテの積極的社會主義のプログラムは爾く脆弱であつたとしても、彼が此プログラムに與へたる法理的根柢は極めて健全のものである。即ち誠にフィヒテの思想をその組合的皮殼より脱離せしむれば、其處には果實として一個の國民的社會主義が殘留して居る。此社會主義は、後にラサールが宣道したる所と相類し、而してラサールは恰もマルクスがヘーゲルに遡源すると同程度に於いて、フィヒテに遡源するものである。

二、マロー

カール・マロー(一八一〇—一八六五)の積極的社會主義的提案は、フィヒテのそれに比すれば一層眞面目に考量せらるべきものであつた。彼は同時代から最も理不盡に誤解せられ、而して時代人の蔑視無視に憤りて遂に仆れた不平兒である。

マローの強味は、大概の社會哲學的論客と等しくその批判に存した。周匝委曲を極めたる筆致を以て、彼は當代の半自由的、自由的、及び共產主義思潮に對する鏖殺的批判を試みた。彼が凡ての此等の方向に對して發表したるものは、此種の文献中最も犀利鋭雋なるものに屬し、且つその論難に於

いて常に學者としての形式を失はざる高雅なる調子は、特筆に値するものがある。之に反し一度積極的提案に轉するや否や、彼れの創造力は卒然として麻痺涸渴した。彼は創造的天才に缺如するを常とする大抵の批評的頭腦とその運命を分つた者である。

此點に關してフィヒテに對する彼れの態度は注目し値する。彼はフィヒテの社會主義に對して頗る割切的確なる批判を取てし、而かも彼自身の社會主義若くは、独自の稱呼に隨へば聯邦主義(Federalismus)が、フィヒテのそれと——少くともその基礎に於いて——殆んど瓜二つの類似を有することを悟らなかつた。彼も亦フィヒテの如く生存に對する權利を承認し、更に勞働を要求する權利に就いては、後者よりも一層痛烈に之を高唱した。社會的國家體の爲めの根柢は、雇傭關係の撤廢によつて直ちに與へらるゝであらう。併し乍ら彼れの實際的提案は如何なる内容を有するか？ 曰く自由競争及相續權を含む全部の個人經濟は之を存續せしめ、唯だ公共企業を整頓する國家は、私人産業に於いて就職口を見出だすこと能はざる失業勞働者が、常に公共的國營事業（鐵道、治水、道路、兵營等の建造）に於いて就職と活計とを得るよう配慮するの義務を有する。一方個人産業は同業組合によつて支配調整せらるゝを要し、而して此組合には凡ての國民が豫め試験を経て加入することが出来る。私人産業の範圍は組合によつて限定せられ、組合は少數なる個人が過多なる富を掩有するの弊を防止するに努むることを要する。即ち富者はその餘剰を貧者に對して貸付け、以て後者の産業力の向上に

資すべく、而して唯だ此信用形式のみを許し、貸地料及家賃等の貸貸は之を廢止するといふのが、その大要である。

マールローの這般の提案は、(その著書は未完結のまゝである)半途性と薄弱とを短所として居る。即ち急進的社會主義的要求たる勞働權の龍頭に出發して、因循姑息なる組合主義的提案の蛇尾に終つて居る。是れ血毒症に對して冷壓定布を處分することを意味する。若しマールローに於いて尙ほ社會主義を云爲し得るとすれば、彼れの社會主義は、フィヒテのそれの如く反動的である、但だ彼はフィヒテの警察國家に代ふるに、組合國家を以てしたるに過ぎない。

三、ヴァイトリング

之に比すれば、裁縫師ヴァイトリング(一八〇八—一八七二)の社會主義的提案は首肯し易いものがある。此提案は當時マールローも既に之を識つて批評を試みたことがある。ヴァイルヘルム・ヴァイトリングは、此運動の中心を瑞西に移したる少壯社會主義者の群(Büchner, Fröbel, Howegh)に屬する。佛蘭西人デヅァミー(著書「共產制度の法典」)及び「自由及普遍的安寧の組織」が、フリーエーの思想軌道によつて動き、獨逸人ルドボイツヒ・ガル(一七九一—一八六三)(著書「之を濟す如何?」)が、サン・シモン派に接近するが如く、ヴァイトリング(著書「調和と自由との保障」(一八四二)及び「憐れ

なる罪人の福音(一八四五)は巴里に於いて、或は前者の方向に従ひ、或は後者と歩調を一にし、斯くて將に成り立たんとする社會主義の折衷者となつた。

少くともマールローは、ヴァイトリングの共產主義的體系を一個の折衷的體系と呼び倣した。實際に於いてヴァイトリングにあつては、フリーエー主義とカペー主義との多くの特徴が見出だされる。然かも、此の外來の要素を排除したる後にも、尙ほ社會主義的沈澱物としてそこに注目し値する兩個の思想が残留する。ヴァイトリングがフリーエーに倣つて主張した「調和」はあらゆる國民的差別努力を除斥し、全人類の一大傘下に抱擁せんとする「家族同盟」より成る。人類全體の首長はフリーエーに於けるが如き世界皇帝に非ずして、主要なる科學界から選出せらるゝ三頭政府である。此三つをヴァイトリングは常に「トリオ」(Trio)——本來は、音樂の術語で三種の樂器の伴奏に用ゐる樂章の意味である)と呼んだ。此のトリオ即ち最高行政官廳の下に「中央親方委員會」があり、更に其下に「地方親方委員會」が屬する。此等官廳の任務は、科學的及技術的問題に對する懸賞を發表し、次に凡ての官職を部署することである。但し凡ての應募は嚴格に無記名式とし、之によつて官吏任命の際に一切の情實に累せられず、専ら業績の良否によつて決定することを得るに努めた。

更に一層獨創的なるは、彼れの「取引時間」(Kommersstunde)の制度である。ヴァイトリングは凡ての人が生の享樂に對して平等の權利を有すると同時に、亦公共の爲めの勞働に對して平等の義務を

有するといふ原則から出發する。ヴァイトリングの思想が現今の露國ボルシエヴィキの制度に攝取せられたことは枚擧に遑が無い。國家は各人に對し生活必需品を給付するの義務がある、併し其の代りに各市民より毎日六時間の勞働を要求することが出来る。此六時間勞働を以て各人はその必要有益なる享樂手段を獲得した。然るに此必需品と並んでそこには尙ほ愉樂的なる享樂手段、即ち贅澤なる感情がある。併し乍ら此は全然各人によつて別々のものである。斯くの如き贅澤なる享樂手段を得るには、獨り超過勞働によるの外は無い。即ち法律によつて規定せらるゝ六時間の限度を越ゆる毎時の勞働は、其當該者の「取引時間」として、「取引手形」(Kommersbuch)に記入せられる。此「取引時間」は一種の勞働貨幣であるが併し嚴格に個人的價值を有し、且つ當該歴年の經過するまでの間、通有性を保つに過ぎない。各人はその「商業時間」の所得を以て、各好む處に従つて贅澤品を購入することが出来る。贅澤品の價格は、在品の多少と需要の範圍とに隨つて決定する。所有者死亡の後には、凡ての贅澤品は社會の共有に復歸する。之によりて贅澤衝動が防止せられる。

「取引時間」は凡ての勞働の價值を同視する。即價值を決定するものは、専ら量であつて質ではないとしてある。然るに世には、靈感に惠まるゝ僅々十五分の勞働が、全體に取つて一プロレタリアの全生涯よりも貴重有益なる精神勞働者(詩人、美術家、哲學者、發明家)がある。ヴァイトリングの主眼要誤謬は、多くの社會理論家のその如く、勞働の劃一化と型化とに存する。

(註一) フィヒテは曰ふ、「自然が人間を据ゑる範圍、及此範圍より生ずる凡てのものを以て、各人は満足しなげ、いなければならぬ。」
(全集第三卷四二頁)

(註二) フェルティナント・ラサールは、一八六〇年及一八六二年の兩度、講演をフィヒテに捧げて居る。

第十七章 カール・マルクス

一、ヘーゲルとマルクス

カール・マルクスを取扱ふに及んで、吾人は始めて一個科學的體系の土地を踏む。佛國の社會哲學者は殆んど悉く詩作する政治家である。彼等は奔放自在の想像を以て一種の社會状態を描出する、而して此の状態を、空想に耽る性質の者は實現するを得べしとなし、嚴肅なる研究者は之に反して一顧に値せずと貶する。此等の社會哲學家は孰れも主張を重ねるに主張を以てし、併かも人を説伏せずんば止まざる證明に至つては、遂にその片影をも示すことが無かつた。それ故に、苟も正當なることが明白に證據立てられざる限り何物をも決して首肯せざる、嚴密なる科學の代表者が、此等社會主義者に向つて「卿等の夢は誘惑的に美し、されど是れ畢竟夢たるに止まる」と呼び掛け來つたことも決して不當では無かつた。然るにカール・マルクス(一八一八—一八八三)が卓絶せる頭腦の全重と深遠なる哲學的及經濟的教養とを以て社會主義の陣門に雄姿を現はすに及んで、形勢は俄然として一變した。嚴正なる學究も、以前の如く輕蔑の白眼を以て社會主義の傍を通り過ぐることが出来なくなつた。而して若し彼等にして、眞理を自己の利益の上位に置く眞面目なる思想家が相率ひて款をマルクスの社

會主義に通ずるに至るを欲せざれば、彼等はマルクスが痛撃して止まざる現在の經濟形式を防衛するに全力を傾倒しなければならなくなつた。凡そ科學としての經濟學をして、社會主義に對する態度を決定し旗幟を鮮明にするか、然らずんばその眞摯性若くは科學性を誇稱することを斷念するか、二者一を選ぶの外無きに至らしめたる者、實にマルクスを以て嚆矢とする。

マルクスは、經濟學のスビノーザ、社會主義の古典派と呼ばれた。スビノーザがその「倫理學」に於いて、人間の情感を純粹に機械的なる過程と解し、恰も線、平面、若くは立體を取扱ふが如くに數理的に演繹したるが如く、又後來テューブが、美德と惡徳とを、砂糖及硫酸の如き化學的生産物と對比したるが如く、マルクスはその主著「資本論」に於いて、社會的形態及び進んで社會全體を階級闘争の産物となし、封建主義、資本主義、社會主義の如き大なる經濟的潮流を、論理的範疇として取扱はずに、純粹に歴史的範疇として取扱つた。マルクスは刎頸莫逆の友フリードリッヒ・エンゲルスが、嘗て「吾人獨逸社會主義者は、單にサン・シモン、フリーリエー及オーウェンに由來するのみならず、亦實にカント及びヘーゲルの嫡流たることを誇とする」と叫んだことは決して不當では無い。事實に於いてマルクスの科學的業績は、ヘーゲルの辯證的方法を借り來つて、之を經濟學及び社會學に應用したることに存するのである。ヘーゲルは全世界を以て精神の自己發展と解した、而して哲學は、彼に隨へば、専ら此の不斷の發展過程に於ける個々の形相を、辯證的方法によつて探究再構するを本務とする

ものである。マルクスは世界を以て一個無限の內面的發展過程であるとする點に於いて、ヘーゲルと一致する。又辯證的方法が、この發展過程の深奥なる關係と微妙なる連結線を發見するよすがとして唯一の適當なる方法であることに於いても、ヘーゲルに左袒する。唯だマルクスの出發點は、ヘーゲルに於けるが如く、精神（理念）に存せずして物質に存する。

二、辯 證 法

ヘーゲルとマルクスとは共に同一なる梯子を使用する。唯だ前者は下降し、後者は上昇する。ヘーゲルは、彼に取つて先天的に確定して居るものと看做さるゝ精神的原則より、物質的事象を説明しようとするに反し、マルクスは物質的事象より社會の動因を闡明し、之より次第に精神的動機にまで廻り着かうとする。之に際して兩哲人が一個の交叉點に於いて遭遇することは極めて自然である。併し乍ら之あるの故を以てマルクスを直にヘーゲル派に數へ、同時に往々ヘーゲル哲學の爲めに備へ付けられて居る廢物室の中へ無造作に投げ込むことは、非常なる誤謬である。苟も哲學的判別を解する程の者ならば、斯くの如くマルクスを以て、直にヘーゲルの糟粕を嘗むる者とする便利なれども淺薄なる刻印變更の、頗る沒趣味なるを感じなければならぬであらう。正當に理解すればマルクスは正にヘーゲルの對極である。後者が徹底的唯心論者であると等しく、前者は徹底的唯物論者である。後者

は現在の社會秩序の顯著なる哲學的辯護人であり、前者は同じく紛れも無きその輕蔑者にして攻撃者である。彼等に共通なるものは、——その實體論的前提と並んで——方法、即ち道具に過ぎない。而かも吾人が、同一の道具を以て正反對なるものを作り出だし得ることは周知の事實である。ヘーゲルとマルクスとは、彼等の歴史哲學的見解に於いて同一なる辯證的方法を用ゐて居る。謂はゞ彼等の仕事の手が同一であつたのである。唯だヘーゲルがこの手を以て、吾人の世界秩序及社會秩序を慈々撫愛する間に、マルクスは同じ手を以て、激しく横面を殴り飛ばし容赦無く折檻する。ヘーゲルは世界を以てロゴスの自己發展と爲し、而してロゴスは、その最高なる啓示形式に於いて理性なるが故に、凡そ存在するものは悉く理性的でなければならぬと解した。マルクスは之に反して、世界を以て機械的に働く物質の自己發展と爲し、随つて、凡そ存在するものは悉く必然的ではあるが、併し必しも理性的ではないと主張する。即ちヘーゲルに取つて、君主的法制を有する個人主義的國家は、それが歴史的に成生したるものなるが故に亦理性的であつた、而して此國家が顛覆して共和國が之に代はつたとしても、その共和國はそれが存在する故に、亦同様に理性的である。之に反してマルクスに取つては、個人主義的近代國家、特にその内部なる資本主義的生產方法は、それが存在する故に、成程物質的發展に於ける一個必然的なる形相ではあるが、併しさりとして尙ほ未だ必しも理性的形相を以て許すことは毛頭出來ない。彼は寧ろ反對に、現在の資本主義的生產方法の薄弱背理を、科學的に剔決せ

んと企て、居るものである。故に若し吾人がヘーゲルと共に、吾人の世界は精神の自己發展であることを承認するならば、吾人は現在の社會秩序を正しく此精神の發現として、一個の論理的範疇と認めなければならぬであらう。換言すれば、此秩序は理性の要求に適合する、随つて亦論理的に唯一の可能なる社會形式であることを承認しなければならぬであらう。之に反して若し吾人がマルクスと共に、歴史に働くものは決して理性原理に非ずして、寧ろ専ら機械的因果律であるといふ斷定から出發するならば（註一）「偶然」が歴史から排除せらるべきことは、換言すれば、吾人の社會秩序が必然的に觀ゆることは、ヘーゲルの場合と同様であるが、併しそれは決して論理的に必然的ではなくなつてしまふであらう。現在吾人の社會秩序に於て其の基礎を成して居る資本主義的生產方法は、マルクスより之を觀れば一個の論理的範疇に非ずして、寧ろ一個の歴史的範疇である。此兩範疇の深刻なる差異は、試に之を將來の社會形成を律する尺度として觀察すれば、一目瞭然である。假に資本主義的生產形式を以て、一個の論理的必然即ち理性より發する一形態とするならば、之を變更せんと欲することは背理的である。之に反してマルクスの認むるが如く、資本主義的生產形式が單に歴史的なる必然性、純粹に物質的なる條件より生ずる必然性に過ぎずして、一定の社會的階級の理性要求に最早適合せざるに至つたものとすれば、社會發展の諸條件は、社會的理性の命令に随つて、換言すれば、其程度の生産力の要求に應じて之を變更することを得、而して之と共に社會形式其ものをも亦新しき道に

導き行くことを得るに違無い(註二)。固より理性は自然の「發展諸相を、飛び超ゆることも又禁制すること」出来ない、併し乍らそれは「生みの苦しみを短縮緩和」することは不可能でない。

三、經濟的唯物論

斯くの如くにしてマルクスは歴史、哲學、經濟學、自然科學及數學に於ける廣汎なる知識を基礎として、單に將來に於ける社會主義的世界秩序の可能性のみならず、亦その歴史の必然性をも歴史哲學的に立證せんことを欲した。此の事業に當つて彼が示した推論の犀利と無忌憚とは、假令その犀利の往々にしてあらさがしに轉じ、その無忌憚の屢々偏狹を含むことを承認せざるべからざる場合にも、尙ほ且つ吾人をして嗟嘆措くこと能はざらしむるものがある。マルクスは劈頭第一に、各個人も一族全部も、その肉體的並に精神的本質に於いて、周圍、——ラマルク、コムト、及、テース等の所謂「環境」——の生産物であることを斷言し、ヘルダー(一七四四—一八〇三)特にバックル(一八二一—一八六一)も亦指摘したる如く、土地、身體、氣候及歴史上の諸條件が、各個人並に各民族をして現在あるが如きものと爲らしむると説いて居る。唯だマルクスは、以上の諸條件中最後に擧げたる歴史的條件を——而して此解釋こそ彼れの最も獨創的なる業績である——主として、生産力の發展並に之より生ずる階級闘争と爲し、あらゆる歴史的運動の究極の動機として存することを發見したと主張す

る。此の「經濟的唯物論」を、マルクスとエンゲルスとは次の如き公式に約言する。曰く「物質的生産の生産方法が、一般に、社會的、政治的及び精神的生活過程を條件附ける」……「吾人は、政治的及法律的運動や文學的及哲學的條件を以て、謂はゞ上層建築となす。基礎を爲すものは經濟的條件である。一時期の歴史はその時期の哲學の中に存せずして、經濟の中に存する。」

四、階級闘争

經濟的唯物論の心髓は、茲に最も簡潔なる形式に於いて示されて居る、周圍(環境)の人間に對する影響は、一部分自然的にして一部分は人爲的である。自然的影響は自然條件——風土氣候等——によつて喚起せられ、人爲的條件は社會に於ける共同生活によつて喚起せられる。而して吾人が社會的條件とも名づくることを得る此等人爲的條件は、時日と共に次第に自然的條件よりも強力となる。而して此等社會的影響の中、終始一貫して、人類歴史に於ける動因となるものは、常に經濟的生存競争であつて、之より生ずる精神的力、例へば宗教、藝術、乃至科學の如きものは、單に發展の並存條件たるに過ぎない。全人類の歴史を貫通する此の強力なる階級闘争は、勞働生産堆積の發見が、原始的共產主義の限界を突破して以來、西歐文化の線上に於いては、前後相交替する三つの異なる形式を採つて現はれた。

一、古代全部に通じての特徴なる奴隷制度の時期。此時代にありては、自由人は毫もその行爲の道徳的に批難せらるべきことを意識すること無しに、奴隷に對して明白なる搾取者として立つて居た。道徳そのものも亦正しく經濟的生存條件の所産に過ぎない。一個の行爲が、經濟上必然的なるもの若くは缺くべからざるものである限り、人間は此行爲の道徳的是認性に就いて秋毫の疑義を挾まない。而して若し文化に内在する進歩性が、明確に表はるゝことを要するならば、かの交通手段の極めて不備であつた古代の生産形式に取つて、奴隷は實に一個の經濟的必然であつた。

二、賦役勞働の時期。此時期は羅馬帝國に於ける不條理なる貧富懸隔によつて招來せられたものである。少數者の掌中に過多なる財が集積し、而して此等少數者は彼等の財を處理せんが爲めに多數の奴隷を要した。是に於いて從來孤立した奴隷は今や大なる集團となつて現はれた。而して此等集團が互に意思を疏通する手段を有するに至つて、奴隷の謀反といふことが發生した。大なる土地搾取者に對する反抗は、當時將に發芽せんとしつゝあつて而かも同様に經濟的條件によつて呼び起こされた基督敎の後援を受けた。斯くて到底存續し難くなつた奴隷制度の殻は一擧にして粉碎せられ、從來の奴隷の代りに各種の農奴及び賦役人夫が生じ、田舎に於いて地主たる封建君主に對すること、恰も都市に於いて徒弟がギルドの親方に對すると同様なる勞役關係に立つて居た。但し役使の形式は稍、寛やかになつた。即ち從來の奴隷は終日專一に主人の爲めに苦役しなければならず、人間といふよりも物

として取扱はれて居たに反し、新しく生じた農奴は、主人の爲めに一週の中數日の勞働を爲すに止まり、殘餘の時間は假令極めて不足勝なりとは謂へ、兎にも角にも彼自身を養ふ料となるべき自己の田畑を耕作することを許された。即ち形式よりすれば、農奴は以前の奴隷に比すれば稍、自由であつたが、併し實質よりすれば寧ろ一層悲惨であつた。何となれば奴隷に對しては、主人は恰も現今の牧牛者がその飼牛に對するが如く、如何なる窮乏の時と雖も之を扶養しなければならなかつた。若し奴隷が榮養不良の爲めに死亡することがあれば、それは主人に取つて痛切なる損失であつた。然るに農奴に對する封建君主の利害關係は著しく減少した。農奴が死亡すれば主人は忽ち他の者を以て之を補充することが出來た。勞働階級の人格的自由が増加すると共に、被支配者に對する支配者の扶養保護の程度は、之と比例して減少するを常とする、中世の農奴はその莊園に於いて孤立隔離の生を送り、隨つて窮苦の同胞と共にその境遇の改善を謀議する手段を有たなかつた。凡ての小經營は、都市に於ける手工業のそれも同様であるが、勞働者の生産手段に於ける所有を基礎とした。一般に彼れの境遇は比較的安易であつた。彼は尙ほ未だ世界市場の爲めに勞働を行ふの域に達せず、單に自己及主人の需要の爲めに勞働するに過ぎず、而してその主人自身も、同様に尙ほ未だ世界市場を目標として生産を行ふのではなかつた。地方に於ける耕作區マルクは、恰も都市に於けるギルドである。斯くて、其處には各人の靈の高翔を促さざる代りに、亦胃の腑の陰鬱なる唸りをも喚び起こす憂なき、一種の家長

的關係を生じたのである。

三、資本主義的生産方法。之を將來したものは米大陸の發見、アフリカの周航、印度航路の開發、火藥及印刷術の發見、並に凡て此等の事情より生じたる世界貿易である。貴金屬の夥しき輸入によつて土地の價値は低落した。これまでその奢侈の需要を、主として往來の商人を勸諷することによつて満たし來たつた剽盜騎士等は、是より先治安維持法が發布せられ、各國家形體が第十五世紀以來次第に堅實となつて以來、小説作家に無限の材料を提供する彼等の興味ある職業を放棄し、曾ては剽盜仲間であつたその夥しき從者を解放するの已む無きに至つた。此等の一味は天下に膝を容るゝの地を有せず、悉く漂浪者と爲り、苟も賃銀を拂ふ者あれば何人に對しても彼等の手を差し延べた。然るに恰も好し、第十八世紀以來世界貿易によつて喚起せられた製造業及び大工業に取つて、此等の手こそ正に御詔向のものであつた。而して、ブルジョアジーの行政と立法とは此の特徴を一層助長した。併し乍ら新興の世界貿易と世界的工業との隆盛に趨くに伴れ、彼等は益々此手を要することが多かつた。蓋し勞働の手がなければ、凡ての企業が癡痺して仕舞ふからである。特に農業が衰頽した爲めに、飢に迫れる農民は雲霞の如く工業を目掛けて押寄せた。更に機械と技術的發明の際限無き出現とが之に加はつた。目前の好賃銀に釣り寄せられて農業から工業中心地に移る勞働者の群は日を趁うて膨脹した。斯くの如くにして暇々として増加する都會プロレタリアは、次第に資本といふ太陽の深く消えざ

る暗影として現はれ來つたのである（註三）。

五、資本主義的生産方法

茲に、同じく資本主義的生産方法と稱しても、第十六世紀以來益々激甚に發達したものと封建時代及古代のそれとの間には、自ら截然たる差異のあることを知らなければならぬ。形式的に觀れば、自由といふ點に關してこれは確かに一進歩である。賃銀勞働者は、前代の奴隸若くは農奴の如く一個の主人に緊縛せられるゝことなく、若し欲するならば毎日その主人を變更することが出来る。此進歩は決して之を輕視してはならない。嘗ては、殆ど狂氣じみたる奸惡暴戾の奴隸使役者が、如何なる虐遇を奴隸に加へ、血の出づるまで彼等を酷使するも、何等の刑罰を蒙ることがなかつた。今の雇傭主は到底斯くの如く横暴を恣にすることが出来ない。勞働者が隨時に彼の許を立去ることを得るからである。併し乍ら此の進歩は實は中途半端の進歩である。成程賃銀勞働者は、最早定まつた主人に縛りつけられては居ない、又木や革の鞭によつて無理強ひに束縛せらるゝことも無い、併し一種の主人に縛られ、飢の筈を以て強制せられつゝあることは蔽ふべからざる事實である。勞働者の自由は彼れの經濟的安全を代價として購はれたものである。古代の奴隸使役者と中世の封建君主とは、自ら破滅倒壞することを欲しないならば、彼等の部下奴僕の爲めに衣食の途を配慮しなければならなかつた。今

日の雇傭主は、専ら自己の爲めに配慮する、何となれば、一朝恐慌來に臨めば、彼は無造作に労働者を解雇することが出来るからである。

以前は單に生産の手段であつた労働力は、資本主義の支配下にある今日では資本主が買ひ入るゝ商品となつた。生産者は自己の生産物と風馬牛であり、又生産物の出來榮え如何に關して何等の興味關心を有たない、蓋し彼は自己の生産物を未だ曾て自ら享受すること無く、更に彼は、一個の出來上つたものを生産せず、單に其の部分を生産するに止まる場合が多いからである。往時の手工業が己が生産品の出來榮や手際に就いて感じた喜悅の如き、今は昔の夢と消えた、工場は決して藝術家を要せず、唯だ生ける機械——機械的に靈魂無く且つ靈魂を殺すやうに動く手——のみを必要として居る。

(註四) 資本家に於いて、「ギルドの親方の仕事場が單に擴げられたのみである」表面的の賃銀増加は、獨り榮養品價格の騰貴と、多少改善せられたる生活狀態との爲めに殆んど空に歸するのみならず、かの産業界の飢饉として漫性的に繰り返へさるゝ恐慌の爲めに差引無一物となり、而して恐慌の都度工業労働者は、往來の舗道に抛り出され、さうして所謂「産業豫備軍」を編成するの羽目に陥るのである。神經を麻痺せしむる労働、工場の堪へ難き不健康なる雰圍氣、作業室の煤烟と黴菌とに飽和せる空氣、境遇の不安定、是れ實に工業労働者が、雇傭主選擇に於ける彼れの自由を保持するといふ唯一の利益を得んが爲めに交換したる非常なる不利益である。加之賃銀の向上能力は、プロレタリア同志の競争

といふ自然の限界を有つて居る。或る工場が繁榮に赴くや、資本主義的生産方法によつて常に傾使し得る所謂産業豫備軍の大群は、直に件んの工業を目掛けて殺到し、その結果必ず労働價格の低下を惹起せざんば已まない。ラサールがリカルド(一七七二—一八二三)の説を踏襲したる所謂「賃銀の鐵則」即ち、労働賃銀の平均は、其時々の文化程度によつて自ら規定せらるゝ労働者生活狀態の要求を満たすに必要である以上に向ふ上すること決して無し、とする學説を、マルクスは承認して居ないのみならず、比較的の高い労働賃銀はプロレタリア同志の競争によつて間も無く低下し得ることを承認し、産業豫備軍は「資本家側の要求に適合する低い水準にまで労働賃銀を引き下ぐる調節器である」と断定する。斯くてマルクスは此の純粹に唯物主義的、歴史哲學的發展の跡を辿つて、遂に現代文明に對する破壊的な結論、即ち、賃銀労働の社會を奴隷の社會から區別する所以のものは、資本が、餘剩労働を直接生産者即ち労働者より搾取する形式のみであるといふ事實に到達する。(第一卷二〇七頁)。資本は結局労働である。さうして此労働は、吸血鬼の様に生きた労働を搾取しなければ存立することが出來ないのであつて、搾取することが大であればある程それだけ益々活潑に跳梁する。そして若し、オーヂエー(一八二〇—一八八九佛國戲曲家)の謂ふが如く、金錢は「片頬に自然の血痕を以て此世に現はれたる」ものとすれば、資本は頭の上から足の尖まで、八萬四千の毛孔から淋漓として鮮血と汚物を滴らすものである(第一卷七九〇頁)。プロレタリア——直に之を貧乏と混同してはな

らない。貧乏は、以前の各時代にあつても見られた事相である——は、正しく資本主義的生産方法の特製物であり、而して後者が消滅せざる限り、永久に存在するであらう。

然るに幸にして此禍害に對する一個の救済策がある。それは決してトルストイ（一八二八—一九一〇）の要求するが如き、文化の凡ての成果の放棄を目標とせず、寧ろ反對に文化の累進的向上を豫期するものである、而して此對策をマルクスに授くるものは、ヘーゲルの辯證法を唯物史觀に適用することである。ヘーゲルの辯證的方法は如何にして成り立つかといふに、先づ各の概念に、その反對概念を對立せしめ、此對立の抗争（否定の否定）から一個の新概念を生ずる、而して對立せる兩者は此新概念の中に一個のより高き統一として止揚せらるゝのである。（例へば有に無が對立し、而して此兩者は成生の概念に轉するが如くである）。吾人をして、この矛盾の論理の方法をマルクスの歴史觀に適用せしめよ。若し資本主義が一個の論理的範疇、即ち精神の自己發展より流出する理性的必然——ヘーゲルに隨へば凡ての發展は理性的必然である——であるならば、資本主義に對する救済策は有り得ないであらう。如何となれば、理性的生産物に對しては、獨り非理性のみが抗争を敢てすることが出来る、而して是れ意識せる精神の到底なし得ざる處なるが故である。然るにマルクスに取つて資本主義的生産方法は、單に一個の歴史の範疇、即ち物質的條件と經濟的階級闘争とより生ずる、純粹に歴史の必然たるに過ぎない。而して、歴史的に成生したるものは、當然音に滅亡の可能性あるのみ

ならず又その必然性を有する。曩に資本主義的生産法が封建的生産法を驅逐したるが如く、それは他日一個の新しき方法によつて排除せらるゝであらう。然らば此の新方法は如何なる性質のものたるべきか。

マルクスは其の大著の或個所（第一卷七九二頁）に於いて、將來に於ける此變轉過程、若くは資本主義的生産形式より社會主義的生産形式への推移に關する意見をほめかした（註五）。此個所は、その論理の壓力と行文の精彩とによつて頗る注目すべきものである。彼は曰ふ。資本はその集積傾向に於いて、先天的に個人主義的である。而かもそれは、恰も自己と正反對なるもの、即ち社會的生産方法によつてのみ、目的を達し得る。蓋し資本はその増殖の爲めに、社會化したる勞働力を必然的に前提とするが故である。然り、個人主義的資本自身は株式會社、トラスト、合同、カルテル等に結合する。斯くて一方には集團的の富が益々少數者の掌中に凝集し、一方には自己の慘狀を明瞭に意識せるプロレタリアの日と共に膨脹する集團が、威嚇的に前者と對峙する。資本の無政府的競争は次第にその範圍を擴大する。大資本家は各小資本家の群に打撃を與へ、彼等を驅つてプロレタリアの列に沈淪せしめる。而してプロレタリアは、之によつて、知識的なるが故に極めて重要な勢力増加を爲し遂げる。大資本家の範圍が益々狹まるに伴ひて、團體的勞働に於いて互に氣脈を通じて組織化せられたるプロレタリアは、愈々盛に膨脹する。「生産方法の這般の集中と勞働の社會化とは、遂に其資本主

義的外被と相容れざる一點に到達する。外被は寸裂する、資本主義的私有財産の臨終の鐘は鳴り渡る。掠奪者は掠奪せらるゝ」(第一卷七九三頁)

爾來、一味の常套語となつた有名なるマルクスの此語は、哲學的に見て次の如き辯證的過程を包含して居る。即ち正——私有財産、私人資本。反——社會的生産と資本聯合とを手段として私有財産の集積、合——各個人平等の關與と共同なる社會的生産とに於ける共有資本是れである。勞働力と生産手段とは、正に、社會的所有に於いて合一せられ、同時に個人所有は、享樂手段として再置せられる。斯くの如くにしてマルクスは、社會主義を思辯的哲學の基礎の上に据ゑ付けた。

六、價 値 論

マルクスの此の唯物論的歴史觀は、専ら架空なる形而上學的假設、若くは、恣意的なる辯證的遊戯の上に立つが如き外觀を呈するの恐がある。故に、マルクスがその社會哲學的歴史觀の根柢と爲したる經濟的土臺を闡明するの要がある。此の基礎とは即ち「餘剩價值」の理論に外ならない。但し此理論は、エンゲルスの謂ふ如く、マルクスによつて「發見」せられたものではなく、寧ろゴッドウィン、ホール、及びウィリアム・トムスン等の如き幾多先人の遺業に基きて之を大成したものであることは謂ふまでも無い(註六)。併し乍ら一個の理論の完全なる代表者と稱せられ得る者は、斷片的なる暗示の

域より進み出で、此理論を明確なる形貌と力強き線とに於いて完全に構成し、凡ての方面に纏め上げたる者でなければならぬ。此意味を以てすれば、假令、トムスンが既に此理論を豫感したりとは謂へ、尙ほ且つマルクスを以て其の眞正の創建者と爲さざるべからざること、宛もヒュームがカントの爲めに途を拓くこと頗る大なりしに拘はらず、後者が依然として批判主義の始祖たる名を擅にするを得るが如くである。

マルクスが一種獨特なる内容を與へたる餘剩價值の概念を明かにせんが爲めに、吾人は先づ一般に價值そのもの、概念を研覈しなければならない。特にマルクスは彼れの價值の理論を最も重要視し、之を以て彼の體系の鍵と爲し——恰もライブニッツが、實體の概念を哲學の鍵と呼びたるが如く——之を以て彼れの「資本論」を始めたるに於いて一層其然るを覺ゆる。吾人の知る如く曩にアダム・スミスは、勞働を以て、單に凡ての富と價值との最主要なる源泉なるのみならず、亦實に財貨價值の唯一なる尺度であると爲した。勞働はスミスによつて初めて彼れの叙爵書を與へられた。次いで、リカルドーに至つて百尺竿頭更に一步を進め、凡ての價值を先づ勞働量に、而して凡ての勞働量を勞働時間に分解した。マルクスの價值論は此處に始まつて居る。但しそれは、マルクスが勞働を富の唯一の源泉と看做すといふ意味ではない。彼は寧ろ「勞働は、凡ての富の父、大地は、その母なり」とする點に於いて、ペティーと一致する。彼に従へば、自然が、その賦與によつて富の増加に協力を與ふる

と爲すは正しい、唯だ富と価値とを混同することが謬つて居るのである。即ち、物貨の使用価値と交換価値とを區別しなければならぬ。「物の有益性は、此物を使用価値と爲らしめる。」之に反して交換価値は、或る種類の使用価値が他の種類の使用価値に對して交換せらるゝ場合に定まる割合であつて、時と種類とによつて常に變動するものである。光、空氣、日光、泉よりの一掬の水、此等は吾人の生命に缺くべからざるものなるが故に、使用価値としては其尤なるものである。併し此等は交換価値ではない。物の交換価値は、此物を得んが爲めに人間の労働を必要とする場合に、初めて生ずる。(例へば、水涸れの時に於ける搬水者の如き是れである)故にあらゆる交換価値は必ず或る使用価値を前提とするが、之に反して人間の労働無き使用価値は、現在の社會秩序にありて毫も交換価値を有しない。然らば交換価値の本體は何であるか？ 此の兩価値が歸着せざるべからざる、かの不可思議なる共通のもの、凡ての交換価値に内在し、且つその価値の程度が、由つて以て決定せらるゝかの第三者、一言にして之を蔽へば、任意の物貨の価値が測定せらるゝ尺度は、抑も何であるか？

假に、二十エレの麻が、今日此處で、一着の服、一脚の卓子、一噸の石炭、若くは一部の書籍と同価値を有するものと定めよ。此等の物貨の物理的形狀は斯くの如く多種多様であつて、而かも此等の価値は同等である。されば此等はその外面的差別に拘はらず、同等なる価値を代表するものであるといふことを確定する一個の内面的共通性を有することは明白である。斯く雜多なる生産物若くは、商

品の根本に横はる此の共通物——中立の第三者——或は、マルクスの言を借れば「価値を形作る實體」は何であるか？

マルクスに従へば、フエティシ(魔力ありと信せらるゝ物又は動物——譯者)の特質を有する商品を、眞に価値とは稱し難きその使用価値から抽象して、此商品が交換価値に轉せしむる所以のものを觀察すれば、そこには、元來の使用価値を交換価値に改鑄した唯一の性質、即ち人間の労働が残留する。然らば、何物が商品の交換価値を作り上げるか？ 商品の中に具體化せられたる人間の労働である。併し乍ら、此際に吾人は、個人を相手として考へてはならず、特に価値本體の定義に當つては、一切の偶然的標識は之れを考量に加へてはならないから、結局、商品の価値形成の實體としては、社會的に平均して必要なる労働時間、若くは商品の生産に必要な「社會的平均労働力」が残るのみである。資本家は労働の交換価値(即ち労働生産費)のみを支拂つて、その使用価値を懷中に收める。商品は、その価値本體に就いて見れば、「労働時間の凝固したるもの、無差別なる人間労働の單純なるジェネリー、即ち、其支出の形式如何に顧慮すること無き、人間労働力の支出」であり、(第一卷二三頁)或は、「価値として之を觀れば、商品は、凝固したる労働時間の一定量である。」(第一卷一四頁)是に於いて吾人は、マルクスの指摘する富と価値との差異を理解することを得る。富は物質的なものであると共に、また使用価値の集合したものであるから、自然より吾人に與へられ得るものである。之

に反して價值は、資本主義の意味に於いてそれは、單に、商品生産の資本主義的形式に於いてのみ通用する一個の歴史的範疇に過ぎず、歴史的に出来上つたものなればこそ、其の轉變推移すべきことも亦考へ得べきものである。

商品の價格も亦富と同様に決して價值と混同することを許されない。貨幣に於いて表現せらるる價格とは、一の商品なる金錢の、他の商品なる労働生産に對する交換といふことに外ならない。貴金屬が貨幣の素材であるのは、それ自身が當初商品であり、且つ或意味に於いては今日も亦依然商品たるが故に外ならない。或意味に於いては、流通過程に當つて貨幣と商品との間に次の如き差別を生ずるが故である。即ち、生産者自身に取つて何等の使用價值に非る商品の生産者は、彼に取つて使用價值である他の商品と交易せんが爲めに、自己の生産に係る商品を貨幣に對して賣渡す。彼は決して彼自身の商品を回収することを欲しない。即ち商品循環の形式は、商品——貨幣——商品(W—G—W)である。此の商品循環運動の自然的目標は、消費即ち社會的に必要な生活需要の満足である。

七、餘剩價值

併し乍ら茲に考へ得る他の一過程がある。今まで吾人は、「或人が買はんが爲めに賣る」といふ形式を看取した。今吾人は「或人が、賣らんが爲めに買ふ」といふ、前者と正反對なる形式に轉じ、而し

て之と共に吾人は資本の搖籃の傍に立つ。此の第二の形式は G—W—G 貨幣——商品——貨幣であつて、最早 W—G—W ではない。併し乍ら商品を買ふために同一の商品を賣る者の無きが如く、同一價格を以て再び之を手放さんが爲めに或商品を買ふ者もない。人が或商品を賣らんが爲めに先づ之を買ふ場合、彼れの目的は専ら餘剩貨幣にある、即ち單に G—W—G でなくて G—W—G+e (即ち、 $G-W-G+e$) である。此餘剩は正しく資本の目的に符合し、之を成就するものであるが故に、特に第十六世紀以來、人々が懸命に努力した所であつて、マルクスは此附加物を「餘剩價值」と名づけた。(資本が尙ほ餘剩價值に向つて努力しない以前には、それは嚴密なる意味に於いて未だ資本と稱することは出来ない。)併し乍ら如何にして此の餘剩價值が捻出せらるるか? 變轉過程の途上に於いて G—W—G の代りに、G—W—G+e が發生することは如何にして考へらるるか? 何人か? 此の餘剩價值の成立に力を貸して居るに相違無い。此謎は、労働力が一種の商品であることに想到すれば一舉にして解釋せられる。商品としての貨幣が、前に述べたるが如く社會的に必要な凝固したる労働時間を表はすものであるならば、餘剩價值は即ち餘剩労働時間の凝固したるものでなければならぬ。然らば此餘剩價值を作り出だすが爲に、資本主義的生産方法が適用する手段は何であるか。餘剩價值とは何であるか。餘剩價值は凝固したる労働時間である。然らば資本は如何にして増大するを得るか。支拂はれざる労働時間を集積するの一途あるのみ! 科學的社會主義の核心點は實は茲に存す

る。
資本は、他人の労働力の支拂はれざる剰労働に由来する。剰労働の割合は、事実上の労働時間の、必要なる労働時間に對する比較によつて定まる。假に労働者が、必要なる、換言すれば、彼れの生計を支辨するに要する労働時間を六時間とすれば、可變資本の剰労働は

剰労働

必要なる労働時間

から成立する。而して一般傭主が、被傭者の剰労働を熱望して止まざることに鑑みれば、若し、労働者自身が、團結と政府の干渉によつて労働時間最大限度の手段を提げて奮起しなかつたら、労働時間は何處まで延長せらるべきかは、容易に想像し得るであらう。傭主の側よりすれば、二十四時制が其の最も好む處であらう。當年エンゲルス及びマルクスが英國工業に於いて發見したるが如き最も甚だしき禍害は、現今或は同盟罷業により、或は各國政府が國權を以て確定する労働保護法により、最後に世界大戰以後に制定せられたる八時間労働制によつて、除去せられた。併し乍ら凡そ資本家は、その買ひたる労働力より過剰労働を搾取することによつてのみ富を増加することを得るといふ原則に至つては、資本主義的生産方法が絶滅せざる限り、永久に儼存する。

八、資本主義の最後

謂ふまでも無く、當分の間は資本と労働との抗争は、益、激甚を加ふるものゝ如くである。如何となれば、茲に剰労働があり、新しき機械が之によつて後から／＼と建造せられ、——可變的資本が恒常的資本に變じ、——而して、此機械によつて人間の労働力が過剰ならしめらるゝ限り、資本の豫備軍は益々増加するので、其結果として新しき資本が益、集積せらるゝからである。斯くの如くにして、吾人の眼前には深淵が巨口を開いて居る。即ち一方には無限の資本の無限の堆積があり、他方には、自己の窮境を洞察するプロレタリアの恐るべき漸増がある。然らば吾人は、機械——労働節約の偉効ある這般の卓絶せる道具——を、それが、恐るべき勢を以て増加するプロレタリアを造り出だしたるの故に之を忌避するを以て賢明なりとすべきであらうか？ 決して然らず！ マルクスは決して排文明的ではない。彼は寧ろ現在プロレタリアの呪である機械を、如何にして最大なる福祉に轉ずることを得べきかの途を示して居る。概して彼は、正しき哲學者として文化を咀はす、單に事實を事實として明示するに止まるが、唯だ之を爲すに當つて、彼が同時に天賦の煽動者であることを自ら首肯せしむるに足る底の鋭さと忌憚無さを以てするものである。斯くして暴露せられたる事實、さらけ出だされたる創痍の中に、彼は直に治療策を看取する。マルクスは、絶頂まで進められたる資本主義的生産方法が、當然の結果として、其の正反對なるものへ轉せざるべからざることを指摘する（正にヘーゲルの説である）。言ふ心は、資本は、一方に於いて個人的に集積せられ、然かも他方に於いて獨り社

會的にのみ成り立つといふ解決し難き矛盾に苦惱する。此矛盾に累せられて資本主義的生産方法は倒壊するであらう。一面に於いて資本家は、競争によつて同志打の揚句多くは滅亡したり、唯だ指を屈する程に少數の巨富者を残すに過ぎざるに至り、他面に於いて、此の資本に驅使せられて工場、商店等に詰め込まれてプロレタリア化せらるゝ人が次第に増加して止まない。——是れ、資本主義の崩壊を意味する。何となれば、工場は社會主義的思想に取つて最良の培養基なるが故である。

若し世に、不幸なる人々の大衆が共棲して互に其の苦境を語り合ふことの出来る工場といふものが無く、又、一夕能く幾萬の労働者を啓蒙し得る大都會といふものがなかつたならば、現に見るが如き規模に於ける社會主義を見ることも亦なかつたであらう。資本は己が手を以て、他日自己がよつて以て屈伏せしめらるべき武器を鍛へた。資本は自らを集積せんが爲めに、工場と大規模なる宿舍と、而して此等を以て大都會とを造り出した。焉ぞ知らん、是れ彼れの墓穴を掘るべき鋤であつた。工場都市に新築せらるゝ労働者宿舍は、悉く資本主義の墳塋である。毎朝幾百萬の労働者に就業を促す工場の鐘の陰々たる響は、資本主義的生産法、換言すれば、人による人の搾取の末期を告げ渡る死刑の鐘聲となるのである。

(註一) 併し乍ら、機械的因果律は、マルクスにありて必しも常に終始一貫して固執せられたといふのではない。彼も、往々、内在的目的論——吾人は之に左袒する——に對して、注目すべき讓歩を爲した形跡が認められる。之に關しては、特に、

Adler "Kausalität und Teleologie, Marxistudien" 第一卷二九二頁以下及 "Marx als Denker" 三〇頁を参照せよ。

(註二) ヘーゲルとマルクスとの思想を對比する此の關係に於いては Ed. Bernstein の言が肯綮に中つて居る。マルクスとエンゲルスの偉大なる業績、彼等は之をヘーゲルの辨證法によつて成し遂げたのではなく、寧ろ、此辨證法に逆行して敢行したのである。同氏者 "Die Voraussetzungen, des Sozialismus" (1839) 三六頁参照。

(註三) 併し乍ら、茲に叙述せられて居る經濟的生産の進化形式は、マルクスが 'Chailovsky' に宛てたる論戰的書簡中に述べた如く、單に西歐文化の針路にのみ通用することである。其餘の人類に於ける進展方向に對しては、そこに依然として問題が未解決のままに残つて居る。

(註四) 分業の原則に對する此の批評に於いて、マルクスは Simondi, Proudhon, P. E. Lemontey の三家に追隨し、特に最後の者の説に依ることな彼は明言して居る。尙ほ Rosa Luxemburg, Die Akkumulation d's Kapitals (1913) 一四二頁——一八九頁に於ける "McCu'loch, Ricardo und Say gegen Sisno di" の條下参照。

(註五) 資本主義の生産形式より社會主義の生産形式への過渡推移を最も詳細委曲に説いて居る箇所は、寧ろ「共產黨宣言」であらう。

(註六) Menger が著書 "Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag" 中に證明して居るが如くである。

第十八章 マルクシズムの哲學的基礎に對する批判

一、マルクスのコペルニクスの立脚點

マルクスが、彼れの「資本論」の第二卷及び第三卷に於いて、一個の數學的足場を與へんと欲したる豫言は、畢竟、思辯的定理の域に迷ふものである。彼れがよつて以つて個人主義的（若くはマルクスが好んで用ゐた稱呼に隨へば、無政府主義的）經濟秩序の肺肝を衝きたる議論は、しかく莊重にして痛烈であつたが、然かも彼が豫言者の激情の迸發に任せて描出し、ドグマを頑守する宿命論者の獅子吼を以て、目睫に迫れりと疾呼したる未來記の準繩は、頗る不確實である。斯くの如き豫言は、人之を信するを妨げないが、眞偽に至つては後世の實證に俟たなければならぬ。來るべき一世紀のみが、曩にマルクスによつて豫想斷定せられたる歴史的發展が、正確に彼れの揚言した通りの経過を取るか否かの證據を提出することが出来る。豫言者に對して、論理は決して之を裁くの權限を有しなかつた。然るに露國のボルシェヴィキは、マルクスの豫言を根柢より覆した。資本の集積は大戦後特に米國に於いて激甚となつた。併し乍ら露國に於ける趨勢はマルクスの言を裏切つた。劈頭第一に、吾人は、英國のアーカートと露國のクラッシンとの間に締結せられたる條約（一九二二年秋）によつて示さ

るゝが如き、極端なる資本主義に逢着して居る。

マルクスが「資本論」中に徹頭徹尾服膺したる辯證的方法すら、既に嚴肅なる疑義の下に横つて居る。トレンデレンブルク（一八〇二—一八七二年）（註二）がヘーゲルの慣用せる矛盾の論理に對して括みたる重要な非議は、マルクスとしては、尙ほ十分なる顧慮を之に拂ふの邊を有したるべき時に行はれたるに拘はらず、彼は毫も此議論を駁撃克服することなしに、矛盾の論理に従つて論を進めた。さうして兎角する間に、矛盾の論理の正當を疑ふ聲は日を逐うて其聲を増し——就中此問題に於いて最も重視すべきはエドゥアルト・ハルトマン（一八四二—一九〇六）が最後に其著「範疇論」（一八九六）に於いてあげたる聲である——今日にあつては、凡そ矛盾の論理の顯著なる反對者を批判的に征服し終らざる前に、此論理の方法を基礎とする體系を眞理として承認することは、識者の取らざる所とせらるゝに至つた。抑も矛盾の論理の如何はしき基礎の上に一體系を立つることは、取りも直さず、根本的に此論理に與みせざる思想家の多數の賛同を當初より斷念することを意味する。

加之、重大なる疑義に逢着するものは、獨りマルクスが採つて以てその唯物史觀の服飾と爲した辯證的形式のみでは無い、その實質的内容も亦同様である。即ちマルクスは、宇宙論に於いてフアイエルバッハ的色彩を帯びたる唯物主義の地上に立ち、随つて物質を、哲學的研究の對象の中科學的に信憑すべき唯一のものとして之より出發するが如く、彼れに取つては、社會的意味に於いて社會的經濟

が、精確なる研究の基礎に立つ社會學の、音に最も顯著なるのみならず亦實に唯一の對象である。

果して、マルクス自身が、彼れの歴史哲學の「コペルニクスの立場」を飽くまでも高調し、而して此の歴史哲學を以て彼れの「發見」と誇稱したのであるか、將た又彼れのピュラーデス（オレステスの忠實なる友、ゾフォクレス及ゲーテの「イフィゲニー」によつて人口に膾炙す——譯者）たるエンゲルスが、マルクスによつて應用せられた唯物史觀を一個の「發見」と刻印を打ち直したるものであるかは（註二）單に趣味の疑問に過ぎず、何等歴史の興味を有する問題ではない。一方吾人も亦、マルクスが社會的經濟を凡ての社會學的研究の中心點に推し出だしたる事實に於いて、社會學に於ける彼れのコペルニクスの立場を認むるに吝なる者ではない。併し乍ら、吾人の批判的疑義が鋒先を擬せんとするは、此立場其自身に對してよりも、寧ろ、マルクスが此立場を以て先驗的であると爲した斷定に對してである。コペルニクス（一四七三—一五四三）は數十年に亙る不斷の數學的計測に基いて彼れの結果に到達し、しかもその數學的證明は人をして首肯せしめずんば已まざるものなるに拘はらず、尙ほ且つ彼れの結論を一個の假設の形式に装ひ成した。同様にカントは、人間悟性に對し、古往今來凡そ人間の頭腦が成し得たる最も周到精密なる認識論的分析を根柢として、漸く彼れの「コペルニクスの立場」と名づけたるものに到着せんが爲めに、滿十年の時日を要した。しかもカントは、彼が、實驗的認識論的道途を辿つて成し得たる發見を理由として、マルクスの如くに吾人の全生活の完全な

る革命を要求することをしないで、僅に吾人の諸概念の認識論的訂正を注文するに止まつた。而して最後にマルクス主義の一味が好んで彼等の社會學的半神と一列に置くを常とするダーウイン（一八〇九—一八八二）も亦苦心慘憺、絶倫の忍耐を以て蒐集せられたる殆ど無數の實驗的材料を根柢とし、一方友人知己の切實なる慫慂もだし難く、漸くその所謂假説を公表するに至らんが爲めに、實に十餘年の歳月を要した。最近アインシュタインの相對性原理によるコペルニクスの立場の動搖すら、尙ほ且つ吾人の社會的構造の徹底的變更を要求しない。是によつて之を觀れば、過去に於いて、天文學、認識論及動物學に於ける各種の「コペルニクスの立場」は、一方歸納的方法により不屈不撓幾十年の拮据經營を経て始めて獲得せられたるものであり、而かも一方その動かすべからざる歸納的證明材料に拘はらず、専ら謙虛なる「假設」の形式に於いて發表せられたことを知るであらう。獨りマルクスに至つては然らず、彼は社會學に於けるその「コペルニクスの立場」を把握するに直觀を以てした。彼は、上に引きたる三個の所謂「指導的偉靈」が、各自の發見に捧げたるが如き苦心の時日を自己の「發見」に對して適用したることも無く將た又彼れの歴史觀の哲學的根據に缺くべからざる實驗的材料を、就中ダーウインの場合に見るが如く、豊富に蒐集して歸納的に利用することもなかつた。マルクスが、英國の社會史及經濟史より取り來つて、特に彼の「資本論」第一卷中に撒布したる多くの經驗的證據は、單に彼が先驗的に採用したる立場の確證に役立つに過ぎず、決してダーウインに於ける動

物學的事實の如く、構造の建設的要素を爲すものではない。斯くの如く、マルクスが、論理的方法論的過誤に加ふるに、認識批判的缺如を以てして居ることは、既にシュタムラー及びブレンゲ等が之を摘發して居る。恰も當年ヘーゲルが「精神現象學」に於いて、シェリングに對し、後者の所謂「本體」は、其唐突なること宛としてピストルより發射せられたるものに似たりといふ批難を試みたるが如く、マルクスにありても亦彼が凡ての先驗的形而上學に對して冷酷なる嘲罵を逞うし、實證主義的哲學と自然科学的に精密なる事實禮讃とに秋波を送るに拘はらず、彼れの「コペルニクスの立場」——社會的經濟——は、謂はゞ社會學的「絶對」として、ピストルより發射せられたるが如く唐突として出現したものである。

更にマルクスが、彼れの全社會哲學を哲學的世界觀としての唯物主義の運命に結びつけたことは、科學的としては輕率の咎を免れない。唯物主義の隆替と共に、彼れの社會學的計測の大厦は起伏する。随つて彼は砂丘の上に樓閣を築きたるものと謂はなければならない、何となれば、唯物主義史家として正に古典的聲望あるランゲ（一八二八—七五）一度び出で、唯物主義の形而上學的並に認識論的論據に對する塵殺的打撃を亂下して以來、現在の最も優秀なる思索的頭腦の中には、形而上學的唯物主義を以て凡そ人類の錯誤中最も的確に擊破せられたりたるものとする信念が、日を逐うて途を拓きつゝあるが故である。随つてマルクスとエンゲルスとが、彼等の社會學の荷物を擧げて浸水の

爲めに將に沈没せんとしつゝある船に托し、斯くして方に彼等の腹より生れ出でたる科學的社會主義の論理的及社會學的存在を危うするに至つたことは、正しくこの兩人の不幸なる哲學的冒險であつたと謂はなければならない。

二、經濟史的方法

若し、マルクス派の一味が、彼等の宗師は究極の社會學的眞理を單に眞面目に探求したるのみならず、亦實に決定的に之を發見したりと謂ふ揚言を提げて立つならば、マルクスの「コペルニクスの立場」を支柱とする這般の揚言は、之をコペルニクス、カント、ダーウイン乃至アインシュタインの謙讓なる態度によつて計測するに、正しくその哲學的論理的正當に對する反比例に於いて立つものである。加之此方法を初めて歴史的研究に適用したる者も亦マルクスでは無い。カール・ヴィルヘルム・ニッチは、一八四二年キールより出だした「Polybius」の中に、マルクスに先鞭を着けて、その方向を決定する歴史的研究の基礎に此方法を置いた。斯くの如く、決してマルクスの發見とは稱し難いが、併し、彼出で、初めて猛然主張し大規模に應用した此方法が、如何なる程度に於いて成果を收めたかに關しては、屢、引用したシュタムラーの著書、特に獨逸の歴史編纂學に於いて、カール・ラムブレヒト（一八五六—一九一五）の代表する一派が、遺憾無く之を説明して居る。此派はランゲ（一七九五—一八八

六) 派に反対し、ハンセン、マイツェン、クナップ、シュモラーの經濟史的方法を、マルクスが夢想だもせざりし程に廣汎周到に應用するものである。但し、マルクス一派の哲學的誤謬は、所謂「唯物史觀」そのものよりも寧ろ——此責任はマルクス自身よりも却つてエンゲルス及其の訓誥を事とする末流に在るが——此史觀に附會せられたる排他獨尊性に存する。若し、トエニースの謂ふが如く、「唯物史觀」の精髓を簡潔なる公式に約して、「生命が思考の中に在るか、或は、思考が生命の中に在るか」存在が意識によつて定めらるゝか、或は、意識が存在によつて定めらるゝか」と爲すを得るならば、(註三) 社會的存在が、常に社會的意識の時間的先行者であることは、多く思慮を費すこと無くして明かである。併し乍ら時間的先位は、尙ほ未だ論理的因果律と倫理的優越とを證することから遠く距つて居る。「經濟的生產條件」は、「觀念的形式」よりも時間的に先んずることがあり得よう、然かしさればとて生產條件が、之に相應する「法律的、政治的、宗教的、藝術的若くは哲學的形式、即ち一言にして蔽へば、觀念的形式」を造り出だすといふことの證明にもならず——兩項の間に於ける論理的因果關係が立證せられざる限り、一個の「其の後」(Post hoc)は、必しも、一個の「其れ故に」(Propter hoc)でない——況んや、先づその範圍と限界とを定めてかゝらなければならぬ生產條件が、あらゆる社會的發展形式の究極の動機であることの證明には猶更以てなり難いのである。然るに若し人あつて、如上の論理的疑義にも拘はらず、尙ほ且つ飽くまで執拗なるマルクス主義者と共に、あら

ゆる社會的現象を經濟的條件乃至階級闘争より、而して唯だ之れのみ解釋せんと欲するならば、彼は嘗てカントが的確に指示したる、所謂人間の統一慾の祭壇に、鮮血滴る犠牲——眞に是れ思想の大犠牲——を捧ぐる者である。

三、價值論批判

又エンゲルスが宗師の第二の「大発見」として嘆賞措かざる、マルクスの價值説も、社會哲學的方面よりして批難の餘地がある。假にマルクス及び古典的國民經濟學者と共に、勞働が價值形成の最高實體であることを承認するとしても、用意周到なる結論に當つては、單に人間の勞働は價值形成に於ける一個の實體であると謂ひ得るに止まり、唯一無二の實體であるとは謂ふことは出來ないであらう。相異なる質を有する商品の群が、それにも拘はらず同一なる價格を有する事態よりして、マルクスは、商品の異質同價といふ現象の由つて來る原因は、凡て此等の商品が一個の「神秘的なる共通物」——彼等の價值を形成する實體——を有することに存せざるべからずと論斷する。茲に哲學的統一慾——カントの所謂「統覺の先驗的統一」——がマルクスを翻弄擲搯するを見る。辯證的に訓育陶冶せられたるヘーゲル派の一人として、彼はあらゆる多様性を一個の最高單位に遡源せしめずんば已まない。此目的の爲めに、「無差別なる人間勞働」の抽象が捏造し出だされたのである。之により凡ての質

的並に量的の差別は一瞬間消滅して、そして凡ての猫を灰色に見せる夜色の中に陥没する。所謂「凝固したる労働時間」換言すれば「無差別なる人間労働」に對する統一的の價值尺度といふは、一個の形而上學的要請である——謂はゞカントの「物自身」を、經濟的のものに翻譯したるが如くである。抑もマルクスは如何にして凡ての商品が單に一個の「神秘的なる共通物」を有するのみであることを知り得たか？ マルクスが主張する如く此の「共通なるもの」は「神秘的」でなければならぬといふのであるが、何故にたゞ一個の價值形成實體を認めて、其の二個、三個乃至數個を認め得ないのであるか？ 既にマルクスは商品の魔力的特性を承認するならば、何故に、一方に於いては商品の「稀少性」他方に於いては其の「有用性」をも、同様に價值形式の實體として算へることが出来ないのであるか？

茲に彼れの形而上學的統一慾が、復もや彼を誤りて致命的偏頗に墮了せしめて居る。彼はスピノーザ及びヘーゲルと共に、世には唯だ一個の實體——宇宙に在りては物質、歴史の進化過程に在つては經濟的生產條件乃至階級闘争、商品生産其自身に在つては、對象化したる人間労働と謂はんが如く——のみが存在し得ることを、證明する代りに假定する。斯くの如くにして、老「大形而上學者」ヘーゲルは、年少ヘーゲル派が自ら信じ、若くは吾人をして信せしめんとするよりも、遙に多く彼等の血の中に潜在する。マルクスに在りてその宇宙論も歴史哲學も國民經濟學も結局に至れば必ず常に不知不識、時としては自然科學の假面に於いてすら、一個の最後の統一點、一個の「絶對」が——所謂「機

械より出づる神」(古代悲劇に於いて慣用せられたる手段にて機械仕掛により突然空中より出現して葛藤を解く神、思ひ掛の救主——譯者)として、謂はゞ社會學的エホヴァの如く躍り出て居る。

更に又假に數歩を譲つて、マルクスが、價值形成の諸實體中最も重要な動因即ち労働を、恣に唯一なる實體と改鑄したる許すべからざる普遍化の責を、姑く措いて問はずとするも、尙ほマルクスはかのアリストテレス的範疇「労働」(Poiesis)を解釋すること狹義に失するが如く見える。英國工業界の影響を受けたる彼れの眼前には——此傾向は特に「資本論」第一卷に於いて顯著である——明かに、工場労働者のみが常に彷彿した、而して農業労働者は其第三卷に於いて始めて現はれたるに過ぎず、頭腦労働者に至つては首尾を通じて殆んど全然顧みられない。若し彼にして、苟も一個の哲學者から當然要求せらるべきが如く、人間労働の範疇全部を眼前に置いたならば、おぞくもリカルドの覆轍を蹈んで、あらゆる人間労働を一切無差別に機械化するの過を再びすることはなかつたであらう。

抑も、任意の労働質を労働量に、而して労働量を労働時間に、機械的に分解することは、或る種の労働の場合には可能であるが、必しも凡ての労働に通用することは出来ない。試に、彼れの「資本論」全三卷の爲めに費された莫大なる労働質及労働量を労働時間に換算し、更に、同一なる手續を、同書の原稿を淨書したる筆耕者、之を活字に組みたる印刷者、之を精讀したる校正者に對しても實行しようとする時、上述したるが如き機械的分解の如何に繁雜困難なるべきかは、容易に之を想見すること

が出来る。且つ「資本論」三巻は、立派なる「商品」であることを牢記せよ。更に加ふるに此の記念的名著三巻が、一方に於いて例へばカウツキー、ベルンシュタイン、及びメーリングと謂つたやうな學者に取つて有する「價值」と、一方には之と正反對に例へば南米邊で何人かの遺産の藏書の中から競買で買ひ取り、尋常の古本として賣渡す古本屋に取つて有する價值との間に、如何なる軒輊があるかを注視せよ（註四）。所謂「對象化したる人間労働」は、前の場合の一部の書と後の場合の一部の書とに於いて全然同一であるのに、其價值に至つては霄壤の差のみでは無い。價值は單に世界市場に於いて存するのみならず、又無限の階級に分る、鑑賞價值 (Appreciationswert) —— その決定は、主として、主觀的、心理的要素による —— に於いても亦存する。斯くの如き價值の主觀的、心理的要素（稀少性、有用性、審美的及道德的因子、敬虔動機、名聞刺戟等）を怪しからず閉却したるが爲め、マルクスの「價值論」は、甚だしくその眞價に於いて害はれて居る。鑑賞價值或は愛好價值が單に主觀的價值のみならず、場合によりては亦現實的なる商品價值と世界市場價值とをも有し得ることは、あらゆる種類の骨董、古玩、美術品、珍品の毎日の競買が之を示して居る。例へば伯林の古切手市場に於いて、一片の古郵便切手に十萬馬克の市價が支拂はれるが如き、此の商品「郵便切手」の背後に潜む「労働のジュリー」を示すことは、到底出来ない相談と謂はなければならない。

四、餘剩價值論批判

特に歴史的にホール、ゴッドウィン及びトムスン等に遡源する根本思想によつて立つ所の彼れの「餘剩價值論」に關しては、既に反對者の側より之に對して鋭鋒を擬する駁撃の著作が、一圖書館を爲すに足る程現はれて居る。故に此處には姑く國民經濟學的演繹を措き、専ら心理的要素の特説に止める。マルクスが、利潤率の程度に就いて極端なる數學的精確さを以て試みたる計算に於いて、労働は餘りに甚だしく機械化せられて居る。彼がその計算の基礎として「無差別なる人間労働」を採つたことは、その餘剩價值論の論理的「第一形相」である。彼は労働の範疇 (アリストテレスに於ける *Poiesis*) をひとり量 (アリストテレスに於ける *Poson*) の範疇の觀點の下に於いてのみ見て、労働の質 (アリストテレスの *Poion*) の觀點を閉却して居る。低級の労働と高級の労働、技術的労働と管理的労働、審美的労働と科學的労働、創造的労働と指揮的労働 —— 約言すれば、諸種の度合に於いての直覺的労働は、之を無差別に玉石混淆することを許さない。當時ユーリウス・ヴォルフは之に對して（其後彼れの「現在及將來の人民經濟」(一九二二)に於いても労働を精密労働、管理的労働及び創造的労働に分類すべきこと（而して此分類は、更に、實行的労働の下位に自動的労働を認める）を力説し、此分類によつて重大なる結論を下した。彼は是より先き企業者を以て主として搾取者と見做すマルク

スに反対し、企業者機能の客觀的重視の途を拓かんと努力したが、更にその勞働論に於いて、彼は發明家（並に藝術家）にもその十分なる權利を享有することを得せしめた。斯くの如く、範疇を新に樹立することなしには、如何なる勞働理論も畢竟無効にして偏頗であり、特に勞働評價といふことが重要な意義を有する今日にあつては、正に致命的缺陷を有することは、秋毫も疑を容れない。マルクスは、その歴史哲學に於いて經濟的生產條件に中心地位を與へて觀念的因子を之に従屬せしむるの錯誤に陥りし原因となつた彼一流の偏狹性を以て、其の餘剩價值論に於いても亦、純粹に機械的なる勞働、就中工業的勞働を偏重して、各種の觀念的直覺的要素の社會的生產に於ける正當なる參與を排除した。農夫の勞働すらも甚だしく閑却せらるゝものゝ如くである。精神的勞働に至つては、マルクスの犀利なる計算に於いて彼等の適當なる權利から遠く隔絶せられて居る。精神勞働に對する斯くの如き過少評價に於いて、現在の露國ボルシエヴィキは、恐らくマルクス主義の粗笨なる解釋の影響を受けつゝ行住するものである。

五、社會的宿命論批判

吾人がマルクスの社會哲學の唯物主義的基礎に對し、形而上學的、論理的及び心理的考量を對峙せしめたるが如く、亦マルクス主義の目的點に對しても、嚴肅なる倫理的並に社會學的疑義が擡頭する。

彼れの社會學的根本錯誤は、唯物主義より採り來つた一面的なる機械主義と宿命論的決定主義とにある。此の形而上學的前提に基いて、彼は恰も天文學者の日月蝕に於けると同様なる確實性と數學的精密とを以て、資本主義的經濟秩序の崩壊を豫測し得べしと信じた。斯くてマルクスは、天文學者の事とするは生命無く意志無く純一に機械的法則に従つて運行する物質なるに反し、社會學者に於けるそれは生命あり意志あり理智的に高度の發達を遂げ、而して獨自の生命を懸命に主張する個々の人間であることを忘却して居る。計測可能なる物質の總合體は、人之をその將來の組成と效果とに於いて豫測することを得るも、不可測なる理智に至つては之と趣を殊にする。一個の社會的有機體は決して單に水生小動物の集合體ではなく、それは未だ吾人に識られざる獨自的法則を遵守する一個の理智的織物である。マルクスはコムトと共に所謂社會動學の杯に陶醉する。之に反して吾人は、所謂實證主義よりも一層實證的に、社會靜學の境に謙遜する。抑も、社會的有機體に侵入する觀念的の不可測物にあつては、社會的事實の統計的指示を試むることは可能であるが、社會的原因の絕對に確實なる斷定、況んや將來の社會的作用の、數學的精確なる計測に至つては到底人間の能くする所では無い。社會動學が、如何に容易に社會學的豫言に墮すべきかは、マルクス主義が己が身の上に痛感すべき筈であつた。即ちマルクスがその獨斷的自信に支持せられて、中産階級の大破滅目睫に迫れりと算出し、此豫言の萬一にも外ること無きを公言して憚らなかつた間に、大戰前時代の所得稅統計、特にザク

セン國（最も卓越せる工業國）の統計は恰もマルクスの主張と正反對なる事實を示したのである。斯くの如く、マルクスが、資本主義的生産形式の避くべからざる壊滅を、數學的に公式化するに當つて代表する社會學的宿命論（資本論第二卷及第三卷）は、それが動もすれば社會的無爲主義と政治的放任とに化せんとするの傾向を有する一事を以てしても、甚だしく危険である。若し天下の事悉くマルクスの公言するが如く、何等吾人が之に寄與貢獻するなくとも、「事物の客觀的進行」の内在的法則に従つて進展するならば、現代の社會的任務に對する敢爲なる献身の熱誠と天下後世の安固の爲めに捧ぐる殉難者の勇氣とは果して何れの處に之を求むることが出来ようぞ、彼が個人に割り當て、居る「助産婦の役割」は、政治的及社會的緊張力を極度に増加せしむるに足るだけの刺戟力を有たない。之よりも一層明瞭なる危険は、若し民衆が、彼等の英雄の豫測が正當であることを信じ初めるならば社會的頹廢、人間性質の精神的情力の法則に餘りに多く媚び易き放縱無爲の風が、忽ちにして生ずべきことである。若し一度、社會的無爲主義を直ちに招來すべき這般の教義が民衆に浸潤するならば、東洋人に見る宗教的宿命の代りに、西洋人にありては社會的宿命が出現するに違ひ無い。今日の吾人は斯かる社會的宿命から最早遠く距つて居ない。革命が社會的約束を満たさず、約束せられた黄金の山が實現しない爲めに、現代の吾々社會には厄介極まる露西亞人のニーチェヰツォ(Nitschewo)——露西亞人のあきらめと呑氣さを示す代表的表現、「構はない」それも宜からう」といつた意味——譯者）や、

土耳其人の宿命と類似性を有する倦怠的な諦めが現はれて居る。

觀念的因子の閑却と輕蔑とは、マルクスに對して手痛き仕返へしを加へた。彼は一般的に自然を、特に社會的生産過程を機械化したるが如く、亦個々の人間をも機械化した。マルクスは社會的原子としての個人が恰も機械學と化學との法則のみによりて他の原子と相合し、社會的集合體を形作るものゝ如くに解し、而して此の社會的原子が生命なき物質と異なる所以の、意志衝動と理智動機とによつて支配せらるゝことを見落とした。理智的に發達したる個體は、時計を巻くが如く、機械を調整するが如く、無造作に機械的に取扱はれることを肯じない。マルクスの計算に於いては、理智的、倫理的並に審美的反抗が全然没却せられて居る。マルクスによつて排除せられた個體、独自の生命を必死に防衛する個體は、かのあらゆる審美的魅力と凡ての倫理的感激とを全く喪つたる彼れの社會學的運命論に對する有力なる駁論である。斯くて此等の輕侮せられたる不可測なる物、計算に加ふるを要せざる微量として従屬せしめられたる個性——一言を以て覆へば「觀念的因子」が、當年マルクスが冷然として彼等を踏み超えたる如く、他日マルクスを閑却して議事日程に入ることあるべきは、深思を須たずして明かである。

(註1) Trendenbunrg, Logische Untersuchungen (1840); Die logische Frage in Hegels System, Zwei Streitschriften (1841); Geschichte der Kategorienlehre (1816) 参照。

(註二) Engels は「Dührings Umwälzung der Wissenschaft」一〇頁に於いて、「唯物史観」を、餘剩價値の理論と共にマルクスの第二の大發見と稱揚して居る。

(註三) 「Archiv für Geschichte der Philosophie」叢書一八九四年第七卷五〇八頁。

(註四) 勿論、之と同様な批難に對して、既にマルクスは Poscher に答へて「ライプツィヒの大卸賣市に於いて觀察を試むるは宜しからず」と曰つて居る。然らば「ライプツィヒの市」は商品經濟の場所ではないのであるか。又他の場合にマルクスは次の如き口論を洩らしたことがある。余は、一人の彫刻家一日の勞働を以て、手傳職人二十日の勞働と同一視せんとするものである。併し、マルクスの主觀的評價は毛頭、「無差別なる人間勞働」の客觀的尺度となり得ないではないか。

第十九章 フエルディナント・ラサール

一、既得權利の體系

フェルディナント・ラサール(一八二五—一八六四)の決定的功績は、主として社會主義の宣傳に貢献したるにあつて、社會主義の理論は、彼れの卓絶せる才氣から比較的僅少なる利益を得たに過ぎなかつた。概してラサールの社會主義には獨創的分子がない。その經濟的基礎は、カール・マルクスに由來する(彼とマルクスとの間には、既に一八四八年に個人的結合があつた)。又その實際的提案は大體に於いて、吾人が既に述べたるサン・シモン及ルイ・ブランの思想を踏襲して居る。若し強ひてラサールが獨自の見を添加したるものありとすれば、それは最初ルイ・ブランが要求したる、かの集團社會主義を歴史的に動機付け法理的に説明したる點に存する。

社會主義の法理的基礎に於いて、ラサールは燃犀の眼を以て一個の缺陷を感得した。此の缺陷は、マルクスも、ラサールの死後初めて現はれたる「資本論」に於いてすら、依然として看過したものである。マルクスは一切の經濟的範疇、例へば、資本、私的企業、賃銀制度等の如き、悉く論理的範疇に非ずして單に歴史的範疇たるに過ぎずとし、而して之によつて推論すれば、法律的範疇も亦同じく歴史

的妥當性を有するのみと断定し得ることを示すに止まつた。然るにラサールは、此點に關し其著「既得權利の體系」に於いて、一層系統的に所論を進め、かの所有、契約、家族、相続權等の如き凡ての法律的範疇も亦、論理的性質を有せず、唯だ純粹に歴史的範疇に過ぎざることを證明せんと試み、ゲルマン系の民族精神は、ローマ系の民族精神と別個の法律を産出すと説いた。特に相続權に關して、相続人は元來財産相続人に非ずして、寧ろ單に意思相続人に過ぎなかつたことを断定したことは、彼れの卓見を以て稱すべきものである。彼はローマ法に就いて之を例證し、更に之より新時代の法律を歴史的に演繹し、而してかの有名なる警句的結論「ローマの不滅性は遺言狀である」に到達した。

ラサールの立論は、曩にライプニッツのなしたるが如く、大凡下の如くである。曰く、遺言狀は、靈魂不滅を假定してのみ其效力を有する。ライプニッツが既に論じたるが如く、若し靈魂が不滅でないならば、十二分の權利を有する遺言狀も全然零無であらう。併し乍ら基督教の靈魂不滅概念は、羅馬のそれと氷炭相容れない。羅馬に於いて相続人は、意思相続人であり、家族に遡源する古ゲルマン法に於いては單に家族の代表たるに過ぎない。然るに基督教を奉ずる諸民族にありては、靈魂は固より不滅であるが、併し死後に至つては最早何等の地上的財産を占有しないといふ觀念が支配する。若し死者の靈魂が遺されたる財産の所有者に非ずとするならば、遺産を相続するの權利は、獨り社會のみが之を有する。然るに、若し相続者とは死者の財産の管理人に過ぎずと主張するならば、聖書の

基督教的觀念に隨へば、結局唯一人の所有者が残るのみであり、それは取りも至さず最初の被相続人たるアダム其人の外には無い。

ラサールが、斯くの如く一般に行はれて居る相続權の理論の不合理を闡明せんと欲したる究極の目的は、畢竟、現今社會の最も基本的なる制度すらも純粹に歴史的のものであつて、毫も必然的なる產物ではないといふこと、隨つて將來の社會形式は、從來のもの甚だしく懸絶したる、時としては多くの點に於いて全然相反馳する針路を探り得ること、多言を要せずして断定せられなければならないといふことを立證せんとするにあつた(註一)。更に又國家概念の見解が、現世紀に於いて遂げられたるあらゆる進歩の由つて來る源泉であるとする彼れの主要思想を、一層明確に叙説せんと欲したのにあつた。(既得權利の體系一、四七)

斯くの如くラサールが、單に資本のみならず亦一切の所有を歴史的範疇と説明した限り、彼は理論上恐らくマルクスに比して百尺竿頭更に一步を進めた者と稱すべきであるが、併し此等の急進的原則より直下に顯著なる結果を現出せんと焦らなかつただけ、彼は賢明にして政治的に成熟して居た。彼が政治的論争の狂熱に介在しつゝも、直ちに相続權の完全なる廢止を主張するが如き騎虎の勢に驅らるゝの弊に陥らなかつたことは、彼の偉大なる自制を證明するに足る事實である(註二)。然らざれば、彼は直ちに夢想家の頭數に加へられ、隨つて識者の一顧を値ひせざるの危険に陥つたであらう。

二、マルクスとラサール

ラサールは顯著なる實際的天才であつた。マルクスが理論に於いて、精神的にラサールを抜くこと高きと同程度に、後者は實際的に前者を凌駕して居る。マルクスは、その社會哲學的發見、即ち彼がよつて以て資本の論理的無花果の葉を寸斷したる餘剩價値の理論は、これによりて全世界に亘る社會革命を期し、凡ての國のプロレタリアを打つて國際的同盟の一九と爲し、文明世界のあらゆる大資本主義的搾取者よりその不義の富を奪還せんことを庶幾した。マルクスにありてはプロレタリアの世界的劫火が前提である。ルドルフ・マイヤーは曰ふ、「ラサールの意中唯だ獨逸あり、マルクスの意中には全歐洲あり。ラサールは改良家にして、マルクスは革命家である」と、蓋し至言である。

即ち政策家としてのマルクスは、次の如く若干の實際的考量を輕視したる傾がある。其一は歴史、特に國民性の力である。個々の民族はその氣候風土、その傳説、就中、その言語に於いて自己と他民族とを截然區別する特性を有して居る。マルクスと雖も固より之を識認しないではないが、併し遺憾なく之を重視したとは稱し難い。此等の歴史的並に民族心理的事實は、決して之を「不可測事」として除外することを許さない。其二は精神的情力の法則である。マルクスは之を見て、而かも之を閉却して居る。其三は教會特にカトリック教の力である。新約全書の言葉は、流石に最新約全書（共產黨宣

言）の言葉よりも勞働者の耳に入ることが容易である。其四は現在國家の力である（註三）。其五は風俗習慣の力である。若しマルクスの假定が、少くとも凡ての好意ある識者によつて承認せらるゝならばプロレタリアはあらゆる他階級の公正なる思想を有する人々の間に有力なる應援支持を有すべき筈である。然るに實際上此は極めて稀れに見る現象に屬する。其六は、探るべき方向に關して、社會主義的諸團體に於ける不一致である。苟も一切の社會主義者によつて承認せらる確乎たるプログラムの存せざる限り、吾人は個々の社會主義者に對して、彼は唯だ自己の名若くは大小の朋黨の名に於いて發言するも、決して全世界の超國境のプロレタリア代表者として説をなす者に非すと公言するも、毫もその憚るべき所を見ない。革命以來社會主義政黨内部に於ける不一致が、其勢の趨く處、墻に闖ぐを事として互に仇敵視するに至らしめたるは人の知るが如くである。今日勞働組合と右翼社會主義者と獨立社會黨と共產主義者と無政府主義者とは、僅にアイゼナハの大會（一九二二年九月二十日）に於ける右翼社會主義者と獨立黨との握手とを例外として、常に不俱載天の敵視を續けて居る。

斯の如き凡ての實際的考慮に鑑れば、ラサールがその理論的急進主義に拘はらず、常に實際的に到達し得べく庶幾すべき目標を稍々卑近なる位置に定め、企て及び易きやうに形作つたことは、政治的賢慮よりして當然の事に屬した。勿論之が爲め、彼はマルクスから惡評判を立てられた。然かも實際的煽動家として、ラサールが事實の形勢を洞察する眼光の犀利が、かの慷慨的隱者として體系的説明の縱

横無盡の網の中に籠居したる理論家マルクスに比して一頭地を抜いてゐなかつたかは大なる疑問である。マルクスの方がより大なる科學的天才であり、且つ又一層確乎たる性格であつたことは確實である。併し乍らラサールが、何人にも優つて、深く民族心理を讀破することを解したる天稟の黨首であり、より偉大なる心理學者であつたことも同様に確實である。マルクスは識者を説伏した。之に反してラサールはプロレタリア其自身を直ちに行動へ、即ち牢乎たる組織へと急がしめた。

ラサールが社會主義者綱領を、彼れの時代にありて實際に到達し得るもの及び歴史的に可能なるものに制限したることは、極めて機宜に適したることである。若しマルクスが示したる如く、歴史的過程は之を強制すること能はざるものであつて必ずその内在的の正常なる経過を取ることが眞ならば、ラサールが先づ國民的國家社會主義に發足して次第に國際的世界社會主義の爲めに道路を平夷ならしめんと試みたることは、疑もなく正當であつた。若しラサールの理想が實現せられたならば、換言すればプロシア國が一億ターレルの公債を以て、國家の信用を有する勞働者組合を建設したならば、是こそ眞に國家社會主義の道に於ける第一歩であり、賃銀勞働の漸次的廢止は其端を啓いたであらう。更にプロシアに於ける此の社會的進歩が成功を立證するならば、恐らく社會主義は二世紀——ロートベルツスに從へば五世紀——を出でずしてあらゆる文明諸國を席捲したであらう。之に反してマルクス主義の假りに高く標致せられたる目標——凡ての生産手段の社會化、凡ての賃銀勞働の根本的廢止——は

徒に熟慮ある者をして辟易せしむるに止まつて居る。マルクスと雖も必しも漸進的社會化を排斥するものに非ざることは、固より言を俟たない。

三、賃銀鐵則

ラサールの主張は、之を詮じ詰めれば僅に二三の基本思想に歸着する。即ち社會主義が國法に認容されるべきこと、及びそれが道德的に必然なることを、輿論に教へるにある。此目的の爲めに彼は其源をリカルドに發する「賃銀鐵則」(Das eiserne Lohngesetz)の說を發展せしめた。此法則に従へば、現今の社會秩序に於いて勞働者の賃銀は、當該民族の生活習慣に従つて生存を續け子孫を繁殖せんが爲めに絶対に必要な額を限度とするといふのである。ラサールは軍隊式形容を弄することによつてプロシア人氣質を好んで發揮したが故に、此法則にも嚴しく「鐵」の名を冠したのである。彼は常に「プロレタリア軍の密集部隊前進」といふ風な言葉を用ゐ、其の一味に對して「閱兵」を行ひ、「勞働者大隊」の壯觀に滿悦し、「その鐵腕」は善く反對者に「棍撃」を與ふるに足ると傲語するが如く、兎角軍隊用語を盛んに振り廻はす癖があつた。彼れの社會主義は、悪く謂へば「プロシア王國社會主義」である。即ち彼は實際に於いて、若し國家が社會的國家への飛躍を共にするの意思ある限り、之と苟合妥協することも敢て辭せざるものであつた。

彼は思想の力を信じ、又識者は「賃銀鐵則」の動かすべからざる至理なることを確認承服すべしと信じて居た。随つて若し識者と爲政者をして社會主義の正當と道義的必然性を確認せしむることを得るならば、何を苦しんで憎疾を増し敵視を激成し、加ふるにその結果の尙ほ極めて疑はしきものある暴力手段を用ゐるの愚を敢てしようぞ。社會の半分が支配階級の助力を有することは、支配階級と闘争して全部が不安なるに比して勝ること萬々である、この見解を抱いて居た。(即ち、革命に非ずして改良である)

ラサールは曩にサン・シモン及び特にルイ・ブランによつて要求せられた「國家信用を有する勞働者の生産組合」に於いて、社會的國家への最も穩健なる推移形式を見出だすと信じた。社會が若し賃銀鐵則の全壓力と殘忍性と及び従つてその道德的にいかに薄弱なるかを洞察するならば、蓋し容易に之を首肯するであらう。之に對して、今日の勞働者の生活状態は百年前のそれに比して霄壤の差ある程改善せられて居るといふ抗議は其當を得ない。生活状態は、専ら比例的にのみ計測することを得る相對的概念である。ユリウス・ヴォルフは此點を看過輕視して居る(註四)。生活状態は、謂ふ迄も無く、常に、各人の要求と文化生産とに並行しなければならぬ。半亞細亞的農夫は、若し彼に日曜日の爲めの雪白のシャツと光澤あるカラーと優美なるネクタイとを與へんとしても、之を謝絶するであらう。彼は之を以て厄介至極なる強制と感じ、寧ろ監獄に留置せらるゝことを喜ぶであらう。之に反して瑞

西の勞働者は、多少の空腹を忍び、若くは樂しき一杯の酒を斷念しても、尙ほ且つ此の文化的要求を休日に於いて必ず満足せしめずんば止まないであらう。

然らば此の「賃銀鐵則」を打破するの勇氣を示す者は果して何者であるか。ラサールは之に答へる「全體、即ち、國家のみ之を能くする」と。個人はいかに善意志を有するも、殺人的、無政府的競争に對しては到底無力である。獨り全體が、私的生産にも亦通用せらるゝ此法則を打破し、個人生産に代ふるに國家の援助を有する生産組合を以てし、嘗てプランが、競争の毒を制するには唯だ競争の毒を以てせんと欲したる趣旨を實現することが出来る。但し此等の組合は、プランに於けるが如く、國家の力を俟つて初めて生れ出づるものではない、寧ろ勞働者自身の自由創意によつて發生し、唯だ國家より、考へ得る最も低廉なる信用を附與することによつて支持助長せしめらるゝものたることを要する。斯くの如くにして、勞働は從來の如く資本の頤使する處となるの恐なく、反對に資本が勞働の驅使に甘んずるに至るのである。

是れ、社會問題の解決と稱すべきか。決して然らず。ラサールは斯くの如く近視的ではなかつた。概して彼は社會問題を解決しよう欲したことは無い——之を解決せんが爲めには、數世紀の星霜を要することを洞察して居たからである。——併し乍ら彼は、民族と社會との發展がよつて以て社會的國家の將來の理想に接近すべき道路を平坦にせんと欲した。今日の國家は、單に彼に假すに一擧手の勞

即ち國家信用を有する團體的生産の制度を實施する勞を以てすれば足りるのである。爾餘の事は、自ら及を迎へて解くるであらう。

四、實行家としてのラサール

斯くの如く、實際に施行し得るものに制限したることに於いて、吾人はラサールが歴史的眼光の鋭利なる巨匠たることを看取する。勞働者は宜しく結合して一個の大軍隊を編成すべきである。併し乍ら、それは、力により一夜にして社會的國家を建設せんが爲めではない——何となれば斯くの如きは單に專制主義に逆戻りせしむべき非歴史の暴舉に過ぎないからである。——勞働者軍隊は彼等の投票用紙の銃劍を以て現在の社會秩序を攻撃し、斯くて多數の勢力を掌握すると共に、漸次社會的立法の途を辿つて、社會を社會的國家に推移せしむることを目的とすべきである。

マルクスとラサールとの相違は徹底的にして深刻である。彼等は單に其目的に於いて一致するに止まり、此共通の目的を達成せんが爲め的手段に至つては、正に氷炭相容れざるものである。ラサールは社會哲學者としてフィヒテを宗とし、マルクスはヘーゲルより出發する。前者は、人類發展に於いて精神的要素に優越權を認むる理想主義者として畢生を終始し、後者は進化論的唯物論者として、明々白々なる精神的要素に於いてすらも、恰も催眠術にかけられた如くに、その經濟的背景を凝視す

る。ラサールは指端に至るまで獨逸人であり、嚴正に國民的なる社會改造家であるに反し、マルクスは凡ての國のプロレタリアと握手して、自から國際的社會革命家と名乗を上げて居る。ラサールはピスマークと、マルクスはバクーニンと、夫々、自家の改造計畫を商議する。ラサールは將來の福祉を生産手段の大部分の國有化に存すとなし、マルクスは之をその全部の社會化に於いて認める。「進化論者」マルクスは、進化の現在の形相が明かに依然として國民主義と呼ばれ、尙ほ未だ國際主義と稱せらるべき階段に達して居ないことに想到しなかつた。露國のボルシエヴィキは國民主義を生み出した。戰爭前に露國にあつたものは、汎スラヴ主義で國民主義ではなかつた。ボルシエヴィキに至つて初めて露國々民主主義といふものを養成した。國民的形相を無二無三に超躍せんとすることは、容易に「死の跳躍」に導くのがある。故にマルクスは、獨創的思想家として嶄然ラサールを凌駕するかも知れないが、併しそれにも拘はらず天下後世は、實際家及策略家としてマルクスに劣らず獨創的なるラサールを却つて上位に置くこと無しとは斷言出来ない。國民主義が命數を了へて大往生を遂げたる時、茲に初めて國際主義の巨鐘が殷々として響き渡るのである。

(註一) "System der erworbenen Rechte", I, 53f.

(註二) ラサールは相續權の改造を要求してその廢止を主張しない。即ち「社會の爲めに、遺産の調整」を主張するのである。

(註三) エンゲルスは、マルクスの死後に至つては勿論現存國家の力を認め、爾來革命的社會主義より進化的社會主義に移つた

(エンゲルスの“Klassenkämpfe in Frankreich”の最終冊の序論参照)。その中、唯一箇所を引く。吾人——革命家、變革家と稱せらるる、吾人も、非法律的手段及び變革よりは、法律的手段を用ゐて、一層勢力を増すものである」云々。

(註四) Julius Wolf: System der Sozialpolitik” 第三章、一二五頁——三〇四頁。

第二十章 現今の社會經濟學に就いて

一、序

「社會經濟學」の名稱の下に吾人は經濟科學(政治經濟學、國民經濟學)の範圍内に於いて、或は直接「社會問題」の諸事項を追究するか、若くは人民經濟の社會的要素を特に力説する所の諸種の努力を總括する。國民經濟學が、その實際的部分に於いては物貨生産の機械學を、その理論的部分に於いては物貨生産の物理學を取扱ふものとすれば、社會經濟學は謂はゞ經濟生活の倫理、換言すれば社會的正義の問題を事とするものである。人類の智的並に道德的興味——マルクスの稱呼に隨へば、觀念的因子——は國民經濟學其自體に取つて全然問題とならないが、社會經濟學は之を採つて理論的討究の前面に押し出だすのである。之に反して、社會哲學と社會經濟學とを比較するに、前者がその論據を主として心理的、審美的並に倫理的源泉に拘んで、斯くして、個人々々の共同生活と共同作業との形式及目標を確立せんと擬するに反し、後者は——飽くまで經濟的要素を固持しつゝ——その材料を主としてその各部門の統計に仰ぎ、之によつて物貨生産の目標を設定するに當り倫理的考量を計算の中に加へんと欲する點に於いて、相互に反馳して居る。此兩者は必しも互に排斥するものではなく、

寧ろ往々にして彼此混融する場合が多い、唯だ強音符が一方にありては經濟の上に置かるゝに反し、他方にありては社會的發生の心理に置かるゝの差あるのみである。

二、マルサス

抑も、社會的要素は、必しも常に國民經濟學的興味の前面に立つたと稱することは出来ない。國民經濟的の正眞の古典的諸家は、社會問題に對して頗る冷淡であつた。例へば、トーマス・ロバート・マルサス（一七六六—一八三四）の如く、嘗ては聖書を墨守したる僧侶にして尙ほ且つ次の如き冷酷なる言をなし得たるが如き、即ち是である。「既に占有せられりたる世界に生るゝ者にして、若しその生存の手段を、扶養の義務ある親族縁者より得ること能はず、又自己の勞働によつても見出し得ざる時は、彼は毫も榮養を要求する權利を有せず、事實上彼は此世界に於いて過剩者である。自然の大饗宴に於いては彼の爲に全く食器が具へられない。自然は彼に退席を命じ、且つ此命令を遂行するに寸毫も假借しない。」

但し吾人は、現今の吾人の社會的感情を傷ふ這般のマルサスの言、若くは之と同様に冷酷無情の韻を傳へるスミス、リカルドー、セー等の言を以て、直ちに、此等國民經濟學古典諸家が大眾の窮苦に同情すること、悲歌慷慨を事とする現時の煽動家に比して劣れりとなしてはならない。現に同一人の

マルサスは、下の如き溫情に溢るゝ言をも亦發して居る。「余は、吾人の原料や織布の對外國販路を少しく増大せんが爲めに、故意に勞働階級に向つて繚纏を纏ひ陋屋に住むべしとの宣告を下して恥ぢざる程卑しむべき思想を他に知らない」。由是觀之、専ら物貨生産の過程の研究を事とした古典經濟學者に缺けたものは、爾來短時日の中に全階級を把握したるかの社會的世界苦の感情であつた。「大眾の艱苦を烈々たる苦痛として感ずること」(註一)は吾々現代の特徴である。スミス及びリカルドーの徒の時代において、現今凡ての圈と、凡ての舌とより——例へば、デヨーヂ、ハクスレー、フェルリ、レクリュー、ラヴレー、ギヂッキ、ヘルツカ、トルストイ等の如し——紛々として吾人の耳朶を打ちつゝあるが如き社會的世界苦が、尙ほ未だ高い宗教的世界苦の地位を奪はなかつた。然るに大眾の艱苦に對する同情が單に宗教的世界苦に於いて現はれて居た限り、所謂辯神論(災禍や邪惡の存在と神の世界支配とが一致し得ることの證明——譯者)の古來の疑問に現はるゝが如き痛烈なる創傷は、「神の指」に對する信仰に於いてその催眠的鎮靜劑を有つて居た。故に敬虔なるマルサス及び彼れの同志に於いて時あつて覺醒する社會的良心も、その都度超越的動機——神の正義——の暗示によつて鎮靜せらるゝのである。然るに現在は之と趣を殊にする。吾人の時代は、社會學的に拳々服膺する格言は「自ら助けよ」、若くは一層適切に言へば、更に精密なる佛蘭西の箴言「自ら助けよ、然らば神、汝を助くべし」といふのである。吾人は灼くが如き社會的世界苦を鎮靜するに、またスコラ哲學の藥局より得來る鈍

き水薬を以てしない。吾人は自ら發明し實驗的に證明せられたる方法により、社會的有機體に於ける症候を除去せんが爲めに勇敢なる手術を受くべく神經を強壯にする。現在の社會經濟學的文献に於いて活潑に論議せられつゝある此等の方法の若干は、謂ふまでもなく今日に始まつたものではない。

三、シスモンチ

シスモンチ(一七七三—一八四二)は、その等身の著述——其中、茲には「商業的の富、或は、商業立法に應用せられたる經濟學原理」(全二卷、一八〇三年瑞西ゲンフ市發行、本書は、尙ほスミスの學說に立脚す)並に、「新經濟學原理、或は、人口に對する關係に於ける富に就いて」(一八一九年初版、一八二七年再版(本書に至つて既にスミスに對する反旗を翻して居る)の二書を掲ぐる)——に於いて社會經濟學の建設に貢献する處少くなかつた。彼れの著「社會科學に關する研究」の題號が、既にシスモンチと共に始まる方向を明示するものである。彼が嘗てリカルドーに對して反問したる言葉「抑も富は凡てにして、人間は全然無價値なりや」は、人口に膾炙する處であるが、此言葉は爾來凡ての社會經濟學の主導動機となつた。其後に現はれたシスモンチの國民經濟學的著書に於いて、吾人は眞摯なる學者間に目覺めた社會的世界苦の最初の歎聲を聴取する。

個人の凡ての特殊生活と道德的特質とを併呑して意とせざる、リカルドー一派の冷酷なる理財學に

對するシスモンチの痛烈なる批難、及び個人の勞働權と勞働のあらゆる成果の無碍なる享樂との要求は、將に成らんとする社會經濟學の基本低音を成すものである。シスモンチを、ヒルデブランド(一八一二—一八七八)及びクニース(一八二一—一八九八)と伍する社會主義者の中に數ふべきか、或はイングラム(一八二三—一九〇七)と共に、今日の教壇社會主義の先驅者と見做すべきかの歴史的穿鑿をこゝになすは無用の閑事であらう。彼は産業萬能主義の社會的弊害に對する批判の方面に於いて社會主義者と共通するが、然かも彼等の改造意見には賛成して居ない。彼の改造思想は、社會主義的未來國家よりも寧ろ過去に遡つて中世紀に憧憬することが遙に多い。シスモンチはマルサスの人口論の信奉者であり、リカルドーの地代論の反對者である。彼は熱心なる小經營の賛成者にして、隨つて、避くべからざる生産過多と之より自然に生ずる恐慌とを伴ふ大産業を攻撃する。一方教壇社會主義者と彼との間に於ける共通點は、倫理的特徴、國家優先觀、及び自由放任主義嫌忌であつて、然かも教壇社會主義者が特に重きを置く歴史的方法(註二)は彼の探らざる所である。彼の地位は、博愛主義的要素を攝取することによつて、國民經濟學を社會經濟學に轉向せしめたるの功績が主として彼に歸するといふことによりて、最も適切に言ひ現はさるゝ。

四、フォン・テューネン

次に國民經濟學の社會經濟學への轉向に於て一段の進捗を意味するものは、主著「農業及經濟との關係に於て孤立せる國家、一名、穀物の價格、土地の富及稅の耕作に及ぼす影響の研究」(一八二六、再版一八四二年)に於て世に問ひたるヨハン・ハインリッヒ・フォン・テューネン(一七八三年—一八五〇)である。かの歴史派が特に力説高唱したる精密方法は、本書に於て初めて國民經濟學に應用せられた。「テューネンの方法は科學の歴史に取つて最も重大なる意義を有する。彼は時期よりすれば、クローニンケ、ビツクオア伯、フォン・ザルフェン等の諸家より後れて居るが、然かも精密科學的方向に屬する獨逸經濟學者中の第一人者を以て推さるべきものである」(註三)。テューネンの地代説は大體に於てリカルドのそれと一致する。唯だ賃銀と地代との關係の算定に於て、彼は社會經濟學的に觀て極めて興味ある方法に於いてリカルドと異なつて居る。後來ラサールによつて命名せられた所謂「賃銀鐵則」の氷の如く冷かなる氣息と反對に、吾人はテューネンの所謂「自然に適する勞働賃銀」の確立に於いて、初めて道德的動機の一脈の和風を感得する。彼にあつて賃銀は單に「勞働」と稱する商品の價格たるに止まらず、亦實に情感を有する人間の缺くべからざる生存條件である。勞働者が一方に於いて「仲間の増加を適宜に抑制すべく餘りに無教養であるが故に、賃銀の向上を實現すること能はず、而して他方に於いては、彼等の賃銀が低きに失するが爲めに、その兒女を十分に教育すること能はず」といふ状態に於いて、プロレタリアが永却に陥つて居る循環論的缺陷を痛切に咀ふ(註四)。

數學的方法に於いてリカルドと一致し、然かもその倫理的動機に於いて根本的に相異するテューネンは、資本と勞働との協調和解を可能ならしむる「自然に適せる勞働賃銀」を説いて居る。彼れの「自然に適せる勞働賃銀」の有名なる公式は $\frac{1}{a}$ である。aは一個の勞働者家族の生活最低限度、pは此家族を支持する人の勞働生産を意味する。彼は此の公式を案出するに當り、單に複雑なる數學的計算を基礎としたるのみならず、亦メクレンブルク・シュヴェーリンの所有地に於いて、實際に彼自身の勞働者に對し極度の良心を以て之を適用し、竟に此公式を以て彼の墓碑銘となさしめたことに徴すれば、彼が此の中に彼れの社會經濟的思索の眞髓を認めたことは多言を俟たずして明かである。而して此思索其自身は、單に數學的並に論理的計測のみによつて支配せらるゝリカルドの場合と其撰を異にし、同時に亦、極めて深い社會倫理的動機によつて一貫せられて居る、隨つて、世人が彼に冠するに「社會主義的」思想家の名を以てすることは、決して惡名の意味では無く、寧ろ名譽の稱號と看做し得るのである。

五、リスト

試に、社會經濟學者の「巨頭」を紛々たる凡流の中より摘出せんと欲するならば、吾人はフリードリッヒ・リスト(一七八九—一八四六)に對して、現在の社會經濟學の先驅者中に於ける優越の地位を

拒むことが出来ないであらう。一八四一年に現はれたる彼れの主著「政治經濟學の國民的體系」は、その圓熟せる社會經濟的識見の總計を示すものであるが、吾人は此書を以て現在の社會經濟學の歴史的寶庫と稱するも過言ではない。但し「リストが獨逸の爲めに努力したるものゝ殆んど全部が、彼れの存命中、全然若くは半ば、實現せられた」といふロシアの誇大なる頌詞(註五)には、俄に賛同することが出来ない。

嘗てルネサンスが中世に對して然りしが如く、今やリストは此の機械化し原子化したる「經濟人」に對して、完全なる人間の十分なる内容を再び發見した。茲に頗る奇とすべきは、道德哲學者たるスミス、道德說教者たるマルサス——「商人」のリカルド及びセーに至つては固より言ふに及ばない——すら之を顧みるの違無かつた人間の道義性及び理智を庇護高唱することが、リストの如き一個の實際的經濟家の仕事として留保せられて居たことである。古典的經濟學者の眼に映じたる生産的平均人的經濟家の仕事として留保せられて居たことである。古典的經濟學者の眼に映じたる生産的平均人的經濟家の仕事として留保せられて居たことである。——吾人の命名に従へば所謂「自働的經濟人」——の經濟的運動は、リカルドの冷酷なる論理に従へば單に數學的に豫測し得るのみならず、又傀儡の如く縦横に繰り得るものとせられて居るが、之を哲學史的に觀察すれば、經濟的衣裳に包まるゝラ・メットリーの「機械人形」に過ぎない。抑も人類の精神的重量の關與を經濟的計算より除外し、而して理智的に發展したる個人を遇すること恰も生命無き機械を遇するが如くなることを得べしとする不幸なる迷妄に囚はるゝ這般の心理的唯物觀に累せら

れて、古典的國民經濟學は遂に破滅したのである。勞働力を有する生産的個人は、事實に於いて決して一個の國際的原料品ではない、又市場の氣配や若くは各人の見込に隨つて擅に彼方此方に運搬し得る單純なる世界市場の商品でもない、國民的本能によつて支配せられ、國民的先入見に囚はるゝと同時に、亦往々にして國民的理想によつて支持せらるゝ一個の人格である。綿絲の國際性は無造作に之を感情ある人間に移すことが出来ない。更に古典的國民經濟學に於ける他の偏見は、人間の勞働力に對する謬れる心理的解釋である。古典的經濟學が凡ての勞働力に於いて評價するものは専らその當面の交換價值であつて、而して凡ての勞働力が必しも常にその表面上の交換價值によつて全部が現さるゝものに非ずして、場合によりては全體の利益の爲めに蓄藏せらるゝことも亦あり得るものであるといふ事實を看過して居る。例へば吾人の學校、大學及び専門學校等に蓄積せられつゝある潜在勞働力は、將來の時代に至つて始めてその效能を現はすものであり、隨つて現在直ちにその交換價值を標準として評價せらるべきものに非ざるが如くである。人間の勞働力は、之を一方的に國際化することを許さず、又一方的に物質化することを許さない。最後に而して特に、發達したる個人は、單に經濟的に生産する一個體といふのみでは無く、亦實に倫理的並に審美的に時々定められたる目標を自己の理想として、之に向つて勇猛精進する一個體である。文化人の内容は、「出来る限り廉價に購入し而して出来る限り高價に賣却する」といふ所謂「福祉實現の唯一無二なる」經濟的金科玉條を以てその全

部を示し得るものではなく、之と相並んで、文化の向上生長と共に、利己的興味と相拮抗し更に時あつてか往々之を排擠する所の幾多の社會的興味を包藏するものである。生産する人間に於ける這般の三特徴、即ち、國民的要素、理智的要素、並に倫理的、社會的要素を、吾がフリードリッヒ・リストは、古典的國民經濟學に對する辛辣にして假借無き批判に於いて救護し、且つこれを社會經濟的に力説せんと欲したのである。

斯くの如く、リストは、スミス派の「民族的富」に對して「國民的富」を標致したとは謂ひ條、然かも、偏狹なる愛國狂からは相距ること甚だ遠かつたのである。彼は國民的要素を高唱して倦まざる間にも、尙ほ且つ「人若し後世に對して耻づる所無からんと欲せば、常に最高の立脚點を占守することを要する」といふ高雅なる原則を忠實に遵守した。故にその實際的並に政治的行住に於いて、常に國民思想を高唱した同一のリストは、亦文化列國の「世界聯合」と恒久平和を夢想した。リストは國際聯盟の先驅者である。

リストは、社會學的進化論者の高尚なる典型である。彼によれば、現在の人間とその當面の幸福とは決して自己目的ではない。個人が國民の背後に退却するが如く、亦國民の内部に在つても、其の時々々の生産種族は、將來の種族の利益の背後に謙退する。國民は不斷に存続するが故に、國民の眞の富はそれが占有する交換價値に存せずして、その生産力の完全にして多方面なる發展に存する。それ故

に國民の經濟的教育は、直接なる價値生産に比して一層重大なる意義を有する。さうして吾人が、將來の時代の強さと技能とを確保せんが爲めに、自己の利益と享樂とを犠牲にすることを現存人に要求することは、極めて當然である(註六)。斯の如く彼は一國民の内部に於ける生産力——精神的並に道義的因子も亦此中に加へられて居る——を重視するが、さればとて、決して之が爲めに一國民の生産力に對する此等「觀念的」要素の參與を過大に評價するの錯誤に陥つて居ない。彼に取つては終始一貫して農業、工業及び商業の利益の調和といふことが、國民的國家の主要任務であると看做されて居た。斯くの如き調和が完全に達成せらるゝ程度に比例して、當該國家が占むる文化の段階は益々高いことになるのである。かの獨逸の學界に於いて支配する「歴史派」の某巨頭が、「吾人の科學に於いては、凡てのものが相對的である、而して獨り相對的なるものゝみは絕對である」と、宛然アインシュタインを髣髴せしむる口吻を洩らしたる程、同派に徹底したる相對性思想は、「歴史派」の精神的鼻祖たるリストにありて既に嚴密に遵守せられて居た。何となれば、彼によつて主張せらるゝ保護關稅政策も亦當該國民の或る一定の發展段階に對してのみ適用せらるべきものとせられて居るので、終局に至れば、彼れの國民的國家が前に述べた如き一個の世界聯合に歸趨するが如く、その國民的保護關稅制度も亦國際的自由貿易に結着するが故である。

以上吾人が本篇の紙幅が許さないであらうと見ゆる程、社會經濟學の創建者なる、シノモンチ、テ

ニーネン、及びリストの諸家に關して詳説することを敢てした理由は、蓋し今日の社會經濟學の基調的思想が、既に此等先人にあつて單にその跡を認め得るといふのみならず、亦時としては、それが一層源泉的であるだけに、現今幾多の博學なる、經濟學者に於けるよりも一層明瞭に現はれて居る。さうして此派の始祖等が説を述べることを愈々詳細なるに隨つて、吾人はその末流諸家に關して説くこと益々簡略なることを得るからである。

六、ロートベルツス

上に列擧したる社會經濟學者諸家にありて、社會的要素は常に伴なふ思想ではあつたが、然かし必しも究極の方向を決定する根本思想をなすものではなかつた。然るに一度ヨーハン・ロートベルツス（一八〇五—一八七五）に至ると、此要素は彼れの學説に於ける所謂「特出點」と稱することが出来る。而して、彼れの學説の特に社會的なる内容の特徴を明瞭に示すものは、その最も適當なる解説者ディーツェル（註七）が彼れの體系に與ふるに、吾人が之と異なる諸種の思想の爲めに保留する社會哲學の名を以てした一事である。吾人は今茲にロートベルツスに關して單に綜括的に説くに止め、曩にマルクス又は拉萨ールの場合になしたが如く、特に引き離して取扱ふことを見合はせるが、抑も、彼れの人物が吾人の興味を牽く原因は、亦次の如き考量に出づるものである。ロートベルツスは、社會主義が

國民的信念及び君主々義信念と妥協し得ること、猶ほ爾餘の凡ての思想と調和し得るが如くであるといふことの、生きたる證據である。それ故に社會主義といふものを、國際的民主々義の獨占物とするの愚なることは、凡ての社會主義者を目して必ず國民的若くは君主々義的思想を缺くものと一概に斷言するの愚なると相違ぶところが無い。かの唯物論が、哲學的に多くの場合無神論と結び附くを常とするも、然かも時としては教會的に嚴格なる正統派に於いても亦必しも絶無にあらざるが如く、かの唯物論の社會學的雙生兒たる社會主義は、好んで民主々義と手を携へるが、然かし原則に於いて貴族主義及び君主々義とも同様に臂を把つて相結び得るのである。例へばロートベルツスの如き、その徹底的社會主義に拘はらず、一生を通じて獨逸的國民的思想を君主的思想と同様に尊重したのであつた。但し彼は君主制を以て絶對的の價值と認めず、單に當面の状態に基づく實利の權宜要件に過ぎずとしたのであるが、併し此事は何等重大なる意義を有たない。如何となればホッブス以降今日に至るまで、絶對君主制の最も熱烈なる辯護者にして、同様に這般の功利的要素に決定的強音符を置いた者は枚擧に遑なきが故である。

個人主義的資本主義的經濟秩序に對する批判に於いて、ロートベルツスはマルクスと同様なる辛辣なる論理を提げて邁進した。唯だ、その語調に於いて稍々穩和謙抑の差があるに過ぎない。所謂「行爲勇敢態度溫和」なるものである。彼が、「賃銀鐵則」に代ふるに、「賃銀率低下の法則」を以てした

ことは多く顧みるを要しない。總生産物に對する労働者の分前は、不變に、若くは却つて減少する傾向なるに反し、地主及資本家の分前は比較的に常に増大するものとなす此法則に従つても、「富める者は愈々富み、貧しきものは益々貧し」といふ資本主義的經濟秩序に對する、かの痛切辛辣なる批難は、依然として儼存する。何となれば、労働の自然的賃銀は労働の生産に等しとするスミスの唱へた命題は、ロートベルツスにあつても存続するが故である。同様に、古典的經濟學者の面影を傳へその核心に於いてロツクに遡源するロートベルツスの價值論——凡ての財貨の中、生産に人間の労働を要するものゝみを經濟的財貨に數ふべしとする——も亦、彼一流の國民的社會主義とマルクス一流の國際的社會主義との間を隔つる墻壁たるよりは、寧ろ兩者を連繫するセメントたるものが遙に多い。更に、彼が、地代及び資本利潤を以て、専ら他人の労働成果の掠奪に外ならずと見做す點は、かの有名なる餘剩價值論と一脈相通するものがある。加之、凡ての労働量を労働時間に分解せんとするマルクス及びリカルドーに共通なる錯誤をすら、ロートベルツスは之を再びして居る。彼は労働時間を、時間に換算して精密に計量し得べしとするが、併し少くとも熟練労働と不熟練労働との差異は之を認識する、但だ惜しい哉、之に關して十分なる計測をなすことなく、單に漠然として兩者の間に差異あることを断定するに過ぎないものであることは謂ふ迄も無い。故に若し更に彼れの社會的理想も、畢竟一種の「土地及資本に於ける總合社會共產主義」に歸適すること附加する時、吾人はロートベルツ

ス流の國民的社會主義とマルクス流の國際的社會主義との相違は、その原則よりも寧ろ單にその程度に存するに過ぎないことを知るのである。即ちマルクス——彼れの「科學的社會主義」はロートベルツスのそれに比して年代が新しい——が、論理的に到底存続し難い資本主義的經濟秩序の崩壊は豫測し得る將來に近づき來つたとすに反し、ロートベルツスは這般の内面的滅裂過程に、尙ほ五百年の餘裕を認めて居るのである。更にマルクスが資本主義終焉の現出は到底避け難き歴史的運命にして、吾人の一指を加ふるを俟たずして自ら行はるべきものであると説いたに反し、國家を以て有機的全一體として、凡ての文化の最高意義となし、個人を以て全體目的の「從順なる吏僚」に過ぎずとなしたる國家社會主義者ロートベルツスは、徹底せる社會改造例へば、「國定賃銀率」「國定労働時間制」等によりてかの破滅を豫防し、平和なる途を辿つてなだらかに「總合社會共產主義」に推移することを得べしと信じた。又ラサール流の社會主義的煽動に對する彼の態度に關して、ロートベルツスは自ら次の如く表明して居る、「余はラサールの労働者煽動に參與することを拒絶しなければならなかつた。蓋し此煽動の二個の主要目的に關して、余とラサールとの間に諒解が成立しなかつたからである。ラサールは世人も周知するが如く、國家より金錢の補助を受け、生産組合の普遍的制度によりて労働階級の状態を改善せんと欲した。余は之に反して賃銀の原則は現状を維持し、但だ之を改良——勿論國家をして之に當らしむることはラサールと同様である——せんことを欲した。ラサールは、社會主義的黨派を同

時に一個の政治的黨派をなさんことを欲した、此目的の爲めに彼は普通選舉權を要求した。余は、社會主義的黨派は飽くまで經濟的黨派を以て終始すべきを主張した云々。彼は、貨銀商品の公共的貯藏制度の完成によつて「平和的なる發展道程を辿りつゝ、土地及資本財産を基礎とする現在の國家秩序——命數既に盡きたる國家秩序——を去りて、歴史的に之を繼ぐ一段高き國家秩序——勤勞、若くは純粹なる所得財産を根柢とし、且つ既に殆んど凡ての社會的關係に於いて出現せんとして腕きつゝある「一段高き國家秩序を、漸次に將來する」ことを期待した(註八)。

ロートベルツスの貨銀商品及び貯藏制度の理論は、當年のブルードンの勞働貨幣及交換銀行の説を想起せしむるものがあるが、彼は、その歴史哲學的基本前提に於いては、直接にはサン・シモン、間接にはモンテスキュー及アリストテレスと相接觸する。

即ち前に述べたるロートベルツスの祖述者デイツェルは、ロートベルツスを「有機的國家理念の社會主義者」と名づけたが、吾人は此の國家理念が既にサン・シモンに於いて熱心なる辯護者を見出したることに想到する。モンテスキューが名著「法律の精神」第五篇(第六章及第七章)に於いて所依の典據となしたるアリストテレスの「政治學」第五篇に、此教理の輪廓は既に明確に描出せられて居る。這般の歴史的關係に徴すれば、吾人が曩にアリストテレスに關する論述の結尾に於いて、スタギラの哲人の「政治學」を、現代の社會的思想が依然として幾多の銳利なる武器を仰ぎ得る無盡藏

の武庫であるとなした觀察の、謬らざるを知ることが出来る。

七、講壇社會主義者

ロートベルツスは過去に遡つては、當年既に、不平等が凡ての革命の源泉であることを識認したるアリストテレス及古代國家理念を想起せしむるが如く、彼は前途に對しては、國家社會黨の右翼と稱することを得べき、ゲルラッハ、グーゲナー、ブーヒェル、フリーバー乃至、ルードルフ・マイエル等の色彩を有する保守的社會主義者、並にその左翼と見ることが得べき、グーゲナー一流の風格を帯ぶる所謂「教壇社會主義者」の一群を暗示して居る。即ち第十九世紀の後半に於いて、社會主義は單に幾多の新聞記者の卓子と政治的演壇とのみならず、亦實に無数の教壇と講座とを席捲した。百年以前、世人が争つて、世界的、特に人道的たらんと努めたるが如く、今日にあつて「社會的」といふ合言葉は、あらゆる範圍に於いて謂はば政治的標語となつた。概念の性質よりいへば當然互に排斥すべき複合語、例へば「社會的保守的」とか、凡ての分派的色彩に於ける「基督教的社會的」とか、「社會的貴族的とか、「社會的自由的とか」、「社會的國民的」とかいふ如き複合語も今日は殆んど「社會的民主的」と謂ふのと同様に人口に膾炙することとなつた。此の光に照らして觀察すれば、往年の獨逸皇帝の言として世に喧傳する「吾人は悉く社會的ならんことを欲す」の一句も、特殊なる意義を帯び來るのである。

若し之を、フリードリッヒ大帝の口より發せしめたならば、彼は必ずやその環境よりして、「吾人は悉く人道的ならんことを欲す」の句を以て之に代へたであらう。

苟も「社會的」の旗幟が掲げらるゝや、政治的に四分五裂しつゝある吾人の時代は、融然として和衷協同するが如く見ゆるけれども、然かし一旦各自の社會主義の積極的プログラムを質すに及んでは、此の友愛に滿つる同胞等は、遽然として蜂窩を破るが如く亂離紛亂する。彼等は單に社會的正義の目的に於いてのみ一致するに過ぎない。而かも這個の正義の解釋に於いては、並に凡ての人々の眼前に唯だ不明瞭に彷彿としてゐる正義の理想へ、いかなる手段によつて到達すべきかに至つては、彼等は互に相距ること音に霄壤のみではない。

保守的社會主義者に取りては、當然、秋毫の前進なく唯だ退歩あるのみである。彼等は政治的中世への根本的歸還に於いて將來の社會の福祉を認める。封建制度、手工業組合、ギルド社會主義、同業組合、是等のものは、獨逸にあつてゲルラッハ一味、佛蘭西にあつてド・マン（一八四一—一九一四）の徒が、探つて以て幾千の創痕に血みごろなる時代の病弊を瘡やさんとする膏藥である。然かも彼等は政治的並に經濟的歴史の進化的特性を看過して居る。内面的に完全に往生を遂げたる諸般の制度施設は、その政治的社會的論理と歴史的存在性の老衰に累せられて憔悴し死滅し堙沒し了つたのである。然るに今日に至つて人爲的に之を復活せしめ、謂はゞ之に鍍金を施さんご欲するは、正に歴史の河流

を堰塞せんとするの愚に外ならない。而して假りに民衆の政治的教養と勢力とを無視して此の愚舉を敢てし得るものとしても、斯くして生ずる禍害は到底之を除去すること能はざる程甚大となるべきは疑を容れない。保守的社會主義にありてかの「弱者の後楯、乞丐兒の王及び民衆の父」たることを本分とすべき「社會的王国」の語は、全然異種の韻を有つた。(フリーバー、グーゲナー、及び恐らく最初にローレンツ・シュタイン等の諸家が是れである。)就中、ローレンツ・シュタインは今日再び人口に膾炙せらるゝに至つた。國家社會主義に關する彼れの思想の多くは、現今も尙ほ依然として當年の如く新鮮潑刺として吾人の興味を引くものがある。其説によれば、かの饒舌を事として畢竟單に頭腦混亂の痴者に過ぎざることを相互に立證する紛々たるかの弄辯者の群よりも、寧ろ社會主義の一個のナポレオン若くは政治の一個の歴山王の快刀一揮が、「社會問題」といふゴルディウスの結繩の解決に對して、遙に優るものあることを疑ふ者はないであらうといふのである。成程人類の文化的成果が、古來主として天才の靈感によつて成就せられたるを事實とするならば、時代が、社會的進化を促進し且つかの内在的目的論の常道を辿るよりも、遙に速かに社會主義の倫理的理想を實現に向はしむる社會的天才をその腹から生み出だすことなしとは、速斷することは出来ない。歴山王若くはシーザーが政治的世界を改造し、モーゼ、基督及びマホメットが宗教的世界を改造したるが如く、一旦、あらゆる扞格抗爭を驅除する救済の範式が發見せらるゝ時、此の喜ばしき福音を宣傳する社會的救世主が、凡ての文化

國民の大旱に雲霓を望むが如き翹望期待に應じて此世に示現すること、亦必しも絶無と稱することは出来ない。謂ふまでも無く當分の間此れは千年太平觀的の白日夢である、且つ又其の實現性は、過去に於いて幾多の民族と時代とが斯くの如き救世主出現の夢に囚はれたことによつて毫も増大するものでない。而かも彼等保守的社會主義者が、此の救世主出現の信仰に、時代の弊害によつて震撼せらるゝ社會的良心に對する鎮靜劑を求むることに對して、何人が之を責むる者があらうぞ。正眞の社會主義は決して保守的社會主義者の協力を無下に拒絶することを許されない、特に後者が、彼等の最も適切なる代辯者ルードルフ・マイエル(註九)に於いて見るが如き優秀なる社會改造意見を提げて協力を申込みたる場合に於いて、一層之を歓迎しなければならない。

若干の同業組合的反動者派が、吾人を導いて政治的中世に復歸せしめんと欲するが如く、かの「基督教的社會主義」は吾人を宗教的中世に抛げ返へさんとする者である。社會主義も亦、美術、哲學乃至文學と同様に独自の浪漫主義者と復古主義哲學者とを有つて居る。ルートヴィヒ・フォン・ハラール(一七六八—一八五四)が、翕然たる模倣者を見出したるが如きその適例である。社會主義の浪漫派は、其數より謂へば極めて重要な集團を形作つて居る。彼等のプログラムの基線はアダム・ミューラー(一七七九—一八二九)に遡源するものであるが、之を約言すれば、當時の彼等の組合機關紙「國家社會主義者」がその標語として掲げたる語句に盡きて居る。「社會問題は存在す。然かも之を解くは、民衆

生活の宗教的並に道德的因子と相結ぶ強力なる君主國によるの一途あるのみ。」故に若し此等浪漫派のなす所に委せんか、自然經濟、家長主義的家族制等、一言にして蔽へば中世的封建國家の全部を母することに歸着する。

「基督教的社會主義」の典型的人物は、獨逸新教側にあつては、保守的なるアドルフ・シュトッカーである。彼に對して、民族的社會主義者ナウマンが、青年社會主義的攻勢を採つたのは、恰も獨逸社會民主黨の初期の領袖、ベーベル、フォン・フォルマー、及びジンガーが、彼等の對蹠者を「獨立社會黨員」に見出したると類似の關係を有する。轉じてカトリック教側を見るに、獨逸にてはマインツの僧正フォン・ケッテラー(一八一—一八七七)佛蘭西にては大僧正ラヴィチエリ、英國にあつては大僧正マニングが、基督教的社會主義の運動を起こし、且つ彼等の聲望によつて著しく之を促進した。加ふるに歴代の法王が、基督教社會主義の運動に對して終始反覆聲援を吝まなかつたが爲め、此運動が相當に波紋を描いたことは毫も怪むに足らない。此の波紋の効果は今日尙ほ未だ明瞭に通觀することが出来ないが、併しその徴候的意義は決して等閑視を許さざるものがある。而して從來「社會問題」に對して教會方面から與へたる學問的深奥性は、「法話社會主義」の地理的傳播と反比例する。元來基督教社會主義の主要動機は、常に同一であつて、中世的基督教的愛是れである。而かも彼等は此の基督教的愛が既に第十八世紀の啓蒙哲學の眼にすら、餘りに狹隘と映じて「人道」によつて置き換へられたる

ことをおぞくも看過して居る。吾人の時代は社會性——現在の社會的努力を軌近の學術的ラテン語にて命名せる *Socialitas*——なる旗印の下に立つて居るものである。此の社會性は往時の愛が單に愛情と憐愍とよりして恩恵として吾人に與へんと欲したる所のものを、自己の當然の權利として要求する。換言すれば、今日の問題は既に施與慈善ではなく、労働者が自己の生産せる財貨に於いて相當なる割合の分前を占取することを、法律的に確定するに存する。古來、幾多の宗教的慣習が、年月を経るに隨ひ法律規則に凝成したるが如く、「社會問題」も亦一度且つ永久に宗教的處理の桎梏を脱し、今日に至つては獨り法律の範圍に於いてのみ決裁せらるゝことを得るのである。

「社會問題」が、立法の手段により、而して唯だ此方法によりてのみ、假令全般的解決に非ざるまでも少くともその個々の部局に於いて、稍々満足に近き解答を見出だし得べきことは、國民經濟學の「歴史派」が既に遺憾無く之を道破して居る。此派は、サヴィニー(一七七九—一八六一)の歴史的法律學派の傳統を經濟史的土壤に移し植ゑ、同時にコムト(一七八二—一八三七)が、社會學的問題の取扱に於いて試みたる精密科學的方法を踏襲し、最後にその經濟的理論の範式に於いて、從來の經濟學が慣例としたるよりも多く倫理的の價値尺度を探り入れたものである。講壇社會主義の忘れられたる一先驅者ラファウリーに「經濟學及公共倫理との關係に於ける商業史」の著ある所以である。又「歴史派」創建者の一人として一般に認めらるカール・クニース(一八二二—一八九八)は、一八八三年に出

したる「歴史的方法の立場よりの經濟學」の著書に於いて、經濟學に於ける倫理の重視を次の如き奇警なる語句によつて説明して居る。「從來幾多の國家科學的理論家に於いてその論理の脈搏を傳ふるマキアヴェリは、倫理を政治學より抛却した。新しき哲學(スピノーザ)は倫理を轉じて物理學となしたることによつて、倫理學其自身より、倫理を贅物として排除し去つた。曩にマキアヴェリが政治學に於いて敢てしたる所を、アダム・スミスは、經濟學に施した」云々。かの使ひ古るしたる自由放任主義を依然として墨守するマンチェスター派と自由貿易論者との社會經濟的樂天主義に對する這般の倫理的反動は、それが正當なる理由を有するものであるだけに、異常に深刻なる運動であつた。

あらゆる社會的辯論に對し、兇暴なる一撃を以てとゞめを刺さんと欲したるが如き觀ある「慘苦は、神慮の一般的計畫に於ける一個の避くべからざる條件である。最も正當なる根柢の上に立つ現在の社會は、之を改良すること能はず」と謂つたティエール(一七九七—一八七七)の言は、正しく主として功利的利己的假定に支持せらるゝ經濟學の精神を反映するものである。モンテスキューすら尙ほ且つ競争を以て、商品の正當なる價格に到達せしむる良藥となしたとすれば、スミス、リカルド、マック・カロック(一七八九—一八六四)セー(一七六七—一八三二)の徒が、競争の福祉に對して頌歌を捧げたことは多く怪しむに足りない。更に米國のケリー(一七九三—一八七九)の祖述者を以て自ら任ずる佛國人バステイア(一八〇一—一八五〇)は、自然の全智全能が、克く個人の正當なる利己心の

間に、極めて巧妙なる釣合を保たしめて誤らざる社會學的平衡を造り出だすものであるといふ思想の中に耽溺した。——是れ實に超越的樂天觀と、ライプニッツ一流の豫定調和とが、經濟的扮装に於いて現はるゝものである。

プリンス・スミス(一八〇九—一八七四)ミヒアエリス(一八二六—一八九〇)、ヴァルト(一八二二—一九〇〇)シュルツェ・デリツチ(一八〇八—一八八三)、オープンハイム(一八一九—一八八〇)の諸家は、獨逸に於いて放任主義の實際的擴張と確立とに對しては顯著なる貢献をなしたが、理論的研究に於ける寄與に至つては、その汗牛充棟の著書に比例して極めて貧弱である。獨逸の自由貿易論者は、その精力を彼等の立場の通俗的完成と意氣横溢せる辯難的主張とに傾注し盡くした。ユトピア社會主義に取りて、國家は、その不可思議なる魔力により、凡ての市民のあらゆる希望と欲求とを、それが如何に放漫なるものであらうとも、悉く満足せしむることを得べき「魔法の食卓」(聲に應じて山海の珍味を出現せしむる食卓、童話にあり——譯者)であつたとすれば、マンチェスター派——特にスベントナー(一八二〇—一九〇三)に至るまでの英國流のそれ——に取つて、國家は惡魔の權化、言ひ換へれば一個の社會的「敬遠すべき物」である。此兩極端の間に、必ずや仲介が時と共に試みられ道を拓かれなければならなかつた、さうして此歴史的大任が、當初は嘲笑的に、最後には名譽的に呼ばれた所謂「講壇社會主義者」(註一〇)に歸したのであつた。一八七二年、アイゼナハに創立せられたる「社會

政策協會」(Der Verein für Sozialpolitik)の眞實の中心人物たるシュモラー(一八三八—)自身が、同協會の主張と歴史的任务とを説明したる言句に徴すれば、吾人の上述の見解に誤りなきことが立證せられる。曰く、「吾人の態度を決定するものは、方法的には嚴正に實驗的なる研究の要求である。實際的には勞働問題の批判の變更である。政治的には果敢なる勞働者保護法や勞働保險や勞働組合認可や其他諸種の事項を伴ひたる全然面目を一新せる國家觀である。要は社會主義とマンチェスター主義との間に理性的なる中立地位を占めんとする企畫にあつた」云々(註一)彼れの「概論」(Grundriss)第九九頁にシュモラーは、社會主義が、社會的發展の動力的要素として、——科學と理性と道德とによつて修正されつゝ——歴史と社會進歩との發展に於いて、何人も否認し難く正當なる任務を有することを認めて居る。斯くてシュモラーの外、有名なる代表者として尙ほゾークナー(一八三五—一九一七)エルヴィン・ナッセ(一八二九—一八九〇)グスターフ・シェーンベルク(一八三九—一九〇八)等の諸家、並びに多少の差異はあれどもルーヨー・ブレンターノ(一八四四—)、フォン・フィリップ・ヴィツチ(一八五八—)ヴェー・ハースバッハ(一八四九—)アルベルト・シエッフレ(一八三一—一九〇三)グスターフ・コーン(一八四〇—)等の諸家を有する教壇社會主義は、古典的國民經濟等に對して假借無き批判を試みた。古典的國民經濟學に對する彼等の最も重要なる疑義は、ルーヨー・ブレンターノの次に要約せられる。曰く「古典的國民經濟學は職業、階級、國民性及文化程度のあらゆる特性から全く

離れた一個の人間を創造した……それは、毫も人種と宗教と時代との差別を識らない……此學派の巨頭等にとつて、凡ての人間は哲學者も荷擔ぎ人も生れ乍らにして同等の天稟を有するものである、又各人は同一程度に於いて富を欲する衝動に支配せらるゝものである。凡ての人が同等なるが故に、各人が自己の利益の何たるかを最も善く知つて居る。さればこそ、凡ての監督後見を拒絶せんとする要求が生ずるのである。何となれば、監督後見は最も厚顔無耻なる僭越の所業なるが故である」云々（註二二）。かく古典的國民經濟學の抽象的經濟人に對する完全にして意識的なる對立に於いて、實驗的に歴史の上に出現し且つ統計と經濟史とを連つて看出だされ得たる所の、經濟的個人が立つて居る。かの歴史に於いて、かく有效なることを證明せられた比較研究の方法は、現世紀に於いて特に生物學の方面に赫々の偉績を挙げたが、これはコムトが亦社會問題に對して頗る熱心に推薦したる歸納的方法と同様に、教壇社會主義者によつて遺憾無く採用せられた。此の方面に於いては、ローレンツ・シュタイン（一八一五—一八九〇）の基礎的著述が指針となつて居る。シュタインは、社會と國家との關係（血族國家、階級國家、市民的國家）を其の最も深き根底に於いて把握し、所謂「社會的王国」の主張に於いて一新形式を發見した。アルベルト・フォン・シェッフレは、經濟學をコムト及びスペンサーに一層近接せしめ、生物學に於いて效驗を示したる方法を、社會經濟學に於いても美果を結ばしめた。シェッフレが一八七四年に第一卷を發表したる時、シュモラーが之を以て「獨逸に於ける社會學の最初の

壯舉」と激賞したる「社會體の構造及び生命」は、既に、一個の「普遍的社會學」を提供するの意氣を示したものである。シェッフレは、職業團體の組織、彼れの所謂「最も主要なる社會機能の團結」に賛成する點に於いて「官權的及び民主的社會主義」の兩者の中庸を保つものである。教壇社會主義の這般の批判的並に方法的業績に加ふるに、更に是より先きローレンツ・フォン・シュタインが主張し、又ルードルフ・シュタムラーが其著「唯物史觀による經濟及法律」に於いて明快に説明し盡くしたるが如き、經濟と法律との接近融合、並に凡ての色彩と種類との教壇社會主義が一樣に主張したる倫理的要素の重視、而して最後に、國家概念に關する彼等の獨特なる定義、此等の諸項を總計するならば「教壇社會主義の社會經濟的體系」に於ける最も重要な諸特徴は、遺憾無く網羅せられたものと稱してよいのである。前に述べたるアドルフ・ヴァグナーが、重商主義的國家概念、及び「自由主義的個人主義的」國家概念と對立せしめて「社會的國家概念」の名を冠したる國家觀の特異なる點は、彼自身によつて實に次の如くに言ひ表はされた。曰く、「新しき社會的教義の基礎となるべき唯一の假定は、個々の人より進んで、出來得る限り多數の人に、更に能ふべくんば凡ての人に、特に經濟的及社會的に弱き人に、經濟的條件の満足を可能ならしめんが爲めには、所謂「經濟力の自由なる活動範圍」に對して國家が現在に幾倍する強力なる干涉を爲すことが絶対に必要であるといふことである。……併し乍ら此の新しき社會的教義が斯くの如き干涉を是認するは、單に或る個人若くは若干の個人の爲め

にする狭隘なる幸福主義に於いて然るに非ず、専ら全體の爲め、國民の爲め、更に進んで文化共同體の爲めにその幸福を庶幾するが故である」云々。

教壇社會主義の同志の中、或者はマルクス主義に對して批判の鋒鏘をあらはした。アドラー、ミューレル、ベルガー、アー・フォン・ヴェンクシュテルン（一八六二—）等が是れである。之れに對して或者は教壇社會主義の左翼を成して居る。例へばヘルクナー（一八六二—）ヴェルナー・ゾムバルト（一八六三—）カール・グリュンベルク（一八六一—）ジンガー等は之れに屬する。教壇社會主義の領袖諸家が、現在の經濟秩序に對する社會主義側の批判の「正當なる核心」を明白に承認することは終始かはらない。勿論個人的には、「國家社會主義者」——現今教壇社會主義者は好んで此の名稱を以て自ら呼んで居る——の主要代辯者は、嘗てグーグナー及シエッフレが、夫々の著書（「社會問題」（一八七二）と「社會主義真髓」）に於いて、その努力に對し公然同情を表明したる社會民主黨から、日を趁うに従つて益々乖離した。併しながら彼等は今日にいたるまで未だ會つて、理論的著述によつて彼等の立脚地を表明し、彼等と社會民主黨とを截然區別する分離線を適當なる明確さを以て劃出するの舉に出でたることがなかつた。かのシエッフレの綱領「現存の社會狀態に平かならず改造の必要を痛感するも、而かも吾人は毫も科學の轉覆と現狀全般の變革とを唱道する者に非ず。吾人は凡ての社會主義的實驗に對して抗議す。吾人は歴史の進歩は専ら數百年に互る勞作の結果なるを知る。吾人は

凡ての方向に就いて、現存の經濟的立法と現存の生産形式と、各種の社會的階級に於ける現存の教養並に心理的狀態とを、吾人の活動の出發點として承認す。」の語句も、依然として一層詳細なる科學的説明も、國家社會主義及び社會民主主義の間に於ける最終的境界決定とを以て、之を補足するの要がある。嘗てシエッフレが其著「社會民主主義の行き詰まり」に於いて火蓋を切り、之に對して、ハー・パールが「シエッフレ氏の不明」を以て酬いたるが如き小競合は、今日に至るまで依然として現はれざる獨逸國家社會主義の標準的著作の缺乏を補ふものとなすに足らない。

八、墺太利學派

マンチエスター派の理論家は既に死んだ、國家社會主義に對し威力相若く武器を掲げて直に彼が肺肝を衝くに足るが如き堂々たる論客は、マルクス及エンゲルスの死後社會民主主義に於いて復た之を見ることが出来ない。而かも教壇社會主義に對する好個の敵手は、却つて同じく教壇の上を生じた。教壇社會主義の理論的基礎と科學的方法に對し、カール・メンガー（一八四〇—一九二二）の麾下に屬する墺太利學派は其巨砲を擬した。ヒルファディングの著「金融資本」(Finanz Kapital) 出で、社會主義は初めて科學的に新機軸を示した。

カール・メンガーは、經濟學に於ける主として敘述的且つ歴史哲學的なる方法に對して峻烈なる批判

を試みた。メンガーと雖も、歴史と統計とが社會現象の歸納的觀察及び記述的描寫の貴重なる補助手段たることを認むるは謂ふまでも無い。而かも、メンガーが、實際的實驗的方法と命名したる此の方法が、直下に吾人に啓示し得るは、單に一群の重要な實驗的觀察であつて、決して法則ではない。此の實驗的方法に對して——メンガーは此方法が一方的に遵奉墨守せらるゝ場合に限りて其正當を否定するのである——彼は、同じく實驗的現象より出發し、而して此等の現象を嚴格に方法的分類をよすがとして漸次に普遍妥當的法則にまで引き揚ぐる所の嚴正科學的方法を併立せしめた。凡て經濟に於いては、獨り歴史と統計とが吾人に示す個人のみが理論的權利を有するものでは無い。統計と歴史とによつて吾人に示さるゝ個人的形相と同様に、經濟生活の機構の中に疑も無く儼存する所の一般的且つ典型的なるものが寧ろ前者に比して如上の權利を有すること遙に多い。是に於いてメンガー及び彼を宗とする奧太利學派、即ちポエム・バエルク（一八五一—）、ザックス（一八四五—）、ディーツェル（一八二九—一八八四）、ヴィザー等は、精密（演繹的）方法に依る經濟理論的探究の深化を要求した。彼等に隨へば、經濟現象の「並存」及「繼起」と共に、其の「結尾」即ち合理的なる經濟的目的決定の法則も亦計量の中に加ふべきものである。唯だ吾人は自由若くは平等といふが如き理想的要求、或は正義といふが如き目的觀念より出發せずして、因果關係より出發し、之より演繹的に結論を抽出しなければならぬといふのである。古來歸納と演繹との間に結んで解けざる確執は、斯くの

如くにして經濟理論の戰備に決戦を試みるに至つた。之に關して、ジグブルト（一八三〇—一九〇四）の「論理學」第二卷第二版の真面目なる研究は、依然として懸案たる如上の争點の決定に裨益する所少なくないであらう。何となれば、歸納演繹の問題——は根本に於いて經濟學の問題と謂はんよりは、寧ろ論理的方法論なるが故である。

ユリウス・ヴォルフ（一八六二—）の論難は、その銳鋒を第一には教壇社會主義の經濟政策、第二にはその經濟理論に對して擬するものである（註三）。彼れの著書の重點は、マルクス主義と教壇社會主義に反對して、曩にマルクスが没落を豫言したる中産階級が、資本主義的大經營を有する諸國にありて大戦以前に却つて増加したることを、吾人より見て頗る首肯し得るやうに證明したる點に存する。消費、貧民、乞食、犯罪及び収入の諸統計（特にプロシア及ザクセンに於ける）、貯蓄金庫預金相續統計、死亡統計等を根據として、ヴォルフは資本主義的經濟秩序の下に於ける社會的進歩を的確に指示した。彼れは此の立場を彼れの「社會科學雜誌」(Zeitschrift für Sozialwissenschaft. 一八九八年以降)に於いて強調した。中産階級の膨脹に關する主張に於いて彼は陣容を確保した。ベルンシュタインすら此點に於いて彼に賛同して居る。現今中産階級は益々堆積しつつある。

九、現代歐米諸國の指導的社會主義者

抑も或る黨派の知的業績の實質如何は、毫も黨員の數と相關せざるものゝ如き觀がある。社會民主黨の如きもその雲霞の大軍に拘はらず、頗る創造力に乏しいことを示して居る。當年獨逸に於いて尙ほ未だ社會民主黨の軍勢無く、唯だ將星のみがあつた時代には、ラサール、マルクス、エンゲルスの如き卓絶せる哲學的頭腦が輩出したものである。社會民主黨の知的生長は、決してその地理的傳播と正比例を保つて居ない。幾百萬の投票用紙——但し一個の人無し！——注目に値する頭腦は計量籌掃——但し一個の眞骨頭無し！——獨逸に於ける社會民主黨から眞摯なる科學的頭腦が、大戰の直前に至つて初めてヒルファードイニング及びローザ・ルクセンブルクの著作に於いて生長した。

今日觸目するものは、滔々としてアレキサンドリア主義に屬するものである。當年かの學派が、彼等の學問上の半神アリストテレスに對する關係、即ち彼れの思想の糟粕を嘗めて飽くことを知らず、彼れの言句の訓詁解釋に没頭して足らざるを恐るゝといふ有様が、正しく今日に於けるカール・マルクスの解説者等の態度である。社會民主主義者が爾餘一切の權威的信仰に對して敢然として戰を宣するに拘はらず、獨り彼等の社會的聖者に對しては、單に無條件的權威を認むるのみならず、亦その社會科學的機關誌「新時代」(Die Neue Zeit)に於いて、同一なる盲目的信仰を他人に對してまで強要しつ

ゝあるは、撞着も亦甚だしと謂はなければならない。恰も中世に於いて、哲學的迷妄者——と謂ふのは殆ど神聖視せられたる異教徒アリストテレスの學說に對して反旗を翻すことが、直に、迷妄と目せられたのであるが——を罰すべき一種獨特の宗教裁判所が存在したる如く、今日「新時代」に於いては苟も「マルクスの稜威を冒瀆するの罪」に該當すと認めらるゝ者は、何人を論せず、忽ち「秘密裁判」に附せらるゝのである。エドゥアルト・ベルンシュタインすら、嘗て社會的聖者マルクスに對する邪說を公言して憚らなかつた時、此厄を免るゝことが出来なかつた。併し乍らベルンシュタイン及び彼によつて生命を與へられたる「社會主義月報」(Das Sozialistische Monatsheft)の周圍には、俊秀蠟集し——例へば、イグナツ・アウエル、ヴォルフガング・ハイネ、コンラート・シュミット、マックス・シッペル、リヒャルト・カルヴェル、パウル・カムプフマイヤー、アドルフ・フォン・エルム、エドゥアルト・ダーヴィット等の如し——爲めに、曩にエッフェルツ、ラポポルト若くはシトロフスキー等に處したる如くベルンシュタインを默殺すること能はざるに至り、随つて彼を無造作に片着け去ることは、今となりて到底覺束無くなつた。若しマルクス自身にして、果して全社會に對する革命兒であるとするならば、マルクスに對して革命を起すことが、何故にベルンシュタインの犯罪となるのであらうか？

「婦人」に關するペーベル(一八四〇—一九一三)の研究に徴すれば、ペーベル自身は、社會主義の建設に於いて、決してマルクスのそれと別個の境地を開拓し、若くは之れが進境を示したりと誇稱す

るの権利を有しない。現在に於ける社會主義の運動に關しては、吾人が過去の時期に於ける社會運動を説くこと尠なかつたと同様に茲に詳述することの必要を見ない。唯だ形相を完全ならしめんが爲めに此運動の重立てる人名を列擧するに止めて置く。

獨逸に於いては、ペーベルの外に卓越せる黨略家アウエル及ジンガーが、社會民主黨の公然たる指導者であつた、一方「國家社會主義」に秋波を送るフォン・フォルマーは、暗に社會民主黨の右翼として別派を樹てんと欲するの氣配を示した。但し社會主義者が、左右の兩翼に分岐せんとする趨勢は爾來凡ての國に於いて現はれた。然るに一九二二年九月に至つて、元來同胞たる此兩派は再び合同したのである。

奧太利にあつてはドクトル・アドラー、和蘭にあつては最近まで、ドメラ・ニューウエンハイスが、社會民主黨運動の先頭に立つて居た。佛蘭西の社會主義者は、博學なる社會主義歴史家にして品格高邁なる獨學の科學者ベノア・マロンを精神的首領と仰いだ。此國の社會主義者は獨逸のそれよりも一層小黨割據の状態を現はして居る。非業の死を遂げたラファルグ（一八四二—一九一一）（マルクスの女婿）及びジュール・ゲースドが正統派マルクス主義を代表して、小農を社會主義に歸服せしめんと努力した間に、ヴェイラン、アルマース、及ブルッスの諸家は、各々一方の將として彼等自身が屬する夫れ々の職業階級から糾合したる同志の群を麾下に集めた。佛國議會にあつては大戦勃發に至るまで、ジョー

レスが最も顯著なる社會主義的人物であつた。尙ほ、佛蘭西の社會主義は、ミルランを内閣に於ける最初の代表者とした。ミルランは單に社會主義の閣員が、必しも國家の基礎を危くする者でないことのみならず、亦佛國現在の政治形式がミルランの如き色彩ある「社會主義者」を國家の先頭に据え得ることを立證した。ミルランが、ブリアンと等しく、方向を右に轉じたることは、單に大戦が凡ての人を精神的に變形せしめたることを證するに過ぎない。現在に於ける佛國社會主義の領袖は、マーセル・サムバ及ドニ・カシエンである。

伊太利に於いて、社會主義は下層の幾百萬人よりも、上層の少數知識階級に於いて比較的急激に浸透した。伊太利労働者の政治的教養は理性よりも感情の言語を容易に解する、是れ、ファシストと社會主義者とが正面衝突をなした所以である。政策は往々街頭に於いて造り出だされる、併し乍ら、夫れだけ伊太利の社會主義は、正當なる自信を以て此國の學界に於ける自己の著しき成功を誇ることが出来る。伊太利の土地に於ける社會主義の特殊なる勝利の例としては、エンリコ・フェリ及びチェザーレ・ロムプロゾーの兩教授の如き名聲ある碩學が社會主義の軍門に馳せ參じたることを特筆すれば、一斑を以て全豹を知るに足るであらう。學究的社會主義の精神的指導者としてはフェリの外尙ほコラチャニ及びグラーフの兩氏を數へ得るが、獨逸の學界に於いても其著書に共鳴する者頗る多きアントニオ・ラブリオーラ（一一九〇—四）も亦その一人であつた。彼れの死後、科學的社會主義の指揮はフェリの

掌裡に歸した。

瑞西は、其國情が極めて好都合なる民主的培養土壤と稱すべきものあるに拘はらず、社會主義の成功は比較的に小さかつた。此状態は、社會民主主義の極端に趨れる要求に對して、世界に於ける最も進歩せる民主主義が、最も徹底的に之を拒絶するものであることを示すものと考へ得る。瑞西に於いて社會主義が、眞實の民衆に於けるよりも學界及び高級官吏階級に於いて、より深く其根を固めたことは、苟も觀察眼を有する者の何人も首肯する所である。瑞西の立法に於いて明瞭に現はれたるが如き社會改造の特徴は、政治的に過熱せられたる空想の放埒に對する最も有效なる抑制手段であること、日を追ふに隨つて明證した。凡そ世に社會主義の極端なる要請を免疫的ならしむべき種痘材料ありとすれば、それは「社會改良」を措いて、他に存しない。

主として工業國であり、一九二二年のゲヌア會議に於いても依然として純粹に資本主義を根も葉も擧げて徹底的に代表したる白耳義に於いてすら、社會主義の勢力は、世人が此國に支配しつゝある經濟的大資本主義の影響から割り出して豫想し得る程の盛況に達するには、尙ほ未だ餘程の距離があつた。此國の社會運動は頗る危険なる性質を帶ぶるが如き觀を呈するに拘はらず、常に比較的狭き範圍に限られて居る。卓越せる煽動者ヴァルダースの死後、白耳義に於ける社會主義的牛耳は、アンゼール（一八五六—）、ヴァンデルヴェルデ（一八四〇—）、及び上院議員ラフォンテーヌに移つた。

北米合衆國は、百餘年以來社會主義的實驗の試作地となつた。米國の土地に於て人爲的に企てられたる社會主義的の社會及國家形成は、其數枚舉に遑がない。吾人は、殆んどあらゆる種類の社會主義的計畫及實驗の失敗に關する興味ある事實を詳細に網羅する文献を指示し得る。此の夥しき文献は、消極的と積極的との兩方向に於いて吾人に教訓を與ふる。米國に於ける社會的實驗に關する歴史的文獻の消極的結果を約言すれば、今日に至るまでの實驗に基づく經驗によれば、人爲的に計畫せられたる社會的新建設は一般に國家の人爲的建設と同様に、其結果が面白くないといふことに歸着する。之に反して此等文献が積極的に吾人に教ふることは、此等の實驗の常に失敗に歸着することが、併し乍ら必しも社會的改造計畫に對する否定論の十分なる根據となるものではないといふことである。何となれば、往年バラグアイに於けるイエズイト教徒國家の没落以來、斯くの如き人工的新建設が、結局常に悲惨なる最後を遂ぐるに過ぎざることを無数の實例によつて明白に證明し得たる、その同じ米國に於いて、エドワード・ベラミー（一八五〇—一八九八）及びヘンリー・デューヂ（一八三九—一九九七）並に此等と伍する倫理的社會主義者ローレンス・グランランド（一八四八—一八九九）の諸家の如く、世界各國の有識階級に社會主義的思想を傳播流布したる功績に於いては、恐らく彼等と比較し得ざる程深い併し乍ら效果を示すこと鮮ない爾餘の凡ての社會主義論客を一括したるよりも、遙に大なるものを有する人物を生じたるが故である。例へばデューヂ一流の激越にして而かも稀薄なる、而してその要求に

於いて稍々緩和せられたる社會主義は、鋼鐵の如く冷硬に、比類無く峻烈なる、而してその推論並に要求に於いて毫末の假借する所を知らざるマルクスに比して、遙に俚耳に入り易い。米國に於ける社會運動は、「勞働騎士組合」が、その模範とする英國の「勞働組合」によつて現實に既に生み出だされたる如き一種の勞働者貴族主義を形作ることによつて、下の方に向つて、即ちルンペン・プロレタリアの方に向に進むことを堰塞せられて居る。大戰以降の米國に於ける社會學並に社會運動の概観は、余の主宰する「體系的哲學資料」一九二二年七月號所載、エイチ・ビー・パーネス教授の論文に盡くされて居る。(尙ほ同處には之に關する文献を網羅して居る)。第四階級は、彼より離脱せんとする第五階級に對抗する城砦として、他の凡ての階級を一括したるものよりも遙に堅牢である。米國の勞働組合の總帥サミュエル・ゴムバース(一八五〇—一九二四)は、英國の勞働黨や、レギーエンの死去するまで大陸に於いて牛耳を採つて居た獨逸勞働組合に比して、遙に右傾して居る。獨逸一國を以てしても凡ての勞働組合に屬する者は、總計一千萬人以上に達する。

ピレネー半島及びスカンディナヴィア半島に於ける勞働運動は多く注目し値するもの無きが故に之を省略する、こゝに吾人の興味を牽くものは英國である。竊に一八三六年乃至一八三九年、及び一八四〇年乃至一八四八年の兩時期に行はれたる基督教徒運動以來、社會運動は未だ嘗て一日も終熄することになつた。英國は又基督教徒的社會主義の發祥地である。カーライル(一七九五—一八八一)其人

も其の魅力ある文章のあらゆる光彩と、道義的感情の十分なる熱を以て、或種の社會主義的結論の倫理的肯定の爲めに辯を吝まなかつた。デイリスレリは、既にカーライルの影響を受け、其著「英國憲法辯是」(一八三五)に於いて、トリイ黨と勞働者との間に於ける握手の途を拓かんとした。最後にジェームス・ミル(一七七三—一八三六)は——恐らくトーマス・スペンサーに追隨して——土地國有化の問題に點火し、而して此の大なる父の、より大なる兒ジョン・スチュアート・ミル(一八〇六—一八七三)は此火を炎々たる烈焰と化せしめた。彼は一八七〇年、既に土地國有案の輪廓を適剽に描出した。ミルの創案による「土地所有改良會社」規則第四條に、「國家は、土地の餘剩價值増加を査定し得る限り、其全部若くは少くとも其の大部分を、徵税によりて返還せしむべし。蓋し此餘剩價值は、土地所有者が何等の勞を費すことなく、唯だ人口と富との膨脹の結果自然に生ずるものなるが故也。但し土地所有者は、此原則が法律となる當時に一般に認めらるゝ市價を以つて其の所有地を國家に委讓するの權利を留保す」(註二四)云々とある。亦ハーバート・スペンサーも、一八五〇年に出だした「社會靜學」に於いて、土地私有權の廢止を主張したる程、土地所有制度改良に接近した。但し後年のスペンサー即ち、「個人對國家」の著者としてのスペンサーは、當年の社會主義的傾向から全然撤退した。英國に於けるヘンリー・デューヂの出現は、(彼は一八八一年十月、アイリツシユ・ウォールド)誌の通信員として、渡英した)當時稍々下火に向つて居た土地所有制改革問題を再燃せしめ、更にアルフレッド・

ラッセル・ウォレスの如き一個の指導者として申分無き人物が、土地所有制改良に賛成したことは、英國に於ける此運動に強大なる氣勢を添へた。最近ロイド・ジョージが、一九二二年のゲヌア會議に於いて、勞農露國の土地國有の觀念に對し、佛蘭西及白耳義の超資本主義に比して遙に多くの諒解を示したるは、畢竟、彼が當年の一フェービアン協會員であり、隨つて當初より土地の國有に對し諒解を示有つて居たからである。獨逸に於てはゴツセン、シユタム、ザームター、シトエベル、特にヘルツカ及びミヒアエル・フリニールシャイム（ガッゲナウ鐵工場の前所有者）が此の運動の道を平坦ならしめた。フリニールシャイムが、ヘンリー・ジョージから出發したものであることは彼れ自身之を明言して居る（註一五）。彼が一八八八年に創立したる「土地所有改良同盟」は、燎原の火の如く其勢を擴張し、驚くべき多數の同志を糾合し、今日に至つてはアドルフ・ダマシケを首領とする此運動は、其基礎をなす理論が科學的に薄弱なるに拘はらず、尙ほ且つ有識階級の社會主義化の屢々たる増加の徵候として、十分なる重視に値するものとなり了はせた。

今や社會倫理的國體及施設の一群は、文明世界の到る處に於いて社會の社會主義化を促進しつゝある。フェリックス・アドラー、ザルター及び米人スタントン・コイトを主唱者とする「倫理運動」は、特に英國に於いて異常に蔓延した。「フェビアン社會主義論叢」を發行して多大なる注目を集め、又ロイド・ジョージがその青年時代に遊説家として之に屬したことを以て有名なる「フェービアン協會」、倫敦

東區に於ける「トインビー會館」、オクスフォード大學より發して既に、スカンディナヴィア半島、白耳義、埃太利、瑞西及プロシアの諸國に普及し來つた「大學擴張運動」等は、悉く凡ての有識者世界を包括する深刻なる社會的倫理化過程の徵表に外ならない。更に此等のものに加ふるに、かのフリードリッヒ・イヨーツル、ハラルト・ヘフディング及びフェルディナント・トエニースの如く、哲學界の鏘々たる巨星を會員とする「獨逸倫理的文化協會」（Die Deutsche Gesellschaft für Ethische Kultur）が隆盛に向ひつゝある事實を以てすれば、現代の具眼者は、英國に於いて洪波を捲き起こしつゝある社會運動が、やがて文明界の全面に瀰漫するであらうとの推定を拒むことは出來ない。獨逸に於いてフォン・エギデイを主動者とする運動は、英米に於ける運動の餘韻を示すものである。英國に於いては、獨りミル及びグリーンの如き哲學者のみならず、ウォレス及ハクスレー等の博物學者、キッド、グラント・アレン等の文人、ウィリアム・モリス、ラスキン等の審美的社會主義者が、相率ゐて社會運動の隊伍に加はつた。此國に於いては、ニューマン、ヘッドラム、サイムス教授等を首腦とする基督教的社會主義も亦、大陸に於ける孰れの國のそれよりも、偏見なきが故に隨つて亦同情し易き形式を採つた。英國の社會民主主義も、思想周密なる幾多の體系建設者を有するだけに、大陸諸國に於ける同胞に比すれば一段と高き科學的水平線に立つて居る、英國議會に於ける著名なる半社會主義的典型故ブラッドラフ故バーンスと相並んで、ハインドマン、ベルフォート・バクスの如き緻密なる頭腦が、英國議會に在つ

- (註三) Wilhelm Roscher "Geschichte der Nationalökonomie in Deutschland" 八八一頁。
- (註四) 同前八九五頁及 Charles Andler "Les origines du Socialisme d'Etat en Allemagne" (1897) 二〇三頁以下、特に三三〇頁以下。
- (註五) 前掲 Roscher の著書九七一頁、及、前掲 Charles Andler 一六一頁以下の「リストの歴史的方法」に関する所説参照。
- (註六) 前掲 Ingram の著書三六二頁参照。
- (註七) Dietzel "Karl Rodbertus, Darstellung seines Lebens und seiner Lehre"
- (註八) Rudolf Meyer "Emanzipationskampf des vierten Standes" 第二版七一頁参照。
- (註九) Rudolf Meyer の前掲著書三六八—四三〇頁。
- (註一〇) 「教壇社會主義」の譯名は、最初にオットー・フォン・ノイヤーが、「Nationalzeitung」紙一八七一年十二月十七日に於いて、「ロシーヤ、シエボラー、シエーンベルクに冠せしめたものである。其後彼は「教壇社會主義」の標題を有する論議バムフレットを著し、之に對して Adolf Wagner は「公開狀」と稱する小冊子を以て酬いた。
- (註一一) Schmoller 編 "Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft" 一八九五年度第四號。
- (註一二) Brentano "Die Klassische Nationalökonomie" (1888) 三頁以下及、同氏著 "Ueber die Ursachen der heutigen sozialen Not" (1889) 参照。
- (註一三) Julius Wolf "System der Sozialpolitik" 第一卷。"Sozialismus und Kapitalistische Gesellschaftsordnung" (1892) 参照。
- (註一四) Mill "Principles of Political Economy" 第二卷二頁、第五節。Eise Wentscher "Empirismus" (1922) 九頁以下。
- (註一五) Furscheim の最初の著書 "Auf friedlichem Wege" (1884) は、尙ほ密接に George の説に追隨して居る。
- (註一六) Bax "The Religion of Socialism" "The Ethics of Socialism" 参照。

第二十一章 ルネサンスより現今に至る社會哲

學の歴史

一、人間の發見

凡そ、社會的有機組織に於ける心理的、審美的乃至倫理的因子の検討と分類の整頓とを任務とする獨立の學としての、社會哲學について云爲し得るのは、嚴密に謂へばオーギュスト・コムトの出現以來のことである。人間は哲學的研究の對象として、自己の性情に最も近きものを最も後廻はしにすることいふ特徴を有することが頻々として指摘せられたるが如く、又初期の哲學者が質朴なる自大心を以て、冒頭直に究極的な形而上的問題に手を染め、而して其後に至つて漸く認識論的省察に停止し、自我其もの謙虛なる分析に抑遜したるが如く、古來哲學者は、個人及社會の機能を熟考すべき傾向と餘裕とを見出だす前に、先づ凡ての機能の總計たる「國家」を分析するに慘憺たる苦心を費したものである。哲學的國法と法律哲學とは時期に於いて社會學に先んずるを常とする。随つて、上代に於いて一般に社會的問題が發現して簡單に觸れられた限り、其都度國家哲學と法律哲學とが、今日の社會學の——社會學は當時尙ほ未だ彼等の胎中より生れ出でず、且つ今日に至るも依然として成人の域

に達して居ない——仕事を負擔したのである。

人間の社會、その起原及變遷、時々の組成及意識的改造は、個人が單に自己の認識機能の穿鑿に退嬰するのみを以て満足せず、進んで勇敢に自己の社會的機能を熟思し初めたる時、初めて一個の問題たるに十分なる資格を有することが出来たのである。又批判の精神が次第に普及して民衆の廣汎なる諸階級を包括するに及んで、初めて社會哲學成立に取つての培養土壤が與へられた。歐洲に於いて、獨り政治的並に審美的問題に其聲を響かしむるのみならず、又社會の組成に關して重大なる決定力を有する判断を下す「輿論」といふものが出来た時から、獨立の學としての社會哲學成立の機縁が此世に存するに至つたのである。

ルネサンスが既に「人間」を發見したことは疑を容れない。唯だ憾むらくは非凡人、「圓滿無缺の人間」に止まつた。又歴代法王及び皇帝が相競つて、侯伯及び民衆の歡心を求めたることや、伊太利共和都市の隆昌や、ハンザ同盟の創立等が、次第に一種の輿論を造り出したことは事實である。併し乍ら、此の輿論は、當初單に「圓滿無缺の個人」の例外的特質を帶ぶるに過ぎなかつた。要するに問題となるものは、所謂「選ばれたる者」であつた。ルネサンスの歐洲に於ける「圓滿無缺」なる人間の總計は、精々二桁の數を出でず、又當時の歐洲に於いて「輿論」を代表した人の數は多くとも三桁の數を超えなかつた。唯だ、爾來幾百年に亙る不斷の政治的並に經濟的拮据經營が、ルネサンスの此の成果

を徹底的に民主化することを得たのである。今日では獨り所謂「上層の一萬人」のみならず、亦「下層の幾百萬人」の間にも銳利なる批判的眼光を有することは、迂濶なる學者等の夢想に及ばざる程夥しい。曩に宗教改革が中世紀の固陋なる思想を懐く人々の都會的束縛を、又英國及佛國の革命が彼等の政治的拘束を打破するや否や、近代的人の自己發展に對する廣濶無碍の活動範圍が造り出だされた。ルネサンスが非凡人を先頭に押し立てたとすれば、佛國革命以來は、平均人が自己の姿を明かに「發見」したのである。一生の針路を、専ら古來の因習と國家及教會の制度とによりて盲目的に規劃し、此針路及其規矩の當否と適不適とに關して毫も熟思することなく、又此等の制度に對して何等の批判を試みることを知らなかつた中世紀の平均人は、固より社會哲學の形成に於いて寸毫の機縁となることは出来なかつた。社會的有機體が、個人に對する法律的、國家的乃至教會的束縛をあるがままに爲し置きて尙ほ生長發育を續けた間、刺戟的問題の起り様がなかつた。然るに一朝平均人が、自己の社會的因子なることを發見したる時、教會の至上命令權がその威望及び之と共に其の拘束力を失墜し初めたる時、更に進んで法律及政策に於ける國家の諸制度が、平均人の側より辛辣なる批判を蒙るの已むを得ざるに至つた時、茲に初めて、一個の社會哲學の起生を必然的に促がす機縁が現出したのである。

二、科學の權威

社會的有機體に於ける遠心力即ち個人の非社交的にして反文化的なる傾向は、その頃まで、死後に至るまでも延長せらるゝ、教會的罰則（破門又は墮地獄の罰）、並に、平均人にはその意味と成立とに對して決定權は愚か是非の云爲すら許されなかつた國法によつて、容易に制御抑止せられて居た。而して此等の至上命令が存続したる限り、如何にして思考力を有する人類の至寶を危くすることなしに社會を組織すべきかの問題は、到底眞面目に存在することが出来なかつた。一方に於いては教會は、他方に於いては國家は、民衆によつて忍従せられ暗黙の中には認せらるゝ此の社會狀態に對する差出がましき批評者に、拷問痛め吟味に至るまでのあらゆる處刑方法によりて復仇した。この復仇は思想的には毫も満足を與へざる丈けに當人の身に取つては一層苦痛なるものであつた。併し乍ら選舉權普及の時代に至れば、此種の至上命令は、次第に其威力を失ひ教會の處罰の如きは紙上の空文に過ぎざるに至り、法律は社會に對して最早や君主意志の發動として專制的に強要せられず、却つて此の社會の中より、自由にして普遍的なる選舉の結果推薦せられたる代表者によつて作成せられる。是に於いて社會の形相は根本的に一變した。科學的至上命令が教會的のそれに代つて、平均人を支配するに至つた。破門狀の地位は保健的的命令（傳染病豫防規則、種痘法其他の衛生的豫防規程）の爲めに奪はれ

た。教會的慈善は現今の進歩せる貧民救恤法、勞働者保護法、強制的傷害並に養老保險、疾病並に死亡金庫、失業保險等の制度と代つた。斯くの如くにして人類共同生活の全線に亙つて、科學的至上命令が、人間社會の存續並にその調和の増進に取つて缺くべからざる手綱人間性情の反社會的衝動を抑制せんが爲めに次第に強く引きしほるものなること、及び此等の至上命令が嘗て社會を支配せる諸種の權力（教會及國家）の軌道より次第に脱却するの勢を示すものなることが立證せられる。科學をして羅馬の陣門に降らしめんと欲したるブリューンチェール（一八四九—一九〇六）の病的なる悲觀の發作も、以て、歐羅巴の社會的立法がその衝動と準繩とを専ら科學に仰いで、決して教會と國家とに頼らざる鐵の如き事實を抹殺し去るに足らない。當該専門知識の最も有能なる代表者が一致して要求する所のものが、文明國にあつてやがて法律規則に凝成する。科學の地位が全然一變したる影響を受けて、教會と國家との分離といふ傳統的問題が、國家と「組織化せられたる知識」の象徴としての「一般科學」との間に於ける相互關係に變ずるといふことは、曩にコイゲン（註一）が逸早く指示力説したるが如くである。而して科學的共和國其自身の内部に在つては、既にカントが一七九八年に明言したるが如く「専門間の争」が新に目を醒ます。現代の傾向は、凡そ一國家にありて何を以て適法と認むべきかの決定標準が、最早往年の如く在俗若くは教會的君主の恣意（*Sic volo*—余之を欲す）に非ずして、科學的に理由を具備したる専門家の意見であるといふ風に成り行きつゝあることは明白で

ある。科學に與へらるゝ任務は、科學自身が生長發達すると同程度に次第に増加する。科學は、その眼を益々自然より人間に轉還する。第十九世紀に於ける記述的自然科學によつて長足の進歩を示したる自然現象研究から、科學がその目標を次第に人間の方に導き初めたることは、紛れもなき事實である。今や人間は自然科學的方法を以て取扱はるべき問題（比較人種學、比較言語學、比較傳説、法律、風俗史、人類學、實驗心理學、社會學）となつた。而して科學的洞察が、その實驗方法を單に死物たる對象に局限して能事畢ると爲すことなく、更に進んで人間として最も興味ある目的物、即ち「人間」にまで押し及ぼすまでに發達したる時、茲に始めて、獨立せる知識部門としての社會學が出現することを得たのである。

是に至つて社會學の對象は、苟も思考する頭腦にとつて決して永久に回避すること能はざる眞劍の問題となる。即ち、政治的に獨立となり且つ社會的に省察する個人の共同生活と共同活動とは、如何に調整せらるべきか、又從來社會的調和化の役目を勤め了した教會と國家とが、日を逐うて其權威を失ひつゝあり隨つて如上の役目に對して其力足らざることを明らかにした今日、如何にして社會的有機體に於ける牢乎として抜くべからざる遠心力——決して之を全然絶滅すること能はざる反社會的衝動及傾向——を社會學的に併存調和せしむべきかの問題、是れである。故に、社會學の任務は、畢竟、思考力ある人類の中、從來認められた國家的若くは社會的至上命令に、論理上、服従する能は

ざるに至つた部分の爲めに、科學的至上命令を創造することに歸着する。而して人類の此部分が益々増大するに従つて、社會學の側よりする如上の科學的至上命令の制定は、愈々緊切にして拒否すべからざるに至るのである。

斯の如く、超自然主義的動機より純粹科學的動機への變化過程を將來せんが爲めには、凡ての民族の優秀なる頭腦が幾世紀に亙る精神的勞作を傾倒するを要すること勿論である。詩と科學と藝術と技術とが數百年來その最も卓越せる代表者に於いて働きつゝあることは、教養ある人類を、人間運命及び社會運命の直接にして超感覺的なる支配者といふ催眠術的暗示から覺醒せしめ、人間は何よりも先づ自己を恃むの外なく、隨つて自己運命の指導を自己の掌中に確保すべき者であるとの思想に親しましむることに存する。然して、吾人が自己及社會の運命の支配者であり、隨つて亦、超感覺的威力に顧慮することなしに、専ら科學上正當なりと認めらるゝ原則に従つて、吾人の社會的施設を形成することを得る時、茲に初めて哲學に取つて眞に所謂「社會問題」が發現する。勿論凡ての問題は、之に對する解答が可能なる場合に、初めてその論理的價値と意義とを有する。若し其間に何等かの超絶的動機が介在して働くなれば、萬人一様に認むる確答はそこに存在することが出来なくなる。而して最近三世紀間の自然法學派並に法律及國家哲學が、曩に中世紀に於いて再び荒蕪に歸したる社會哲學的思想の土壤を耕し、不屈不撓の勞力を竭くして教養ある人類の爲めに「社會問題」の科學的取扱の準備をなした

ことは、固より之を拒むことが出来ないが、然しこの「社會問題」を、哲學的に把握し、色褪せたる形而上學的及び神學的至上命令に代はるべき、科學的至上命令の創造の仕事を眞面目に開始するの能力を有したのは、かの佛蘭西實證哲學の創建者オーギュスト・コムト其人を以て嚆矢としなければならぬ。而して若し吾人が、ルネサンス以降コムトに至るまでの各種の自然法學派及國家哲學的體系に於いて點々散見する社會學的思想を以て、單に科學としての社會學の形成に對する準備階梯に過ぎずと看做さなければならぬとするならば、吾人が此等過去の階梯を出来る限り簡潔に叙述し、その代りにコムト及其後繼者に於いてそれだけ長く低回せんと欲することは、吾人の説明を經濟的ならしむるに道理あるものとして諒せらるゝであらう。而して、獨逸の文獻がコムト以前の國家哲學及法律哲學に就いては頗る豊富であり、コムト以後の社會哲學に關しては頗る貧弱であるだけに、吾人の如上の取扱方は、一層適切なるものと認められるのである。

三、國家及び社會の起原に關する諸説

當年一方に於いてストア學派、他方に於いてエピクロス及びカルネアデスの間に活潑に論戰せられたる問題、即ち社會及び國家は果して超自然的創造物なりや、將又、自然的發展の構成物なりやは、第十七世紀及第十八世紀の國家及び法律哲學を兩陣營に對峙せしめた。既にルネサンス時代に、マキ

アヴェリがエピクロス派と共に、國家を以て純粹に自然主義的に人間の利益と要求との生産物と爲し、ボーダンは之に反してストア派と共に超自然主義的に、人間性情及び神權の流出と見做さんことを欲したるが如く、此の對照は延いて第十八世紀に及び、更に第十九世紀の思想的法律哲學にありてすら、尙ほその餘勢を示したること少なくなかつた。或者が國家及び社會を、その最後の根柢に於いて専ら神意にのみ遡源せしむることを斷定し得た間に、或者にありては、成人の域に達した理性が擡頭して自己の權利を主張する。第十六世紀の末葉以來、既に彼等の思想と生活とを理性の自治權の上に建設したる學者識者の範圍は、頗る廣汎であつた（註二）。

然し乍ら單に國家及び法律の性質に關して然るのみならず、亦人間其もの性質に就いても、自然法學派は、その色彩如何を問はず、大體に於いて孰れも皆當年ストア學派とエピクロス派との間に結んで解けず、而して古代が竟に明確なる判決を下すこと能はざりし這般の社會心理的論争を反覆するに過ぎない。或者はストア派と共に、先天的に社會的なる個體を人間の中に認め、その愛他的傾向は、唯だ之を正しき軌道に導くを以て足れりとする、例へば、ボーダン、フーゴー・グロティウス（一五八三—一六四五）、シャフツベリ（一八〇一—一八八五）、ハッチェスン（一六九四—一七四六）の如き是れである。或者はエピクロスに倣つて、社交性本能を否定し、寧ろ個人をその本來の反社會的方面より觀察し、而して國家の成立を妥協若くは社會契約に基くとなして居る。例へばホッブス（一五八八—一

六七九)、ガッサンディ(一五九二—一六五五)、及スピノーザ(一六三二—七七)等是れである。「オッカム(一二八〇—一三四七或は一三四九)及マルジリウス以降、ルソー、カント及びフイヒテに至るまで、此契約説は哲學的國法を支配した」(註三)。エピクロスの功利的契約論によつて要求實行せらるゝが如き個人の機械的原子化は、今日に至るまで、ストア流の個人の力學的社會化と對峙して氷炭相容れない。是に於いて一方、「人は人に取りて神」をその標語と見做すことを得べきストアの社會學と、他方「人は人に取りて狼」の公式を以て主要動機と稱し得るエピクロスのそれは、天地懸絶、其間また何等の調停的仲介者を容るゝの餘地無きかの觀がある。然かも進化主義的社會學は社會進化の出發點に關してエピクロスを正しと爲し、その爾後の進化階段に就いては、之に反してストア派に賛同することによつて、此兩者の間に和解を成立せしむることを得る。進化の原則は之によつて、首尾善く、契約説と交代する。此原則に隨へば、人間性質の社會化は一個の(實際には締結せられない)國家契約による妥協ではなく、人間感情の進化の精神發生的產物として現はれるものである。今日にありても依然として舊弊なる法律哲學者の「シボレテ」(敵味方を識別すべき言葉)を爲して居る彼の兩派の理論の社會學的錯誤は、双方とも現今の人間の性質を以て依然たる猿人の性質の摸寫であるとする點に之を求むべきである。人間性質の起原と現在の状態とは決して合致するものではない。進化論は吾人に教ふるに、一個人の發展経路が、緩漫なる併し乍ら不斷なる繼續に於いて其の起原から遠ざか

り、最後には、件の個人がその遠祖との間に全然共通の形相を示さざるに至る場合の枚舉に遑あらずることを以てする、故を以て、曩にエピクロスによつて機械化せられたる社會的個人は、猿人として出發點に立つものであり、ストアによつて社會化せられたる個人は、之に反して人類の社會的進化に於ける比較的高級なる階段に立つものであるとの假定は、決して之を妨げない。

四、宗教各派の社會哲學

此兩方向の所屬者を點檢するに、吾人は最も驚くべき思想の交錯撞着に直面する。歴史の諷刺劇は茲に極めて奇異なる高跳に於いて自ら快として居る。宗教改革時代の法律哲學が、メランヒトン(一四九三—一五六〇)に於いて、國家を以て侵すべからざる神の施設とする煩瑣哲學的見解、更に甚しきは、官權を以て眞に神の使とする見解に、必死と爲つて縋り着いて居る間に、イエズイートン教徒は、恰も彼等がエピクロスの門下生である如くに、國家を「人間の作爲」と罵るのみならず、百尺竿頭一步を進めて、民衆主權を宣言し、暴主誅伐を宣道して居る。ルードヴィクス・モリーナ(一五三三—一六〇〇、「正義と法律」の著あり)、ペラールミン(伊太利のイエズイートン教徒、一五四二—一六二二、「法王の權力」フランツ・デアールス(一五四八—一六一七、「法律及立法者神」)ジュアン・マリアナ(一五三七—一六二四、「君主と君主の施設」)等は、イエズイートンの教旨を擴張して、國家が自ら神

聖ならんが爲めには、先づ神の施設たる教會の允可を受くることを要すと説いた。即ち、プロテスタントが、各々の國家を神意に依る秩序の直接なる流出と目したるに反し、イエズイータンは唯だ加特力教を奉ずる君主の治下にある國家のみが然りとなし、随つて、利生の靈驗唯一無二なる教會よりの認可を缺いて居る新教團は、畢竟彼等より見て人間の作爲物に過ぎなかつた。斯くて、社會哲學的活動は、加特力教徒の著者に於いて専ら自己の修養完成に努むる新教徒に於けるよりも多かつた。即ち、ヨハネス・オルデンドルフ（「自然法國際法及民法入門」）、ニコラウス・ヘミング（「明確なる方法による自然法」）及びベネディクト・ヴィンクラ（「法律原理五卷」）の如き、第十六及十七世紀に於ける新教徒の法律哲學者は、衆口一致、自然法を以て神の法律と定義し、理性は人類墮落以後、唯だ十誠によつてのみ之を解釋することを得るものと爲して居るに反し、一方、加特力教徒なる法律哲學者フエルディナント・ヴァスケス・メンハカは其著「反對論」三卷に於いて、正しき理性が人類に本有のものなりとする、正真正銘のストア的標識を以て、自然法の基礎と銘打つて憚らなかつた。此自然法は、神と雖も尙ほ且つ之を動搖せしむることが出来ない。人間は社交的動物として、又國家は専ら功利的に社會的利益の生産物として、示されて居る。更に彼が私有財産 (*meum et tuum*——吾が物及汝の物) を否定し、之に代ふるに、直ちに財貨共有を以てせんと主張したることを附言すれば、吾人は所謂「社會問題」の最初の微風を、這個の加特力教徒の法理學者に於いて、當時の新教徒的法律哲學の文獻全

部を一括したるものに於けるよりも、遙に明瞭に看取し得ることの證據を見出だすことが出来る。而して其の如何なる動機より出でたるかは措いて問はず、此加特力教の前衛は新教徒によつて再興せられたるアウグスチヌスの「神の國」に對して、巧にその堅壘の一角を破壊するの功を成したものであり、問も無く新教徒の側よりも應援を得るに至つた。

五、モナルコマッヘン其他

所謂「モナルコマッヘン」の徒（第十六世紀に於いて専制君主制を攻撃したる、佛國、蘇格蘭、西班牙諸國の文士連の總稱）も亦、「世俗的國家」の攻撃、並にイエズイータン側の人民主權の宣布の爲めに興味ある遊撃軍たるを失はない。此等文士中茲に重立てる者を擧ぐれば、プレスビテリアン派のブハナン（一五〇七—一五八二、著書「蘇格蘭の國法」一五七九）、ユーグノー派のユーベル・ランゲ（一五一八—一五八一、ユニウス・ブルートゥスの名の下に「壓制君主に對する辯明」一五七九）を著す。獨逸カルヴィン派のヨハネス・アルトウージウス（一五五七—一六三八、著書「政治學」一六〇三）等である。アルトウージウスの「政治學」及び之に後るゝこと六年（一六〇九年）にして現はれたズアーレスの「法律論」によつて人民主權に關する自然法的文獻は、一先づ終を告げた。統一的にして讓渡すべからざる人民主權を國法の原理にまで引き揚げ、人民の「稜威」を宣言したるは彼

を以て嚆矢とする。之に従へば、人民自身が凡ての権力の根元であり、随つてこれは主権者である。(モナルコマッヘンの間にては、民衆を「より高くより強き王者」と稱するを常とした)。其後更に一度此の戦闘的情緒は詩人ミルトン(一六〇八—一六七四)の胸裡に燃え上つた。烈焰を迸らしむる概ある彼れの著「英國民擁護」(一六五〇)はサルマジウス(一五八八年—一六五三年)の「シャルマン辯護」に對して一矢を酬いたるもので、その中に次の如き力強い語句を見る、曰く「吾人の自由は王者より來るものにあらず、又彼等の特徴を具せず、彼等の資にあらず、随つて吾人は自由に關して彼等に負ふところ無し。自由は天恵にして吾人誕生日の贈物也。之を王侯の脚下に委ぬるは冒瀆にして神物掠奪に外ならず」云々。併し乍ら斯くの如く赤裸々に現はれて居る政治的急進主義は、必しも常に宗教的急進主義と提携して進むものではない、後年のフィヒテに似て統治者に對して民衆の権利を代表するを任とする監督者を要求するアルトゥージュウスや、シュタール(一八〇二—一八一六)が「自然法」の眞實の創立者と名づくるフリーゴ・グロテウスや、乃至上述の如く王權に對して民權を熱心に擁護するミルトン等の巨頭は、悉く彼等自身の宗教的ドグマ篤信の基督教徒たること、恰も専ら自己の教會の利益の爲めに弑逆も敢てすべきを説くイェズイタン教徒のモナルコマッヘン文士を髣髴する。この奇怪なる二重靈魂的理論も、かの論理的矛盾と心理的破調に満ちたる時代にありては毫も怪しむを須むない。因習打破の急先鋒たるバラケルズ(一四九三—一五四一)及びカムパネラ(一五六八—

一六三九)、或は近代自然科学の開拓者ケプラー(一五七一—一六三〇)、ガリレイ(一五六四—一六四一)、ニュートン(一六四二—一七二七)、ボイル(一六二七—九一)等も亦、獨斷的信條を固執し、特に最後に擧げたる兩家の如き、晩年に至つては神學的神秘的冥想に耽溺したものである。一方之と反對に信仰寛容の古典的唱導者たるフリーゴ・グロテウス及びジョン・ロック(一六三二—一七〇四)は著しく非寛容的であつた。グロテウスの自然神教者に於けるは尙ほロックの加特力教及無神論に於けるが如く、秋毫の寛假を有しなかつた。之と相並べては所謂「反動に急進的なる」ホッブスが、恰も後年「急進的」なるルソー及びテロリストたるロベスピエールと等しく、無神論者を國家より排斥せんとしたるが如き矛盾も多く謂ふに足らず、亦前に述べたるモナルコマッヘンの徒黨から、却つて矛を逆にして専制主義擁護の爲めに戦ふ法理學上の敵手を出だしたるが如きも、毫も奇とするに足らない。此點に於いては上述のホッブス及びマルジリウス以外、グラースヴィンケル(一六〇〇—一六六六)の「君權論」、フィルム(一六四七)の「族長」が注目すべきものである。特に、後者の如きは、王者の靈魂が、常人の靈魂とは全然其種類を異にする材料を以て神の手に作らるゝと謂ふが如き滑稽なる誇張に趨つて居る。這般の心理的貴族主義に對し、アルチャーノン・シドニー(「政治論」——一六九八)及びジョン・ロックが鋭切なる反駁を試みた。尙ほ嶄然特立する一基の圓柱は伊太利の經濟學者デョーヴァニ・ボテロ(一五四〇—一六〇七)である。各國語に翻譯せられたる彼れの主著「國

家の領域」(一六九八)及びマルサスの人口論の素地を爲したる彼れの人口増殖主義的理論「都市膨脹の原因に就いて」は、科學的國民經濟學の端緒と見ることが出来る。

六、フリーゴ・グロテウス

フリーゴ・グロテウス(一五八三—一六四五)——「個々の國家の爲めの新しき哲學的法律の創建者」(註四)——が羅馬ストア派の明白なる黨與であることは、尙ほ彼れの對敵者ホッブスが、古代に於いて特にエビクロス、カルネアデス、ルクレシウス等の信奉せる功利説の確乎たる代表者であると同様である。グロテウスは、既にアリストテレスが教へて、ストア學派が之を心理的に説明したる、人間の本然的社交衝動——彼は「社會的天性」「社會的欲望」の語を用ひて居る——から出發する。之に反してホッブスは、後期ソフィストに於いて既に現はれ、トッキデス、オイリビデス及びアリストファネス等第一流の作家に於いて光彩ある描寫を見出だしたる如き「力即權利」説を採つて居る。グロテウスに取りては人間本然の社交性が凡ての法律の原則である。人間性情の社交性に伴ひて生ずるものは「自然法」であり、而して、自然法なるが故に、恒久不變にして絶對的拘束力ある妥當性を有する。「自然の法律は、理性の命令である。此命令は、或る行爲が理性的なる自然其自身と合致するか若くは、之を反駁するかに隨つて、該行爲の中に道德的必然性若くは道德的醜悪性の内在すること

を示し、又神が自然の創造者として、斯くの如き行爲を或は命じ或は禁ずる所以の理法を示すものである」(註五)。……「自然法は神によつてすら變更せられ得ざる程、恒定不變である。」而して自然法の章條は、「假令神が存在せざるも」尙ほ且つ、絶對無條件の普遍妥當性を有する云々。靈驗無二の自然法に對する這般の獨斷的信仰は、善く百年の久しきに亙つて儼存し、殆ど疑義を挾まるゝことなしに自己を主張した。如何となればグロテウスの熱心なる反對者、例へば神學者側に於いては兩コツェーイ、アルベルテ、及びブッデウス其他、哲學者側にありては就中ホッブス等の學者は、成程自然法の若干の章條に對して之を批難したが、自然法其ものは決して放棄しなかつたからである。グロテウスは眞に千古不滅の功業は、國際法であり、而して之に關してはアルベリクス・デ・エンティリス(一五五一—一六一一)が彼の先驅者である。併し乍ら此等のことは今茲に言及するの要を見ない。唯だ彼れの國際法に就いて是非とも一言して置かなければならないことは、彼が國際法の主要條項を、自然法から抽出して居るといふことのみである。

又、グロテウスが、社交衝動の觀念——此觀念の故を以て彼及び彼の隨從者は「社會派」の名稱を冠せられたのである——に於いて直接にストア學派から出發すること、尙ほ「自己保存の衝動」力説に於けると同様なることは、今日定説として動かざるところである。セネカの諸作、キケロの「目的論」(第三の五以下)特に亦その「義務論」——此書が、パネテウス(紀元前百五十年頃の人、ロ

ドス島の産、ストア學派)の一著述の自由翻譯に過ぎないことは周知の事實である——は、グロティウスがその自然法理論を掬みたる源泉を爲すものである。グロティウスに随へば、「自己保存の衝動、並に此衝動より發する力の應用は、他人の權利を侵さざる限り是認せらる」(註六)。グロティウスの自然法の解説者として最も著名なるザムエル・フォン・ブーフエンドルフ(一六三二—一六九四)——「自然法及國際法八卷」、一六七二。「人間及市民の義務」(一六九三)は、自然法の傳播については異常なる功績を示したが、その深き研究といふ點に於いては殆ど謂ふに足るものを示さなかつた。彼は眞正なる折衷家の方法に従つて、此の相容れざる兩敵手グロティウスとホッブスを居中調停し、ホッブス式自然法の一抔の色彩を有するグロティウス式自然法を講ずる。即ち彼は、グロティウスの社交性衝動を採り入れつゝ、然かも之を利害觀念に遡源せしめ、更に進んで恐怖と不信との中に人間社會生活の最後の根柢を認めて居る限り、此衝動に利己的色彩を與ふるものであつて、即ちホッブスと相通することを示して居る。

七、 トーマス・ホッブス

ソフィスト、エピクロス及びカルネアデスに由來する自然主義的政策は、マキアヴェリ以後トーマス・ホッブス(一五八八—一六七九)に至つて初めてその典型的代表者を見出だした。ホッブスの有名な

る國家哲學的著作たる「市民の哲學的要素」(一六四二)及び「レヴィアサン、或は、教會的及市民的國家」(一六五一)の外に尙ほ「自然的及政治的法律の要素」及び「ベヘーモート」(本書は英國革命に關する議論である)等を検討する。

凡そ社會的共同生活の主要任務は、個人の幸福と全體の幸福の調和的平均にありとする、功利主義的基調は、ホッブスとベーコンとに共通して居る。但しベーコンは、人間の社會的性情に對して、後のホッブスよりも遙に廣濶なる活動範圍を與へた。而してベーコンが社會哲學的問題に對する態度は、唯だ警句的及び——かの「ノヴァ・アトランティス」の小説に於いて——空想的に之を取扱つたに過ぎなかつたので、彼を友人と頼み保護者と仰いだホッブスも、社會哲學といふ點に於いては彼より學ぶ所、之を彼れの哲學の爾餘の部分より學ぶ所に比すれば遙に少なかつた。とは謂へホッブスが、彼れの時代の明瞭なる特徴であるところの「アリストテレス直後の哲學への歸還」と稱し得る傾向を、ベルナルデイノ・テレシオ(一五〇八—一五八八)及びベーコンと共有したことは事實である。即ちホッブスはその功利的國家論に於いて、特に希臘の大歴史家トッキディデスの研究より生じたるその「力即權」説に於いて、直接にエピクロス及ルクレシウスに遡及したが如く、その感情論に於いては正にストアに復歸したからである。而してソフィスト一派に於いて頗る重要なる役割を演じた「自然狀態」の古い主義も亦、ホッブスに於いて顯はれて居る。而して最後に彼が自然法の立場を嚴守したることは、その偉大

なる敵手グロテウスと共通するホッブスの獨創的業績は、此等の難多なる哲學史的要素の興味ある結合に存する。彼れの比倫なく鋭き頭腦は、よく唯物的、機械的前提によつて絶對的君主制の正當を證明するの功を成した。

吾人の權利範圍は吾人の權力範圍を越ゆること能はずとするマキアヴェリの教理より出發しつゝ、彼は人間が無條件に自由なる、而してさればこそ、その權力要求——ニーチェは之を「力への意志」と名づけて居る——が無制限であるところの自然状態に於ける凡ての人の平等を宣言する。是れ、「凡ての人の凡ての人に對する戰鬥」の生ずる所以であつて、而してこの戰鬥は、「人は人に取つて豺狼」の當然の歸結である。

猛獸の如き猿人を家畜の如き人間に馴致したるものは、アリストテレス及グロテウスの説くが如き社交衝動にあらずして、自己保存衝動、危害に對する恐怖及び自己の利益に對する憂慮である。凡ての人の凡ての人に對する戰鬥を避くる唯一無二の方法は、各人が彼れの力の及ぶ限り擴張したる自然の權利を、凡ての他の人も此の本來の權利を、強制力を附與せられたる國家の爲めに一樣に放棄すべしと謂ふ豫想の下に、放棄するにありとホッブスは説いて居る。

抑も正と謂ひ不正と謂ふことは唯だ國家の埒内に於いてのみ存在し得ることである。蓋し人が或者に對してなしたる行爲が不正であるといふは、兩者の間に一個の契約が締結せられたる場合の外には

適用し得ざることであるが故である。國家權力に十分なる效力を附與せんが爲めには、國家權力が一個の統一的なる意思によつて支配せらるゝ唯一個人の人格に集注せらるゝことを要する。「日輪王」ルイ第十四世の「朕は國家也」の一言に於いて最も確に表現せらるゝ絶對的君主の主權は、斯くの如くにして曩にモナルコマッペン一派の所謂「人民主權」を完全に吸収し了る。國家、此の大なる吸血鬼、何物をも貪り食うて飽くことを知らざる此の怪獸「レヴィアサン」は、唯一の者の自由の爲め、即ち國家を「レヴィアサン」の書に叙述せられたる施政原則に隨つて統御する意思と權力とを有すべき、かの理想君主の自由の爲めに、一切の個人の自由を嚙下して憚らない(註七)。以上がホッブスの觀たる國家の大意である。

八、スピノーザ

轉じて大陸に至れば、就中スピノーザ(一六三二—一六七七)がホッブスの原則の爲めに其途を平坦にした。即ちデカルト(一五九六—一六五〇)は、彼が僅に國家及び法律哲學の問題に觸れたる場所、即ち彼の「感情論」に於いて、社會哲學の根本問題を無關心に通り過ぎたるのみならず、——ライブニッツの皮肉評に隨へば——此論文に於いて單にセネカ及び晩期ストア派を描寫するに過ぎざりし間に、スピノーザはホッブスによつて凝成せられたる思想を、彼れの社會哲學的考察の中心に押し

出だした。スピノーザの「倫理學」の社會哲學的脊柱を成すものは、「彼のものは保存せらるべし」である。「本體」(神即自然)すら、「神がよつて以て彼自身を愛する所の無限の愛」を以て満たされて居る。之よりすれば「本體」の「様態」であるところの人間が、本體によつて大規模に有せらるゝこの自己愛を小規模に示すことは、毫も怪しむを須むない。而して神が、凡てのものに對する權力を有するが故に、又凡てのものに對する權利を有するが如く、個々の人間にありて彼れの權利範圍は、彼れの權力範圍と一致する。而して延長といふ屬性に於ける一様式としての人間の、その力を無限に擴大せんと欲する努力に對し、思考といふ屬性に於ける一様態としての人間の精神的性質の中に、知識を無限に擴大せんと欲する努力が並行して居る。而して凡て此等の「力の單位」間に、相互衝突が避け難き時に當り、凡ての人の凡ての人に對する戰鬥を防止する唯一無二の血路を示すものは、國家契約である。即ち、スピノーザの感情論に隨へば、一個の感情を支配するには必ず他の感情を以てしなければならぬとせられて居るが如く、彼れの社會哲學的見解によれば、或個人の自然なるが故に亦正當なる利己主義は、常に唯だ他の個人の利己主義によつて之を制肘するの外は無い。然かも此の極めて顯著なる利己主義の苗床から、スピノーザの「神に對する知的愛」の中に無限の廣さを包括する情操高き愛他主義の花が咲き出でたのである。世間に有りふれた月次の博愛主義者が、日々行事として、吾人は隣人と共に感ぜざるべからずと説教することが抑も何の意義を有しようぞ。然るにスピノーザは

神、萬有、換言すれば、凡らゆる造化が悉く吾人と本質的に、血縁關係あるものなるが故に吾人は彼等を無限の愛に抱擁しなければならず、而して吾人が彼等を愛するは即ち自ら愛する所以、反對に自ら愛するは即ち彼等を愛する所以であることを、「幾何學的に」説明して居る。而してホッブスに隨へば、恐怖が、彼れの國家構造に於いて單にその門口に置かるゝのみならず、亦その高塔の絶頂に置かるるに反し、スピノーザにありては、恐怖は成程社會心理的に國家構成の出發點に立つて居るが、併しその終點に至れば、それは神に對する凡てのものを包括する愛に推移する。又國家の目的は、ホッブスに隨へば凡ての人の休息と一個人の自由とであるに反し、スピノーザに隨へば、凡ての人の自由と一個人の休息とである。個人の天賦の利己主義に對する萬能樂は、ホッブスにありては靈魂的束縛であり、スピノーザにありては個性の解放である。換言すれば前者は最も嚴苛なる良心強制、後者は自在無碍なる思想自由である。

九、ライブニッツ、ロック、モンテスキュー

其他の啓蒙哲學者

社會的自己主義の立場は、ホッブス及びスピノーザによつて共通に代表せられて居るが、然かも之に對する解釋説明に至つては、兩者の間氷炭相容れざること斯くの如くである。而して此立場は二個

の戦線から攻撃を受けて居る。英國に於いてはケムブリッジ學派に屬する新プラトン主義者、即ちラルフ・カッドウォース（一六二七—一六八八）、ヘンリ・モーア、サミュエル・パーク、兩ゲール等、獨逸に於いてはライプニッツ（一六四六—一七〇四）及び其徒——トマジウス、クリスティアン・ヴォルフ等——是れである。英國のプラトン主義者は主として神學的武器を利用した。ドグマ的要素を以て頭尾に徹する彼等の對ホップス社會哲學的論難を見る時、吾人は恰も、自然と人爲との古來の爭論を目睹するの感を禁ずることが出来ない。之に比すれば英國の道德哲學者、カムバーランド（一六三二—一七一九）、小シャフツベリ（一六七二—一七二三）、バトラー（一六九二—一七五二）、ハッチェスン（一六九四—一七四六）、ファーガスン（一七二三—一八一六）等は、全然別個の内容を有する。

カムバーランドはフリーゴ・グロタイウスと共に好意、愛他的傾向を以て人間性情の源本的且つ構成的なる要素たること、猶ほその利己心の然るが如くであるとする。又ハッチェスンに隨へば、吾人が全體の一部分なることを感ずる時にのみ自我愛は正當である。常識哲學の此等代表者は、精神的發展を促したる點に於いては、寧ろ偉大にして獨創的なる諸思想家を凌駕するものがある。獨逸の啓蒙哲學（メンデルスゾーン（一七二九—一八六）、ライマールス（一六九四—一七六八）、ニコライ（一七三三—一八一二）、エーバーハルト（一七三九—一八〇九）、ガルヴェ（一七四二—一七九八）、アプト（一七六一—一七四一）、エンゲル（一七四一—一八〇二）、テーレンス（一七三六—一八〇五）其他）は、英國道德哲學の

範圍を出でず、而して獨逸古典派も——就中レッシング（一七二九—一八一）を筆頭として同じくその影響の痕跡を示すこと鮮くない。此等の諸家の人間性情の構成的根據としての「同情」の教理は、殆んど啓蒙哲學の全線を通じてこれを見ることが出来る。佛蘭西「百科全書編纂者」の中此哲學系統に屬するもの、數は、英國の自由思想家中のそれに比して少くない。かの徹頭徹尾利己主義の原則を以てその經濟體系の前提とするアダム・スミスすら、尙ほ且つ倫理觀に於いては最も強烈に、同情の教義を主張して居る。

ライプニッツ（一六四六—一七一六）は「辯神論」の著者としての彼れに對する世人の當然なる期待に反して、社會哲學的問題に多くの興味を寄せなかつた。此世に於いて、何故に惡人が屢々幸福を享け善人が屢々厄災に遭ふかの千古の疑問——辯神論の根本問題——が、社會哲學考察に對する強要的機縁を包藏するものであることは萬人の胸裡に浮ぶべき考である。何となれば現今當面の「社會問題」即ち、額に汗して勞働する者が、生産せらるゝ享樂財の總量に於て比較的極僅少なる分前を得るに過ぎず、之に反して徒爲遊食の資本家が、莫大なる分前を私するは何故かの疑問の心理的導因は、畢竟「辯神論」の古い旋律に對する一個の新しき經濟的歌詞に外ならざるが故である。唯異なる所は、「辯神論」に於ける神の正義に代ふるに、社會的正義の問題を以てするに過ぎない。而して、苟も民族心理の廣野に對して一隻眼を具し悩める人類の深き呻吟に對して聴き耳を有する者は、必ずかの神の正義

といふ形而上學的問題の覆面の下に、人間の正義といふ社會的問題を認め且つ微妙に感得し得るであらう。辯神論は單に社會的世界苦の重苦しき形而上學的表現であつて、謂はばその一番鶏の聲に外ならない。

然るに斯くの如き社會的世界苦に對して、樂觀主義者ライブニッツは、之を感受すべき何等の器官を有しなかつた。「豫定調和」の世界にありては、大衆の窮苦も亦神慮によつて確定せられ、單子の自己發展に内在し、隨つて必然的にこの發展に伴ふて生ずるものである。それ故に自然に順應する社會的發展を改革によつて阻止し、かくして豫定調和によつて確定せらるゝ單子の運行に抗爭せんと欲するは、頗る無謀なる企圖と謂はなければならない。斯くの如くにしてライブニッツの「單子説」の埒内に於いては、社會哲學を容るゝ餘地無く、ライブニッツの如き者に取りて、「社會問題」は到底問題であり得なかつたのである。畢竟ライブニッツは、彼が大いに讚美したる（ゲルハルト編、「全集」第七卷四九八頁）フリーゴ・グロティウスの境を出づること多くなかつた。超越的樂觀主義は例へばマルクス一流の歴史哲學的決定論と同様に、社會學上麻痺的に且つ誤用されたる鎮靜劑の如き作用をなす惧がある。若し發展進化の過程が果して確定——ライブニッツにありては、神意に出づる「豫定調和」によつて、又マルクスにありては自然過程の機械的因果律が規定する「事物の客觀的進行」によつて——せらるゝものならば、社會的個人を十分に刺戟して、その時代の社會的任務に對して犠牲的協力を促

すことが出来なくなる。故に社會的個人の緊張力を強め、之を極度に發展せしむる刺戟と爲り得るものは、決して超越的樂觀主義に非ずして、社會的樂觀主義あるのみである。ライブニッツに従へば、世には勞働しなければならぬ「本來」の奴僕といふ者があり、彼等の勞働の餘剰は主人に屬する（グーラウエル編「自然法論」第一卷四一五頁）。ライブニッツの法律哲學的論文に於いて、其處此處に漫然發せられた社會哲學的思想の斷片が散在することは謂ふ迄も無い。併し乍ら社會哲學以外の範圍に於いて彼れの八面玲瓏たる精神が持立する程の高處に、彼れの社會哲學を獨立せる理論として完成することは竟に不可能であつた。

既に其師匠より社會哲學的に多くを期待することが出来なかつたとすれば、況んやその徒弟末流に對して、全然何物をも望み得ないことは極めて當然である。法律哲學に於いてライブニッツも亦、示したる幸福主義的特征は、トマジウス（一六五五—一七二八）に至つて一層顯著である。彼に取つて幸福が凡ての道德の原則である。此幸福主義はライブニッツ哲學の通俗的完成者たるクリスティアン・ヴォルフ（一六七九—一七五六）にあつて稍々醇化せられた。彼に取つて凡ての法律は認可規則である。その基礎はヴォルフに従へば、幸福の唯一の源泉であるところの自己完成の道德的義務である。而して自己完成と相並んで、他人の完成も亦道德的義務である。其處には、天賦にして讓渡すべからざる人權がある。ヴォルフは全然、當時全盛の啓蒙哲學の意味に於いて、自然法を神學から無二無三に分